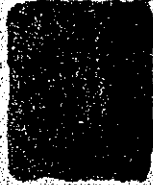


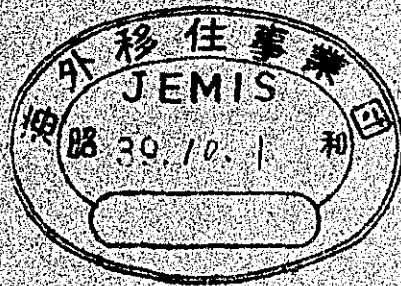
＝ポルトアレグレ支部資料シリーズ（その1）＝



D-9

南大河州邦人農の現状と

その改善策



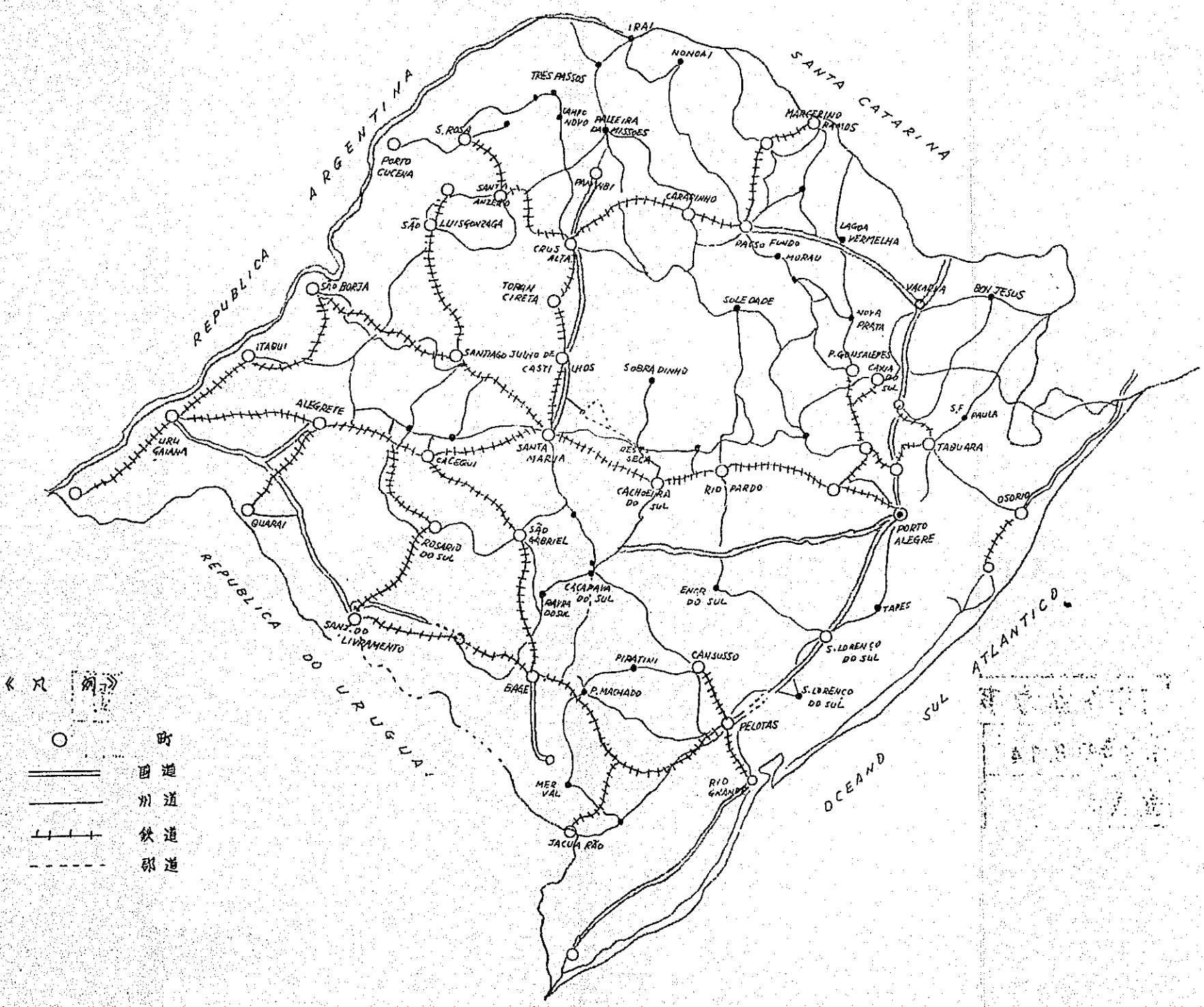
日本海外協会連合会 ポルトアレグレ支部

AV. INDEPENDÊNCIA, 1211 (C.P. 2698)  
PORTO ALEGRE R. G. S. BRASIL

*Kawachi*

国際協力事業団

受入 月日 '84. 8. 14	703
登録No. 02946	817
	EA



《凡例》

- 町
- ==== 国道
- 州道
- ++++ 铁道
- 索道

# 南大河州邦人営農の現状とその対策

## 《 目 次 》

### 《 発刊のことば 》

- オ一章 南大河州に於ける近郊邦人営農の年代別推移 ..... ( 4 )
  - オ一項 1957年頃迄の蔬菜市場の概観 ..... ( 4 )
  - オ二項 1958年から1959年迄の蔬菜市場の概観 ..... ( 7 )
  - オ三項 1960年以降現在に至る蔬菜市場概観 ..... ( 8 )
  
- オ二章 邦人営農者の現状 ..... (14)
  - オ一項 地帯別邦人の分布状況並びに営農形態 ..... (14)
  - オ二項 蔬菜経営規模の現状 ..... (15)
  - オ三項 入植形態の現状 ..... (16)
  
- オ三章 近郊に於ける主要作物の経営概況と其の特性 ..... (17)
  - オ一項 ト マ ト ..... (17)
  - オ二項 ピ ー フ ン ..... (21)
  - オ三項 キ ュ ウ リ ..... (24)
  - オ四項 ナ ス ..... (25)
  - オ五項 その他の果菜類 ..... (26)
  - オ六項 根菜類と葉菜類 ..... (27)
  - オ七項 馬 鈴 薯 ..... (28)
  - オ八項 甘 藷 ..... (30)
  - オ九項 マンジオカ ..... (32)
  - オ十項 玉 ネ ギ ..... (34)
  - オ十一項 フエイジョン ..... (38)

JICA LIBRARY



1025483[7]

オ四章	邦人近郊農業の当面の問題点とその対策	(41)
オ一節	経営技術上の問題点とその対策	(41)
オ一項	トマトの生産費はどうか	(43)
オ二項	トマト栽培について考えなければならないこと	(61)
オ三項	複合(多角)経営の問題点とその対策	(65)
オ四項	秋の形態の特長	(76)
オ五項	合同組織の推進とその問題点	(79)
オ二節	栽培技術上の問題点とその対策	(84)
オ一項	品種と種苗選抜との問題点	(84)
オ二項	肥培管理上の諸問題点	(85)
オ五章	南大河川農業の将来性についての考察	(89)
オ一項	禾穀穀作農業の再検討とその問題点	(89)
オ二項	玉ねぎ、ニンニク類の生産への考察	(96)
オ三項	邦人畜作経営の経済的意義	(98)
オ四項	当州果樹用土の現状とその問題点	(100)
オ五項	酪農経営の意義とその導入について	(106)
オ六項	ホルトアレグレ市場のトマトの需給について	(109)

## 《 発刊のことば 》

当南大河州に於ける本邦よりの邦人移住は、1956年以來、主として蔬菜分  
益農の形ですすめられ、既に今日では、その多くが借地農形態に移行するかど、比  
較的順調な営農の歩みを示して来た。

しかし、伯国経済不況に伴う生産費の高騰、需要量の頭うちなど一連の悪条件  
にも拘らず邦人営農者の生産事業は副期的に軌道にのったために蔬菜の需要  
供給のバランスが大きく崩れることとなり、今やその経営は一大転換を迫られる  
に至っている。

斯る現状に鑑み、当海連ホルトアレグレ支部では、当地方の蔬菜の現状を広く検  
討分析し、今後の営農の指針を見出すべく、その業勢を推進しているが、この間  
出来るだけ實際面の状況を把握することが肝要であるとの観念から、戦後チー  
ン移住者であり、現在ホルトアレグレ近郊に於て営農している笹田教利氏を  
当支部の囑託として起用し、各方面の実態調査に協力願ひ総括的にまとめ  
たのが本資料である。

何しろ立地的に極めて広大な当州であり、参考とすべき諸統計調査資料にも  
乏しく、一部抽象的になった嫌いは認められるし、内容的にも可成り重複する  
面もあるが、これは客観状勢を広い角度からみつめて、問題によっては単一要因  
のみでなく種々複合されている要因をしっかりと把握するのに必要と認めたので、敢え  
て、そのままにしておいた。当州営農者はもとより、本邦より今後当州に移住を志す人々のよき参考  
資料となることを確信し、ここに発刊した次第である。

1963年 月 日

海連連ホルトアレグレ支部

## 第一章 南大河州に於ける近郊邦人営農の年代別推移

南大河州はブラジル国最南端に位するもので、伯国内では最も恵まれた気候風土をそなえている。丁度、日本の九州といった感じである。現在すでに400家族以上の邦人が州内各地に散在して、主に都市近郊に於て蔬菜栽培を行っている。

戦前の日本人移住地としては認識されていず、僅かに州西北部国境近くのサンクトローザに海外興業社による植民地が造成されたのみであった。これはオオ次世 第二次大戦中外国人集団居住が国境近くには認められぬことで崩壊したわけであって、今から考えると極めて残念なことであった。そして1955年11月にサントス港に上陸後、陸路南下して配給された三家族が事実上日本からの直接移住第一陣となったわけである。これ以前にすでに邦人の農業者は他州から転住して極めて安定した、しかも平和な生活の基礎を築いていたものである。今日迄、新旧邦人移住者は首都 Porto Alegre 市を主に各地方中小都市近郊に於て、それぞれ逞ましい生産活動を続けているのであるがこれらの蔬菜市場は時代的发展要素もさることながら、需要供給面のアンバランスを追って邦人移住者が分布して行ったことによっても可成りの変革をもたらしたことは事実で、丁度、聖州に於ける邦人の野菜生産面で獲得した位置と同様に、当州にあつても邦人の築いた現在の位置は不動のものとなりつつあることは、証文の新らしい移住州であるだけに極めて頼もしい発展ぶりといえよう。以下今日までの主として Porto Alegre 市近郊に於ける蔬菜栽培の変遷を年代を追って振り返ってみようと思う。

### 第一項 1957年頃迄の蔬菜市場の概観について

戦後第一回移住者の三家族が当南大河州に入植した1955年末期、そして実際に蔬菜市場で旧移住者の仲間入りをした1956年10月当時の Porto Alegre 市の蔬菜市場を回顧してみると端的に現在の状況と比較すれば、色々の意味で今昔の感がある。

当時同市場を販路として営農をしていた、邦人は近郊に分散していた15家族、これに Rio grande, Pelotas 方面(250~300km)からの輸送用芸家の数家族を数えるに過ぎなかつたもので、所謂、蔬菜用芸の主なる地区といえば São Leopoldo, Canoas, Viçamao, Valem novo, Valem velho, Quaiaba 一帯の首都

*Porto-Alegre* を要する 40~50km 以内の郡であったが、其のうちでも、一応、蔬菜経営としての型を整えたものは、邦人より一部のポルトガル人であった。これらの地方も従来、主としてポルトガル、イタリア、ホーランド、独逸等のヨーロッパ民族によって開拓されたものであるが、その多くは伯国農業の主体をなしている雑作中心の型で一部地理的好条件と自然的条件を活用したタンザク畦状式の蔬菜栽培を行っていたものである。従って、経営の主体はあくまでも総合経営であつて、いまだ企業化されているものは極めて少く、特殊の例外を除いては、殆んど家族労働力中心の経営で近郊蔬菜経営としては極めて貧弱なものであつたといつてよい。栽培されていた作物も比較的粗放栽培に耐える根菜類、葉菜類を中心として若干の果菜類かといわれられた経営であつた。これらの中にあつて在留邦人の多くは、先天的に恵まれた器用さと、勤勉さを發揮し、彼等の野菜経営の中に於いて果菜類の経済的比重はよく大きく、よく進んだ栽培技術で特に頭角をあらわしていた。

このように、当時の邦人に対する信用は蔬菜用芸に秀でた民族としての地歩を印しつつあつた。このように近郊の蔬菜生産も比較的のんびりしていたのであるから、市場の需要供給のバランスは、平均して保たれていて、時期的には程度の不足をもたらして法外の高値をよび、しばしば営農家をよろこばせたものである。この裏、当時の市場が戦後の伯国社会経済の急速な発展と共に *Porto-Alegre* 市人口の増加もめだつてまたし、そのための消費量も可成り大きく伸長していたのであるから、年間を通じての近郊農産物価格は、非常に有利な地位を保ち、営農の安定さと気易さが充満していたわけである。そして当州の気象條件に特殊性があり、夏季の高温乾燥、そして冬季の寒霜害更に晩冬から初夏にかけての曇雨量に対して概ね天気まかせの営農が続けられ、そのために市場の入荷量に大きな「フルイ」が生じたものである。これに対して邦人農家は、概ね手で行事化された原始的(或は自然的)作付に経営の改善策を見出し、端境期をねらつての努力を注ぎ、このために経営規模に於ても若干拡大された生産増強策がとられ、専業としての蔬菜用芸経営を確立したことは当時としては特筆すべき事であつたわけである。この様に当時の *Porto-Alegre* 市蔬菜市場は概して生産者に有利に展開されていたものである。

然るに、常により進歩的な営農をすすめてゆく邦人等に刺激されて、一般の生産者も逐次、生産の増強をはかる興運が生れ、時によっては極めて無尋常な作付がなされ、遂に豊作飢饉の現象を招く争が始まり、多量の野菜が販売しつくされずに終ることが見られるようになった。



特に冬期に於ける根菜系類に於ては、しばしば此の現象があらわれたものである。この裏は、野菜類が一般的には極めて有利な作物であると認められながらも、なお且つその後の専業農家へ伯国人をふみ切れせなかつた主因の一つとなつてゐるものである。时期的に生産が増強されて品物がたぶつを必然的に価格の暴落をみるような惨状を呈した事は、いまだに野菜の消費量が人口の増加率なみには増加しないし、たとへ、極めて安価になつても大して消費量が増加しないことを生産者に認識させることとなつた。この裏、今日から考えれば、現在のような大消費市場を築くための一つの過程として、むしろよい結果をまねいたと見る向きもある。何故ならば、伯国人の野菜の消費量は従来肉食偏重の食習慣から極めて微かなものであつたし、「有識者即ち金持」といつた軍若い国の社会階級の例にもれず、野菜の栄養学的の意義を認め、それを食用するもののみが氣前よく高価でも野菜を食用に供したもので、従つて、一般的には野菜はおよそセタク品扱され、最も巾の広い中下層消費者には余りかえりみられなかつたものである。当時、野菜の事をウイタミナ (Vitamina) と総称する市民をしばしば見聞したことでも容易に理解出来たわけである。そして現在ですらなお金持ほど野菜を認識してはいるか量的には余り食べていない。たまたま州或は市衛生局あたりの肉食奨励と相まって、野菜の消費量は漸次増加の傾向をたどり、安いならば試してみようとなつたことになり、特に量本位の中産階級以下の階層に於て、その認識が向上しつつあるが、当時は現在から考えればおかしな位、野菜が食卓にあからなかつたのである。

何れともあれ、时期的には一見低価格に抑えられたような生産者の一つの犠牲のもとに野菜の普及が進展したかのような印象をうけたが、その裏は客観的には数年後の今日の如き活潑な市場を築くことになつたことは事實であつて、生産者は、むしろ当時のことは、一つの発展の過程として充分に認めてゐることである。一時的な野菜の暴落があつても当時の多くの生産者が経済的に或る程度安定してゐたし、営農資本は比較的安価であり、その上、一般消費物質もやすくして生活し易い時代であつたので、営農の利潤の度合が相当に高かつたので、実際には、野菜の暴落もさほど農家の神経を萎縮させる程のことはなかつたのである。

当時の市場が上述の通り生産増強に伴う野菜のダブつきは、決して年間のことではなく、あくまでも野菜の生産についての自然的諸条件に恵まれた時のみの一時的な現象であつたし、当時の概しての見方として *Pôrto-Alegre* 市場その他の当州内各中小都市の市場に於ける農産物価格が州内生産出荷量の如何によつて左右されてゐた

どのであり、当時の管業が若干進歩的に進めていたものは、それだけに多くの余剰金を残していたわけである。現在のように他州からの苛酷的な入荷と余りなく、従って活発に動く仲買商人なども数的にも基盤的にも極めて貧弱なものであり、企業としての仲買業も大きくは伸びられないような時代であったわけである。

### 才二項 1958年から1959年頃迄の全上市場概観について

前項でのべた様に当州内農田芸家積みあげになる *Porto-Alegre* 市蔬菜市場が大きな変ぼう期にはいったのは 1958年頃からであって、漸く日進月歩大消費都市的な需要傾向を辿り始めた。即ち、近郊に土地を持っている諸事業家や買本家が積極的に租入との歩合作契約を結ぶことが活発になって来た。これにこたえて 1958年10月 日本海以遠では当州が租入移住地として極めて将来有望であるとの見解にたつて、全会 *São-Paulo* 支部の出張所を *Porto-Alegre* 市に開設してこれに対処することになった。これと共に仲買業者の林立はいよいよ市場の取引きを活発化し、一応、伯国内でも有数の消費都市としての面目を樹立することになった。

斯くのごとく近郊に於ける蔬菜経営の急速な変遷について、その主なる助長要素となったものを拾いあげてみれば次の通りである。

- ① *Porto-Alegre* 市に於ける諸企業が飛躍的に発展し、そのために消費人口が急速に増加したこと。
- ② 野菜食品に対する一般消費者の栄養学的、嗜好上の認識が飛躍的に向上し、特に都市在住者の広い階層にわたって消費が見られるようになったこと。
- ③ 伯国の一般経済がだんだん窮乏し、インフレーションによる諸物価の上昇が目立って来て、比較的値上りをみせない野菜等によって代用又は置換えの傾向が見られた。これは特に澱粉質野菜である甘藷、マンジオカ(アイピロ)、馬鈴薯及び南瓜等の消費量を大きく伸長せしめたこと。消費者階層でも比較的インフレーションに苦しまないという上層階層はさておいて、中産以下の階層の多い *Porto-Alegre* 市では、この部類の菜食導入の傾向が、ぐんと野菜消費量の上にあられたのであって、これは決して栄養学的な認識からのものではなく、半ば追い込まれるような消費傾向であったと云えようである。
- ④ 年間を通じての消費量が概ね均一化の傾向を辿るようになる時期によっては州内の

生産物のみでは需要を満し得ない場合が生じたし、又作物によっては特異な自然的諸条件で生産が不可能であるものや充分の量産が出来ぬものがあるので、この場合、先進州である *São Paulo* や *Paraná* 州産の移入が活発化し、これに乗ずる仲買業者の動きが実質的に急速な伸長をしたこと。

- ④ 州首都 *Porto Alegre* 市場での野菜市況の影響が同様にして州内各中小都市に除々ではあるが殆んど確実に波及し、転送のための販売網が拡大されたこと。
- ⑤ 市場での取引が活発になると当然粗悪品の不利が目立って来た。従って生産者の優品生産への方は野菜の品質改善を推進するところとなり、一応、商品としての野菜生産の第一歩がふみ出され、この実は当然野菜店頭にもよくあらわれ、体裁よく飾られた野菜が消費者の購入欲又は食欲をそそるのに大きな力となったこと。
- ⑥ この時期に近郊に於ける邦人営農家は数的に大巾に増加したのであるが、社会的に邦人に対する感情が、ばく然としたものから極めて身近なものへと変わり、幸いにして、その親近感が、日本人 ↔ 野菜 ↔ 日本人とした異常なまでに発展したことは、決して自惚ではなく、その信用はほぼ確固たるものとなった。そして次から次へと邦人と利益契約を行つた伯国人耕主が社会的、経済的に比較的上位の人達であったので、その宣伝は極めて能率的で、野菜の普及に大いに役立ったこと。
- ⑦ 伯国国土開発推進に伴って輸送陸路の改善は劇的に進み、特に *São Paulo - Porto Alegre* 間の高速度道の短縮完成、そして、これに呼応して、とんとん広げられた *Porto Alegre* を要英とする州内各中小都市との連結網など、より新鮮な蔬菜同芸生産物がより速かに転移送される態勢が出来上り、中央と地方の各都市との物資流通連絡体制が整えられた。このように如何なる僻地といえども都市と呼ばれるところで野菜が出廻るようになった。これに伴行して当海峽連支部では日本からの公募による蔬菜分益農務住者を地方の有力都市周辺の耕地に計画的に配耕したわけであるが、この外、他州よりの転住者なども益々増加して殆んど全部の町の近郊に於て邦人の蔬菜経営が極めて順調に地歩を築いて行つたもので、これによる野菜栽培と野菜に対する認識は極度に高まったこと。

第三項 1960年以降現在に至る概観について

この時期に至り、伯国の一般経済は政情の混乱とも相まって不安定な株相がつづき、平和な、  
 んびりした国民性の一般国民にも漸く生活難の世相をひしひしと感じさせる途に進展する故とな  
 った。こうした情勢下にあつて、津波のように猛嵐をふるう資本主義経済攻勢に対して商工業が  
 必然的に増資したものであるが、悪性インフレーションは年々その度を増し、新しい企業は  
 初期段階に始められたものは、この波に乗じてかなりの伸長を示した。

そして農業経営も大資本による経営は資本主義経済下の必然性として大きく伸びたもの  
 である。然しながら、ひやり中小農業経営は、中小資本企業と共にこうした経済攻勢に  
 常に基盤をやすぶられるところとなり、結局は「資本が足りない、資金さえあれば大きく伸  
 びられる」という、もがきが、ひしひしと感じられるようになった。近郊に於ける営農が、か  
 なり困難を余儀なくされるようになったのは、一つにはこうした経済社会的要因によるものであ  
 つて、当然、近郊営農もある程度の規模をもって資本先行きの過程を辿らざるを得なくな  
 ったものである。即ち、生活費の高騰、その他の生産資材の大幅の値上りに伴う必要経費の増  
 大はこれまでのような小規模営農や単極の比較的低い野菜の栽培では、收支相つくなわな  
 いことが、はつきりして来たわけである。その結果は別項にあらためてのべているとおり、か  
 ぶった単作物営農や、適正規模をふみはずした無謀な経営形態へと営農者を追い込む結果と  
 なったもので、時代のしわざとして現在の邦人の営農形態の現状は理解出来る。

この事は、実は一般消費者の生活難による野菜類の需要及び価格の値打ち又は低下とい  
 う蔬菜市場の不況をよそ目にその生産は、更に拍車がかげられ、結果としては生産過剰として  
 ぶたたび、そのしわざが数倍にもなって生産者にはお返って来ているもので、全くの悪循環  
 となったわけである。ここに至って、一部の蔬菜営農家は主として商業への転入を断行せ  
 したものであるが、これ迄に経済的基盤を固めていた土地所有農家と、そうでないものの経済  
 的隔差は、ぶたたびその隙をひろげてしまったものであつて、現今のように伯国人を含めて、旧  
 移住者と新移住者との間には、経済的に大きな隔差が出ているのを、時代的不運と片づけ  
 るには余りにも残念なことである。より高度の資本を確保するための金融機関の活用につ  
 いて信用物件をもっていない戦後の大多数の移住者及び都市労働者にして不幸にして失  
 したために帰農した新農業者の伯人にとって悪性インフレーション下の農業経営が如何に  
 困難を極めているか、かかる諸般の事情を真剣に考えてみなければならぬ。

近年、特に労力の生産性向上を期して満境期を追いまくる経営にかなりの投資性がみら

れるのは、一応の傾向としては無理もないが、たとえ、資本獲得が容易に出来ても、別の面で生産過剰の現象の激度も高く価格も充分には安定していないので、資本の使途については、余程の注意が必要であつて、決して皮専用にならぬようにしたい。

経営資本の中の肥料或は農薬その他多くの物資については、最近商社側の販売法が農業者側に極めて有利に改善され、その結果、期限付措置払制(4~6ヶ月)がとられたことは、経営資本に苦悩する農家をより企業的な方向へ導いたことは否めない事実であつて、この実は、特に1962年春作の果菜類の如き極めて悲惨な生産過剰を来す助力要因の一つとなつた。

又、近郊のこうした資本に携む軽農家に対して、移住振興会社でも営農資金の貸付を開始したものであるが、これは主として揚水ポンプや動力噴霧機などのように栽培技術安定に寄与したので、営農形態について歩合作農から借地又は独立農へと移住者が移住するのに大きな力となつたもので、その実を極めて満足すべき結果であつた。

要は農業者が諸般の農業事情を科学的に分析して後、営農計画をたてるのでなければ、すべては無為に終わってしまうのであつて、上述のような営農者の欲求をみたす資本貸付などによって、一足どきに農業経営が安定すると早合意をして、むやみにただ生産生産のみでは経営安定は期せられない事を示したものであつて、今後の農業経営技術という実で大きな闘い角にまゐっていることを、はっきり体験したわけである。それは農業を近代化し、企業化しなければならぬのは事実であるが資本主義農業経営に於ける投下資本の強化について大きな問題がひそんでいる事を肝に銘すべきである。

即ち、第一は農園芸経営が他の商工業のようなオ二次産業では、余り問題にならない自然的諸条件の上で営まれるという事であつて、その実、万一天災という大禍がおそいかかったとすれば、それこそ一大事を招くもので投下資本の回収する不可能となり、農業災害保険制度や共済制度の不完全な現実には常に大きな危険と共棲しているわけで、農業がバクチだと云われるのもそのためである。又、その農産物の価格が生産コストを基礎として算出実施される一部の主要食糧作物(米、麦等のように最低価格が保証されているもの)を除いては、生産時期の市場での出廻りによって、概ねその価格が出来るのであるから、やたらに資本を増加することだけが経営を安定させる手段であるとは限らない。特に日々の市場での出入荷量によって、むしろ買手側に値ふみされる事が多い蔬菜類の価格は、生産計画前に於て確信を以て知るよしもないのであつて、専断的に答が出ない農業経営こそ企業の中で実は最も相成

い判断力と科学性がのめられる所謂とここにあるわけである。

全営農家が今もなお、その苦汁の味を忘れない 1962年12月前後に於ける主としてトマトその他の果菜類の惨憺たる暴落は、これらの要素が複合されてもたらされた必然的結果であつたと云つてよい。今や市場は活潑にはなっているものの入荷量の大小が極めて大きなものとなつており、それだけに市況は入荷量に対して極めて敏感に動いているのであつて、それだけに個々の営農家は以前にもまして真剣な政策がねられているにちがいないが、それらの政策を成功に導くためには、刻一刻変転してゆく諸般の情勢分析把握が必須であり、もやみにひたひたの方針を打ち出して進むことは大いに快しむべきであらう。市場の動き及び生産者の動静把握についての積極的な努力がなされなければ科学性に立脚した営農は確立されらべくもなく、いつまでも、市場であしらわれる悲愴な農業者の宿命を負わされることにならう。

それには、協同開拓の態勢が必要であり共同研究、共同販売といったような一連の生産者自身のスクラムがのめられるわけ、このことこそ唯一つ残された解決策であるといえる。

ポルトガル人人口の年度別推移

(リオ・グランデ・スル大学片岡経済学  
研究所資料による。)

年 別	人 口	人口増加指数
1948年	366,791人	100
1949	380,236	104
1950	394,250	108
1951	413,494	113
1952	433,784	118
1953	455,069	124
1954	477,399	130
1955	500,825	137
1956	525,401	143
1957	551,182	150
1958	578,479	158
1959	606,706	165
1960	636,479	174
1961	667,710	182
1962		
1963		

地域別邦人数

(1962年12月海産省(現農水省)調査)

地 域 別	家 族 数	単 身 者 数	合 計 数
ホルト・アレグレ近郊	221	88	309
ペロツタス	30	6	36
サンタマリア	34	4	38
リブラメント	8	2	10
バジエー	7	1	8
イジユイ	4	2	6
その他の地域	63	63	126
農業以外	83	64	147
合 計	450	230	680

年度別農業及び工業の生産指数の推移

(リオグランデ・ドス・リオス州農林院資料1962.29-33)

年 別	農 業 生 産	工 業 生 産
1949	100	100
1950	101.5	111.4
1951	102.2	118.5
1952	111.5	124.4
1953	111.7	135.2
1954	120.5	146.7
1955	129.8	162.3
1956	126.7	173.5
1957	138.5	183.2
1958	141.3	213.2
1959	148.8	240.7
1960	154.0	266.3
1961	169.7	289.2

ホルトアレグレ市近郊における邦人農家数

調査時期	項目	家族数	単身青年数	合計労働者数	備 考
1956年1月		15	1	16	戦後才ノ回帰者 3名
1957年1月		15	24	39	
1959年3月		92	69	161	海陽産出振付 1958年10月 期 設
1960年3月		95	85	180	
1962年8月		215	116	331	

ホルトアレグレ近郊田芸者協会会員数

(田芸者協会調べ)

1959年4月	450	会員証保持者でない市場に入場せなった。
1962年12月	950	田芸者の数は実際は、この数より、はるかに上回っている。

労働者最低給料の推移

(月額CRカ)

1955年	1,800
1959年	5,000
1960年	8,000
1961年	11,200
1962年	11,200
1963年	18,300



## 第二章 邦人管農者の現状

### 第一項 地帯別邦人の分布状況並びに管農形態について

当州における邦人の入植目標でその支柱となったものは、都市近郊蔬菜農であることは第一章ですでにのべたところである。従って首都 *Porto-Alegre* 市を中心とする約 100 km の地域内には、1962年8月現在の当海防連支部調査資料では約 220 家族と単身青年約 100 名が管農に従事しており、これらはすべて兼業中心の経営である。そのうち最も集団的に分布するのはグラバタイ郡 (*GRAVATAÍ*) の 51 家族単身青年 11 名を筆頭にしてサン・レオポルド (*São Leopoldo*) カノアス (*Canoa*) エステイオ (*Esteio*) サプカイア (*Sapucaia*) 各郡方面の所謂、連邦国道沿線 50 km に 51 家族単身青年 12 名がこれに次ぎ、これにウイアモン郡 (*Viamão*) の 28 家族単身青年 24 名が主力であつて、この外州内各郡に 10 家族内外が分散している。

このうち、邦人の主作物であるトマトの単作又は中心の管農をなしているものは約 80% を占めていることは大きな特長であつて、これを極めて順調に分益農から借地農へと前進して来たのであるが、中でも前記のグラバタイ郡 (*Município Gravataí*) の邦人は殆んど 100% 借地又は独立農である。このように首都ホルト・アレグリス近郊の蔬菜管農者の年次的増加と相まって州内諸中小都市近郊でも邦人の活躍はめざましく、中でも州の地理的中心に位するサンタマリア市 (*Santa-Maria*) 近郊では、野菜は殆んど邦人が独占している。

そして現在では、すでに耕主との分益農契約を解消して自己資金による借地農家が漸増しつつある状況である。一がこのような野菜作農業は、すべての邦人に精神的に或は経済的に半永久的方針としてうけいられているのではないことから、最近の都市近郊経営の到達している経済的開角の懸念に夫つて、当州農業の本命である禾穀穀作経営に移行しようとする者が続出している。特に水稻作、大豆作、玉モロコシ作、落花生作などの普通作農業で遅ましい実績を収めるものが見られるようになったことは極めてよろこばしいことである。

特に若い開拓斗志に燃える青年達が単独で或はグループで、こうした農業の本命にとび込んで行ったものであるが最近では大家族をかかえて、とび込むようとする家族があらわれ始めたことは誠に頼もしい限りである。当州の邦人移住史が 5 年、7 年、10 年と積み重

ねられると移住者自身、多くの伯国農業事情を学び、移住者としての使命をじっと顧みる時、そこに再び大きく伸びようとする斗志が湧いて来るものである。

これを指導する当海抜連ホルトアレグレ支部では、一早く諸般の状況分析を行い、これらの邦人移住者の進むべき新しい方向に対して指導援助を推進すべく全力を傾けて、業績に当たっているわけである。サンタカタリーナ州 (Estado Santa-Catarina) 政府との提携によるクリチバノス移住地 (Curitibanos) 造成も着々進捗しており、1963年暮には所定の入植が実現するわけで、このほか州西北部イジュイ (Ijuí) 地方の米菽穀作への導入も時間の問題までこぎつけているわけである。

このように邦人指導機関である海抜連支部も、今や業勢的に体質を改善すべき時が来ていることを認めると共に今後広汎な分野にわたっての邦人の進出を推進すべく根本的な方針にメスを入れているわけである。

年度別 邦人移住者上陸数 (リオ・グランデ港)

年度別	家族数	単身数	合計数
1955	2	1	3 (4対)
1956	0	23	23
1957	56	5	61
1958	25	26	51
1959	34	6	40
1960	55	27	82
1961	70	29	99
1962	30	18	48
1963	5	6	11
合計	277	141	418

オ二項 蔬菜生産規模の現状について

邦人近郊営農家の生産規模は、生産の内容如何により、又家族の稼働人員の如何によって極めて多種多様である。先ずトマト中心の営農の場合、技術的に雇用労力に余り期待出来ぬ場合が多く、概ね家族労力中心の営農が行われている。従って土地的な規模は極めて小さい。これは邦人労働力当りの経済的栽培本数は、4,000本位であることから来ている。こんな具合であるから使用す

る農具では耕耘用トラクター等の有保数は極めて少く *Porto-Algre* 近郊では数台にすぎない。これは耕耘のような一時的な農作業のために高価な大農具を購入しなければならない程の意義が認められないからであって、多くは自家用牛馬耕用具より、又雇用の賃働で向に合っているものである。最近になって経営安定策として動力噴霧機、ハンドブライザー、揚水動力ポンプ等の中農具は比商品として殆どどの農家に備えられているが、その他は余りめばしいものは見られない。その代り運搬用トラックは、かなり普及しており前項の 100 km 以内地方でおよそ 40 台を数えている。

中には、分益農家や雇用契約による邦人を導入している邦人も若干あり、この場合は、規模もその確保労力によって拡大されているが最近のような市場事情や経済状況下では大規模経営の実績はあげにくい、むしろ規模縮小の方針が進められていることは注目される。

前述の通り、これまでのところ多くは家族労力を中心の経営がなされているが、しかと大部の邦人経営者の経営の支柱となっている家長が壮年期の半令層であって、概して後力が貧弱で、その農経営規模に大きな制約をうけている、又一面社会的に比較的、新人であるので、その実績は、かなり高く評価されながらも、いまだ金融機関活用のための基盤が出来ていないものが多く、資金的に制約をうける場合も見逃せず、又雇用労力としての伯国人の能率的使用が難しいこと、又場所によっては農村労働者が非常に不足しており、たやすく得られないことも制約因子になっている。

### オ三項 入植形態の現状について

当州への邦人移住者導入が言語風俗習慣及び諸経済事情もよくわからないものであるにも拘らず、最初から分益の形で始められたことは、聖州その他の邦人移住の活発な方面の入植形態に比べて極めて画期的なことであつたわけであるが、それに判裁されて陸続として日本から或は他州から転移住の道がひらかれたのは持筆すべきことであつた。然しながら最近では前項に於いて若干述べたように当州移住至極の最大の特産であつた分益農形態も耕主及び分益農者双方に後述の特別な場合を除いては余り意義が認められぬところか種々の手ちがい誤解莫から、しばしば紛争を惹起したりして、そのために移住者も大いに迷惑したし、又耕主側にも、相当な迷惑をかけた例は決して少ししないところである。近年に至つては耕主の投入資本の割合に生産物価格が時期的に安定しないことなどで、一、二作あたりは共同経営とし

ての実績が余りあがらず、双方大きな期待はずれをみることも多くなって来たものである。従つて現在では分益農形態は余り歓迎されず漸次小さく伸びのびと進める借地農え、又資本の如何によっては土地購入迄ふみ切つてゆく邦人が増加していることは分益経営の本末の意義からみて極めて好ましい進み方であると云える。

海協連支部及び移住振興会社では両者相提携して、これらの経営移行のために、1952年大市の融資の門戸を開き、これを助成したのであるが今後土地をもっていないために、種々遭遇する困難に対処するため、主として土地購入資金面の融資には最大の努力を傾け、インフレーション下の農業経営安定策として自作農の育成は何よりも大切であるという観点にたつて、今後の業務を集中的に行つて行く方針をとっているわけである。

### 第三章 近郊に於ける主要作物の経営概況とその特性について

南大河州都市近郊に於ける邦人営農者が栽培している作物は、近郊邦人移住史がすでに7~8年を経過するに及んで現在では一応、当國蔬菜市場で取扱われる殆んどすべての野菜について生産が行われている。然しながら数年以前では、邦人の主要蔬菜と云えば、トマトを初めとする果菜類が中心で、その他特に夏季の高温乾燥期の旨味をわらつてのチンジャを中心とする若干の葉根菜類が教えられたものである。最近、単作経営の経済的基盤がゆすぶられて今後それぞれの営農家は漸次種々の作物をとり入れた複合経営の必要性に迫られているのであるが、その場合、経営規模、家族労働力構成、営農形態その他種々の自然的、地理的立地条件等によって、組み合わせられるものが決められると思われる。そこで、それぞれの主要作物について特に念頭において考えたい特産について以下順を追つて記述してみよう。

#### オ ー 頂 ト マ ト (Tomato)

再三おられるように、伯國に於ける邦人の蔬菜生産の筆頭をなすものであつて、当州内でも殆んど100%に近い営農家が、本作物を中心に営農を続けているものである。而も当州内各都市近郊邦人が年間営農収入の最大の期待と目標をかけているのは、これまでの一つの

きな特産であった。これは戦後移住した邦人の大部分が、伯国人耕主との利益農契約によつて仕事を始めた時に、耕主が特に *São-Paulo*、*Paraná* 等の先覚邦人によつて築かれた実績に対する畏敬から出発して、特に日本人とトマト栽培を直結した態度でのぞんだものが多く、更に州内各地ですでにトマト栽培で大きな足跡をのこした先住邦人農家の利執も又、この方向に導いたものと考えられる。そしてトマト栽培こそは最も高度の栽培技術と周到な管理作業が必要であつて、蔬菜用芸の粹であるような考え方があつたのであるから、ひとり邦人のみが、この道の適格民族であるという有難い評價が、これを大きく助長していたのである。邦人移住者の中には、在日中、トマト栽培に全然経験のなかつたものが大半を占めているにも拘らず、着伯後の営農一歩をトマトで踏み出す者が多かつた事實は概ね上述の事情を裏づけているものである。そして、これらのかなりはねあがり気味のトマト作に対する内外人の先入感、日本人はトマトを離れては営農がなうたないかの如き方向に邦人を導いたと云つてよい。

さて、トマトは果菜類の中では、胡瓜について多くの労力を要するものであつて、しかも栽培技術の優劣によつて豊凶の差が甚だしいので、胡瓜と共に家族労働力中心に経営されない。優秀な成績は期待し得ない場合が多い。特に自然的条件に恵まれず、トマトの生育に好適でない場合は、激烈な病害発生がしばしばあるので、この場合は人間の患者が愛情をこめて患者に對すると同様な処置がとられなければならないものである。その裏、雇用人の運用に成れない邦人にとっては、大規模栽培については、極めて大きな危険を伴っている。

しかしながら、トマトは本来は極めて性強健な作物の一つであつたもので、栽培のゴツを身につければ、安定作は期し得られるし、労働の生産性は極めて高い作物に仕上げる事が出来るものである。次に経営面ではかなり生産費のかかるものであるが、現在の邦人間の栽培にはまだ、また改善しなければならぬ多くの無駄があることを指摘しなければならない。

数年以前迄は、投下資本に対する利潤の割高、そして多くの移住者の家族構成などの関係もあつて、利益農としてはトマトが最高の収益をおさめたものであつて、現在迄に利益から借地へと順調な転移をしてまた人達は殆んど例外なくトマトを物にした為、その利潤でふみ切つたわけである。特に単身青年の場合、1年に2作のトマト栽培は生活費が余りかからないところから文句なくこれと取組み、予想通りの目標を達成して来たもので、この種の人達にとっては、経営内容としても最も合理的な方向であつたわけである。この裏、現狀に於ても常に優位にたつてゐることは周知かいのないところである。

最近の悪性インフレーションはトマト作が最も多額の資本が必要だけに、その経営は色々の問題をなげかけて来ている。先ず第一に、資本を多くかける割合に、その生産物価額が不安定であるために特に分益農形態について耕主と邦人との間の利益がぐらついて来ていることであつて、今後この種の生産増強策は伯國の一般経済のたなおりによる物価安定がな限り、漸次減少してゆく傾向にある。これまでのトマト生産量は予想以上に伸びて来たもので、特に最近申し合はしたように開かれた生産資材商社の商法上の貸出し制度は邦人農業者に大いによるこはれ、殆んどがこれを利用してゐる。これは生産費中の、25%~30%を占める肥料及び15~20%を占める農薬類について、間接的に金融機関との取引その門が開かれたも同然であるからである。

このように邦人農業者栽培者への貸出又は融資の門がひろげられたことは、邦人に対する信頼と拍まって、その生産活動に対しての信頼から来ている。しかし、ひとつ掘り下げてみると、この生産活動の信頼感、やはり、その主作物であるトマトについての経済的信頼感に基いてゐると見てよい。結果的には今日のように時期的なはつきりした生産過剰をみる破目になっており、トマト栽培者はいうまでもなく、こうした助力を借しなくやつて来た(実際は商業政策であるが)資材業者に対しても、かなり大きな問題をなげかけているわけである。

そして、結論的には、後章の今日の問題点を更にほりさげてのべることとしたいが、要するにトマトは、たしかに投機的作物であるということである。

今日までの邦人のトマト栽培を観察してみると、今後その経済的安定を期するために、今日真剣に検討されなければならぬ実を要約すると概ね次の通りである。

- ④ 時期的に価格の変動が特に大きい巾をとつておるが、特にサンタ・カタリーナ州(Estado Santa-Catarina)及びパラナ、サンパウロ州よりの軟弱入品が活発に動いてゐるので、高価の連続的維持は、かなりむずかしくなつて来ていること。即ち、若し高値の傾向がみられると、必ず他州からの大量入荷があること。これは端境期や高値をねらつてゐるのは、生産者だけでなく、Porto-Alegre市場を舞台とする仲買卸業者をひかへていることを忘れてはならないこと。
- ⑤ 番作トマトに於ては、今後の大方の予想として価格の暴落は激烈である。従つて、邦人の僅かの期間の保証価格を確保することに全力を傾けるべきであつて、この場合、その成否の鍵はオー・花房にかかつてゐるものであつて、栽培技術についての確信がもてぬ限り、この期の経営を安定させることは甚だ難かしいこと。

- ③ 生産地域の拡大及び植付本数の増加は、別の面の見方からすれば、病害の普及が進捗していることにもなる。この意味では、年を遡ってトマトの栽培は常に病害と対決しなければならぬ運命の中にあるわけで、病害防除対策については、かなり科学的知識が要求されて来るので、たゆまぬ勉強が必要であること。
- ④ 栽培の結果、上作を得れば、労力的に最も遅いまわされるのは誘引と出荷作業である。伸長する腋芽の整理の早晩は収量に或は品質に多大の影響を及ぼすものである。更に出荷期の採収、選別、箱詰めなど一連の作業は最盛期に於ては殆んど不眠不休の場合が少なくない。そこで、これらの単柄を総合して一勞効力の経済的な適正本数は、 $5,500$ 本内外である。即ち、換言すれば一人で  $5,500$ 本のトマトを栽培して、収穫期に大重になるような作況のものを得ないと、経済作物としては決して有利な作物とはならないこと。
- ⑤ 連作を忌む作物の代表的な作物であるので、単作経営では、耕地の利用面で行き詰る場合が多々ある。近郊郊人の移動の最大要因である。長期間の経営を計画する場合は、輪作体系の合理化はさることながら、それでも広大な土地を必要とする。
- ⑥ 市場での取引量は、他の何の蔬菜よりも頭ぬけて多い強みを持っている。そのためもあって、この作物中心の営農体系が圧倒的に多いのであるが、現在の需給からすれば、すでに時期的には、大きな生産過剰がはつきりしており、その他の時期でも、概ねギリギリの量の場合が多いのであって、現在の最大の問題は量をあらためて更に再検討することにするが、要するに生産することよりも、先ず、販売面の強化対策をどうするかと云うことである。
- ⑦ 一筆一筆が当地方の慣行トマト経営であるが、この一筆一筆に最近かなり品種期が生じているので、植付期の調整を自主的に行うことは極めて賢明である。出荷時期によって、早熟栽培、普通栽培、晩化栽培、抑制栽培、促成栽培の五種の栽培型について、充分研究されねばならない。
- ⑧ 春作の早熟、普通各栽培型では、果実の肥大期に極度の乾燥期にはいるのが当州の平均気象条件で、トマト栽培者が苦心する尻腐病の発生もこの期に最も多く、又秋作の場合、定植期から生育中期位まで、これは続くのであって、その後には比較的雨量に恵まれるので、灌漑と排水の作業は常に相反する両方を念頭において進めないと、裂果などの原因になりやすい。
- ⑨ 販売出荷対策を強化し、作付前から計画出荷態勢をととのえておかなければ、近郊郊人のトマト栽培は決して安定しない。
- 尚、販売出荷対策推進の如何によっては、需要の最も多い蔬菜であるだけに、その経営経済上の王座は守られる筈である。

## オニ項 ピーマン (Pimentão)

近郊管農でトマトに次いで重要な位置を占めているもので、需要の層はゆさわたつている。特に周年需要量がトマトと共に急速に伸びつつあるので冬季の当州産のものが姿を消した時はパラナ、サンパウロ各州よりの輸入も非常に活況になりつつある。これはピーマンが単にサラダ用だけでなく、肉料理に重要な野菜であるからである。果菜類の中では技術的にも労力的にも最も手のかからない作物であるので経営の主たるものでなく副作物として導入している例は極めて多い。特に最近伯国人の間では前項のトマト栽培が技術的に又経営経済的に不利になつて来たことから、それに代る作物として導入されていることが目立つて来ている。従つて価格も比較的動搖しやすく、概して隔年おきの上下がマークされている。

これは特に伯国人の管農方針が市場の価格を中心にシてしかも価格の高い時は、早くそれをねらう態度がはつきりしていること、しかも生産については、技術的に大して心配することもないので、直ちに実行されるからである。そして最盛期の2月から7月にかけては例年相当な値下りをするのが普通である。しかしながらトマト等の様に余り多くの生産費を必要としないものであるから生産物のコストは極めて低くなり、収入の面では極めて安定した作物であると思はれてよい。ピーマンの栽培状況をふり返つて見る場合、比較的はつきりしていることは、特に促成又は早熟栽培についての価格が極めて有利なものであるということである。これは育苗、特に発芽に好適な温度が果菜類中茄子と共に攝氏24°〜37°であるところから其の育苗技術的に邦人と一般伯人との間に大きな開きがあり、これが端境期出荷の差を決定づけていることによる。多くの邦人は育苗中の低温多湿による苗の伸びなやみをビニールや板框使用によつてカバーしているものであつて、これは戦後の移住者導入と殆んど時期を同じくして出現したビニ-



ルの効用にまつところが大きいわけである。

而して日伯近郊農家が相当の面積を栽培しているにも拘らず、蠅境期の価格が極めて順調に保たれる殆んど邦人の独占するところである。育苗期間も其の施設によつて左右されて普通の従来の方法でビニールなどの利用をしないものでは90~120日と長いものであるから栽培技術の集約性及び生産性はトマトに次いで高い。しかし平均するとトマトは病害による作況に上下はまぬかれないのでピーマンはむしろこれをしのぐ作物であると云つてもよい。1962年春作のピーマンは、作物の経営的、植生的特徴を最も如実に表現したものであつて育苗中に霜害によつて失われた苗数はおびただしく、伯国人の旧来育苗法で来たものは殆んど全滅したし、たとへすぐ蒔き直しても、温度の制約があつて密着に追いつかぬことで愈々その差を大きくしたもので、数十年ぶりの記録だと云われた大霜害から苗を守つたものは極めて有利な生産に終つたわけである。

ピーマンは上述の様に性強健で粗放性に可成り耐える作物で土質なども余り選ばないが良顆を得るには砂質壤土が好適である。特に春作の場合は定植期から生育中期位迄(8~9月)冷雨が続くのが普通であつて、冷え込みがひどくそれだけに生育が鈍つて切角の早出しの効果があがらないので重粘土は避けなければならぬ。肥料設計の如何によつて生育が云々云つた様な事は余り目立たないので、出来れば堆厩肥を中心にして、磷酸質肥料をトマトに対すると同様に重視して加味すれば、生産費の軽減は尚相当に可能である。今後蔬菜経営の中に相当のウエイトをもつて導入されると思われるが、これに當つて以下要約して記述することを充分に参考にしなければならぬ。それは商所得への営農改善策の一つとして導入されるであらうと思ふからである。

④ 現在市場に出廻つてゐる品種は極めて雑多であつて、特に伯国人の間では自家採種による雑ばくな退化したものが目立つてゐる。粗悪品は氾濫してゐるが優良品は少いのであるから、品種の選

根については充分の注意が必要であつて、種の入手では少くしもはつさりした品種を指定すべきである。邦人の間でも現在なお自分が栽培している品種名をはつさり知つていないものも相当数いるのであるが、これはローマンだけでなくすべてのものについてはつさりしておく位の心掛けがなければ月進月歩の新しい農業についてゆけない。

*Pinto Alegre* 市場では現在の適応品種としては徹底的に大顆系品種を選ぶべきであつて、しかも顆揃いのよいものを導入しなければいけない。此の意味では従来の品種では(従来種)物足りなくなつて来ており、最近米国、デンマーク国などより輸入された長顆系のルビー、キング及びカリフォルニア・ソングー種及び其の改良種は羨事なものである。これらの品種は共に在来種に比べて顆皮が平滑であつて光澤があり、しかも肉があつくよくしまるので日保ちがよいので最近其の人気は急速に伸びつゝある。この真はトマト等と共に州内中都市への販路網の拡大に伴いすでに相当数が販出されているし、今後大いに伸びると思われるので、出来るだけ選別を徹底し所定の箱詰め出荷すれば、まだまだ需要は伸びる筈である。こゝらで生産者の積極的な販路拡大の努力を組織的に推進しなければ、絶好の機会をのがすことになるであらう。

③ 乾燥には比較的耐える作物であるが顆の肥大には土壌中の湿度が大きな影響を及ぼす、従つて春季定植したものでも適度の湿度があれば秋迄総り続けるもので、元肥を豊富なる有機質肥料(厩肥)で施しておき、追肥は灌漑と共に実施することが大切である。

◎ 早熟又は半促成による早期出荷を収めたものは、早期収穫によつて、すでに生産費の回収が可能である。従つて最盛期に至つて可成りの値下りを見ても、なお利潤を以て残るのであるから途中で放り出す様なことは慎まなければいけない。若し其の他の併用作物の収穫が時期的に終つて、ローマンだけでは市場に持つて行けない(運賃などの関係で)とすれば、共同出荷便を考える

なり、それも出来ないとするならば枝の切り込みをして次の出荷に与えるべきである。この場合除草、中耕など同時に行つて萌芽を促進する様に窒素質肥料中心に追肥をすれば秋には再び良類が生産されるわけである。其の時期は其の年の市価や出荷便などの都合を考えて行えばよい。

① トマトの生産が時期的に不安定になつて来た今日、これに代るものとして誰でも考えるのはピーマンであろうが今後は生産量も多くなつて来るので従来のような粗放栽培では市場で問題にされなくなると思われる。従つて集約化による増収と優品生産に精進すれば、将来極めて有利な作物となり得る。即ち摘果、整枝、灌漑などにより出来るだけ上物率をあげる様な努力をしてゆかなければならぬ。

#### オ三項 胡瓜 (Pepino) 及び其の他の瓜類

果菜類の中では、瓜類は生育期間の最も短いものであつて、それだけに資本の回収は早いものである。それだけに市場的には価格の変動が極めて顕著である。特に自然的好条件に恵まれた時は、一度に出廻る傾向が強いので或る特定の時期(後述)をのぞいては価格の長期にわたる保合は期待出来ない。従つて現在のところ胡瓜の締成系早生種以外は肥料その他諸生産資材費を多くかけての集約栽培は経済的に余り有利ではない場合が多い。殊に当州の初夏は高温多湿で瓜類の生育に好都合であるので近郊に於ける伯国人が雑作経営の中の一時的現金収入をねらつての投機経営としてとり入れることが多くなつて来たし、彼等の生産が自給肥料中心で、しかも広大な土地をもつて降霜の比較的軽い地帯で適地適作の型で可成り大規模に行なわれる場合があり、これと市場でぶち当たった場合は全くみじめな様相を呈するものである。

そこでこれらの作物を経営の中に折り込む時はオ一に気象条件の優位を活かしての適地適作としてねらうべきであり、若しそれが見込めない時は、最も作りにくい時期に適応品種を導入して取つ

組む方が安全である。今日に於ける胡瓜の晩化、折植栽培は、この策をみだすものとして現在では容認したものである。若し上記の春の増産期をねらうのであれば飽くまで早繰出荷を目標とすべきである。瓜類は極めて大衆的な蔬菜であるために、所謂ハシラの価格は有利に取れりむささ収るもので、増産期に暴落したからそれをやめるなどとは云う態度は、今後の新しい農業と共に進む各農家のとる態度ではない。更に積極的に早出し、又は晩出しの生産技術の確立に向つて前進する様に努力すべきである。

栽培技術面ではこれらの瓜科作物が短日性に乏しいので育苗は十分に行われないと折角のねらいが充分に其の効を發揮出来ず直請のものに追つかれることがしばしばみられる。苗半作で定植時の活着速度で大方の勝負が決するものと考えるべきにならうない。品種としては、やはり早生種を選ぶべきで西瓜 (*Cucumis*) に属する日本種や胡瓜に於ける短日性節成種等はこの点で極めて有利であつて出荷目標時期と品種の研究は今後更に大切な問題となつて行くであろう。病虫害については特筆すべきは初夏に於いてのべん毛、ラドンコ病、それに盛夏期の畝内に侵入して穴をあけるハダニの幼虫に対しての防除対策であつて、この点は伯羅人の栽培が熟練をなしており、特に晩出しの胡瓜などは邦人に負けてはけないのが現状である。

第四項 茄 (*Solanum*)

茄は果菜類の中では最も古史の新しいもので需要量も余り伸びない作物である。伯羅人の中には未だ食べ方を知らないところか名前すら知らないものが多し、都市外では殆んど認識されてはいない等は、このことを如実に物語つてゐる。主としてユルヤ人トルコ人、ドイツ人、イタリア人の各層で多く消費されてゐるもので年々共に相対して際々ではあるが需要量は伸びつゝあつたがいまだ大衆性に乏しい野菜の一種であつた為に経済不振のしわざもあつたからさくつたもので殆んど其の需要は現在では伸びていな

い。

従つて現在の熱帯悪性インフレーション下の消費者の不況が遠く限り、もちろんこれを主作物として考えることは許されないが若干これを導入するには邦人の生産者が数的に増大している今日市場で多分ついて販路に窮する破目にならぬ様注意する必要がある。果菜類中最も生育期間の短い作物であつて、しかも遠方の株に大類を好む市場性を考へると、生産性に於ても余り有利な作物としては期待しえない。

オ五項 その他の果菜類

これまであげてきたものより非市場性に於てめぼしいものとしては豆類がある。特に生育期間の短い菜豆は邦人が常食としていたフエイション (Feijão) の生産技術が幸ば天性的に優れているので通地適作物として、これを生かした大規模な経営を行うものが多いため、市場価格も急激な騰貴が目立つて来ている。最近の傾向として、純産地地帯では栽培は伸びていないが、中間地帯の露地立地際帯を活かしての有利な畑作作物として着目してはあげておられる。これは市場からかなり遠い地帯であるため運賃は低くなることから荷をまとめて確保する意味で規模拡大は共同出荷の態勢で計画生産をせし、トラックで大方一台詰まりで市場に持ち込む形式をとるので、量的にはこれ等の地帯で大衆をにぎつていさわけである。

菜豆、エンドウ等は収穫後の日持が悪いので、この様な厄病はるに買手側の心理作戦につけては勝ちである。蔬菜経営の輪作体系の中では間作物として有利な作物であるが、収穫時の効力が大きいだけに劣物の生産性は栽培に手がかた、秋割に、それ程前のものである。たとひ邦人農家はトマト、胡瓜等の露作に共のさいを注意を生かした露性種でよい成績をおさめ、る例があることを附記しておく。

## 才六項 根菜類と葉菜類

純近郊式蔬菜丹莖の経営はこれらの作物を数種組み合わせで行われるものである。この場合は豊富な家族労働力を最大限に生かして高速度超集約経営が基本となるものであつて、単位面積当りの土地の生産力と云い労働の生産性といふ可成り良好な成績をおさめる事が出来る。超大型市場をかえた大都市近郊では数種の作物を選定して、それらの周年栽培で果をあげ得るもので、日本に於ける都市近郊の農家で多くみられる営農形態である。当伯国でも都市近郊では一部これに類似した経営が見られ其の営農は極めて安定している。ポルトアレグレ市近郊では専業のものは若干数あるのみであるが経済的には極めてかたい存在となつている。特に比較的夏期低温であるカノアス、サン・レオポルド方面では今後期うした形態の営農が増加すると考えられる。資本の回収が早く、しかも安全度も高く、他の果菜類の様に多額の資本もかゝらないのであつて恵まれた家族労働力構成で進めば、最も安全な経営であることは間違いない。

此の場合年間を通じての需給に関する対策について更に経営の分析が加えられれば、それだけに計画生産が出来るので大いに期待される農法である。特に高温乾燥期の2月から4、5月にかけては価格は最も安定しているのであるから量的にも増強策が見出されれば理想的で現在の如く半々の安定価格は近郊営農家としては見逃してはならないものである。これについては其の間の営農内容について若干改善すべき点があつて作物の種類を其の需給の程度に従つて整理すればそれだけ生産が能率的で増産を期することが出来ると思われる。これは更にこうした葉根菜類経営が平凡單調にかたよるために精神的つかれも出て来るのであつて、これを防止する一つの刺戟剤として考えてみるのも面白い。尚最近の様なインフレ経済下では、粗収入の少い所謂低所得農業では、一般消費家計を維持してゆくのに相当の困難があるので労働的に

脆弱な農家では、特殊な時期をねらう稼は乏しい。作物だけの経営に賢明ではない。特に利益形態では特に有利ではなく実は其の専が現在の邦人の営農をトマトなどの果菜単作へ傾けることにもなっているものである。特に根菜類では收穫後の水遣い、荷造りも作業中の間引などに要する労力は極めて大きいので労力の生産性には於ては葉菜類に比べれば、遙かに低いのが普通である。葉根菜類経営を成功させるための第一の要素は合理的な輪作体系の確立によつて土地の生産性向上を期することであり、それによつて徹底的な高速度集約経営を行つて周年出荷に与えることになければならない。其の故にも家族の労働力が豊富であることが必要であるわけである。

此の外特筆すべきは蔬菜の中で最も大衆的な野菜の一つである甘藷については其の導入品種の如何によつて、可成り面白い経営が出来るものであつて春夏蒔甘藷はこれまで栽培が殆んど皆無であつた其の時期は必然的に極めて有利な価格が保たれているので、此の面でも邦人の進出を大いに期待するところである。

#### ホトトギス 馬鈴薯 (Potato Angles)

生育期間が短く投下資本の回収が早いことは一大特徴である。栽培技術的には機械化が比較的容易であることなどもあつてトマト作以上の投機性をもっている。従つて、伯目ではすでに蔬菜丹芸というには余りにも規模しい、怪しい、かりはなれているので近郊の作物としては大きくとりあげられることはない。單位面積当りの純益が土地の肥沃度、生育中の平均気温等の條件によつて大きく左右されるので、多くの場合其の生産性は高い分ではない。従つて機械投資、土地の立地條件、大陸性気候などを充分に考慮させる種の大規模な経営が営利栽培の原則となり、斯うした適地を近郊で求めるのは極めて困難である。勿論一部近郊経営の一部として取り込むことも其の経済収支の面から決して有利なことではないと思つて然る。その一方で、近郊の土地に於いて其の内

要点を拾いあげてみよう。

④ 馬鈴薯は冷涼な気候を好む作物であつて、平均気温によつてその生産地帯がほぼ限定されているものである。即ちオランダやドイツ、ハーランド等の北ヨーロッパに其の生産は素晴らしいのであつて、この様な適地では適作物として生産コストも比較的低い。しかも収量が安定しているから非常に安定した生産が行われている。伯国では、主としてサンパウル、パラナ州に大生産をマークしているが、上記の様なわけで自然的條件の良悪によつて、影響されることが多いので、その生産は決して安定しているとは云えない。馬鈴薯が投機性の最先端をマークしているというのはこの為でもある。

当州に於ても北西部や高標地帯に大きな地帯があるが、やはり其の経済性は他州のものとは大差はない。大抵馬鈴薯は品種内に若干の差異は認められるが播種に於ては75℃〜22℃の地温で順調に行われるもので、春季と秋季が比較的長期である地方が適地として常に経済的優位に立つものである。

⑤ *Pinto-Alegre* 近郊は秋型の温度は或る程度、これにかなう事もある。特に春から一足とばに盛夏が訪れるので、温度的に満足させる様なところは見当らない。従つて、これを企業化する事は、殆んど考えられない事である。

⑥ および4ヶ月くらいの短期間に芽生、莖葉伸長、塊茎肥大と其の一生を終らなければならぬのであるから、地味肥沃で常時水もなく養分の吸収が行われることは極めて重要な條件の一つである。此れを一般には其の地方が馬鈴薯経営の成否を左右していると思はれてもいる。若し地味豊かでない場合は、これを栽培する時は肥料費に相当な支出を余儀なくさねるが收穫期の繰上げによつての商売が極めてひどいので安値の年は生産費を割る事がしばしば起り得るものである。

⑦ 生産費のうち最も大きなものは種薯代で、続いて土壌肥、收穫労働費、代、運搬料と云つてゐる。馬鈴薯の経営は概して多



額の資本を必要とするものであつて其の英主要産地のサンパウロ州、パラナ州などでは、当州の米や小麦等に適用されている伯銀の融資制度を其の生産者は利用しているものが大部分である。当州での生産費は概ね現在では1ha当250コントス程度であつて、肥料代は他の大産地に比して土地力が優れていないので此のうち20%以上になつてゐる。

⑤ 要するに結論としては近郊営農ではこの経営は得策ではなく、今後馬鈴薯作を志す場合は冷涼にして地味豊かな適地でその適作物として伸ばす様に心掛けなければならない。

#### オハ項 甘 薯 (Batata-Doce)

甘薯の消費者層は極めて一般的であつて、最も大衆的な作物の一つである。市場では時期によつてはトマト等より商値をマークする事がしばしばあり、その消費量は急速に伸びつゝある。最近インフレーション昇進による生活難の老相下にあつて、あらゆる丹芸作物の相況に愈々混乱が予想されるわけであるが、これと共に、この作物が対経済不況下で安定作物の一つとしての地歩をかためつゝあることは、大いに注目し値するものであつて、今後経営の一環として検討されるものと見られる。これを近郊営農者側から見れば他の丹芸作物の経営安定策として、もし此の作物を導入しようとする場合、生産資本は他の罐蔬菜に比較すれば問題にならぬ程微少である英は極めて好都合である。

今甘薯栽培1haについての收支概算を試みるに次の通りである。但し収量は当州の平均収量に若干の集約度を加味し其の急に従来の伯人の経営からすれば、相当資本をかけることになつてゐるのは、邦人の経営による向上を見込んでゐるからである。しかも邦人の在日中の経営からすれば、必ずしも収量としては次はつたものではない。

(例) 甘藷 7 匁 栽培の収支概算

- 1. 植付株数 (90 cm X 30 cm) 37,000 株
- 2. 粗収入見込 37,000 株 X 7 Kg X 15 CR# = 550,000 CR#

3. 生産費概算 206,000 CR#

内訳

- 肥料代 28,600 CR# (硫酸 100 Kg, 骨粉 275 Kg, 塩化加里 180 Kg, 石灰 2,000 Kg)
- 整地費 30,000 (牛糞其の他)
- 労力費 60,000 (750 人 X 400 CR#)
- 種藷 70,000 (500 Kg X 200 CR#)
- 荷造運搬料 78,000

(1,200 箱 X 40 = 48,000 運賃)  
(300 箱 X 100 = 30,000 箱代)

4. 差引総益見込 550,000 CR# - 206,600 CR# = 343,400 CR#

以上の概算は銘くまでも普通栽培型のものであるが、当州では降霜によつて冬期は茎葉は枯死する。従つて初秋の候の所謂早出し栽培では、有利な価格がマークされるもので、そのために早掘甘藷の栽培は可成り研究されて来たものである。今年度2~3月にサンパウロ市場で優品は7,500 CR# (7 箱 30 Kg 当)、ホルトアレタレ市場でも最高7,000 CR# がマークされたものである。従来は当地方の早出栽培は冬季と雖も藷が寒気のために地中で放置しても腐敗しない程度のものであるので夏季7~2月に蔓先苗をさして冬迄に或程度塊根の形成をなせしめ、そのまま越冬し翌春萌芽せしめて再び肥大させる型式がとられている。この方法は冬期の地温が連続長期日にあたつて保たれるために塊根が枯死に至らぬという自然の恵みを活用したものである。此の奥若し邦人が此の作物の場合も他の果菜類に見られる様なビニール育苗が研究されていたならば、現在見られる様な旧式の栽培型は大い

に改良されていたろうと考へるのである。遺種はがら鈴六の中に  
 いた。た新らしい農法を甘藷に適応することを志したものは  
 これ迄はかつたもので、それだけに忘れられた作物であつたとい  
 へばよからう。雙先種の生産力は半減することだ。それまでの種  
 々の試験作でも立証されていることであり、更に越冬後の藪の再  
 産力は形骸に凸凹がひどく現われるもので品質は決して芳しくない。

今後踏込温床やビニール斜面による保温育苗の早熟栽培を実行  
 すれば其の経営は時代の潮流をみだることだ。邦人は幸い  
 にしてオ二次世界大戦中甘藷栽培については世界的に名を上げた  
 ことでもあり、この実績にたつて、精選するならば理論的にも実  
 際的にも伯母の農業に寄與するところ大きいもので、意味でも  
 大いに開拓してよいものとなる。近郊農業の一角として甘藷を  
 導入する場合原料として高速度集約経営となるので、徹底的にビ  
 ニール利用で有力な作物となり得るものである。更に天候異変に  
 なる甚だの憂は他のどの作物より少いので、昔農安定策として考  
 へられる茶人の活動をおつ作物である。

スルマンジョカ (Manioc)

マンジョカは伯母の代表作物の一つであつて遠国以前からのも  
 のである其の強健性は、驚異的なもので、一處誰にでも栽培で  
 きる代表的な作物である。伯母人は其の思はれた作物自身の立地  
 条件をよく生かして又他の農作物の到底結果を得られない土地  
 を活用して此の作物を栽培しているものである。邦人はかつて糖  
 菜栽培が市場性にも又生産力にも他のどの作物より優れていた事  
 に感服されて、これ等の粗糲作物を数通りか傾向が強く前項の甘  
 藷などと共に、其の経営経済上の価値は極めて高く、しかも身近  
 にある作物であつたから、忘れられていた感がある。現在の邦  
 人が散在している地帯に於ける伯母人の多くのモノ、生産水準は  
 極めて低いことは事実であるが、彼等の生活の多くは此の作物に

よつて支えられているのであつて自然のあらゆる悪條件にも抗して根強く生育してゆく作物の長所と共に生産の基礎がしつかり固められている事を見逃してはならない。而して現在では伯國の農業の発展と共に今日益々増えつつある作物であるために、或はずでに植上作を期待出来る程の土地生産力を維持しているものゝ少くもなつてゐるが、肥料分に対して極めて敏感な作物であるので、若干の肥培によつて、さだまだ増産の生産を期待出来る。

更に当州は養蚕の最も盛んな州であつて、其の飼料作物として飼養には大きいもので、此の面の需要は極めて大きい。農業構造の一部近代化に伴ひ幾分有首農家の増進と共に特に都市近郊の飼料作物の需要が大きく増加しつゝあるもので照会路では生産してゐる。然し本作物は種して生育期間が長いもので、一年一採り増産を望むには投下資金の急速な回収は期待し得ない。しかし投下資金が最少である、僅かの余剰資金も確実に利益をはかる爲の方策として、又最近の姿に迎へられている長期管理が確立の線に沿つて極めて安心且つ有利な作物である。

特に伯國の事情に不馴れな新らしい移住者で、手持ち農業資金をもちつてゐるもの。借地又は自作経営に頭初から取り組む場合は、将来への飛躍の爲めの資金維持増殖策として此の作物の栽培を考へることは賢明である。又此の作物を近郊農家が副業のために導入すれば、伯國人の雇用労働力は其の生産性を大いに期待出来るのであるから、家族労働力に思はれない邦人農家であつても、決して難かしい事ではない。そして大なり小なり経営の中に取り入れられるこれによつて経営の基礎づくりの一助として伸ばしてゆきたいものである。

次にマンジョカについておこなふなければならないこれは二つの種類があることである。即ち一つは飼料及びマンジョカ粉用の所謂 *Mandioca brava* 云はれるもので、他は *Mandioca manca* で当州では一般にアイピン ( *Aipim* ) で通つてゐる。甘藷と共に養蚕用として市場では需要は感度り多いものである。

今その経営収支の概算について記せば次の通りである。

(例) マンジオリ栽培1ha当栽培収支概算

1. 植付株数 (100 cm X 60 cm) 16.666株
2. 粗収入見込 16.666株 X 1.5 kg X 70 CR# = 249.999 CR#
3. 同上生産費 80.000 CR#
  - 内訳 { 整地費 20.000 CR#
  - { 労力費 20.000 CR# (50人 X 400 CR#)
  - { 肥料費 20.000 CR# (硫酸100kg, 塩化加里200kg, 骨粉300kg)
  - { 借地料 10.000 CR# (近郊借地料標準)
  - { 其の他 10.000 CR# (殺菌剤, 運賃等)
4. 差引純益見込 249.999 CR# - 80.000 CR# = 169.999 CR#

オニ葱 玉葱 (Cebola)

玉葱は当州の輸送月菜作物として全国的に著名な特産品であつて其の生産は年産約70万トンに云われ伯国内隨一のものである。近郊に於ては、いまだ副期的な栽培はなされていず、僅かに果樹園の間作や主要蔬菜の傍作として試作されたものであるが、概して收穫最盛期の市況は変動がはげしく、折角の試作も、たまたま安値の年になされ、経営収支で相つぐなわぬ破目になつたりして中断されて今日に至つている。最近では農産組合の統計調査資料に基いた生産指導が活発になつて来たので其の線に沿つて小規模ながら栽培が始められようしている状況である。本年度は近郊邦人も可成りの面積について作付を計画している。これはやはり産業組合本部で得た年次別統計資料をもつて今年は何程の收支上の目標を各自が認識した為にならうない。加うるに近郊邦人の管見ではトマト其の他の果菜類の、休閒しなけりなうない作物の跡地を活用する面で単位面積当りの収量は当州の平均を大幅に上廻る見込がつけられるもので、更に残された問題は販売対策の合理化である。

最近スールツァーブル中央農産組合では上記の様子玉葱に対して内金優待制を適用して当州組合員の玉葱栽培を奨励しているが、官農安定の終局の基盤は其の地方の特産物と共に確立されるものであるから、当州在住の邦人もこうした面で積極的に採用する態勢を整えて行くべきである。玉葱は其の奥で注目されるわけである。而して特産物農業社会では其の特産物の経済的地位を高めるために個人主義的な立場はかな投機的態度は許し難い事である。官農市場性に対する客観的資料に全農業者が真摯な諒解を以てあわせてこそ、其の地位はそれ程永久に不動のものとなる筈である。

大体当州特産物の玉葱は其の産地は大河沿沿岸の特に南部的質地帯であるが、これが専業地帯しているのではなくて文藝上も社会的にも経済的にも特産地帯であるが其の自然的立地条件を見かして、模倣作務として玉葱をとり入れている耕作農の一端がある。そしてこれらの地帯では生産者協会の組合の組織が盛んではあるが、それが販路運送進取する強力な組織でないために、しばしば窮地に迷い込み取っているものである。最近に於ては洋作人の営農も其の實態は思わしくなく、すでに切り角に乘っている現状、転作又は導入作物として他にこれと云う目ぼしいものが見出せないというのが愈々その混乱を深刻なものにしているのであるが、こゝらで特産物を育てることに何よりも大切にする意識が満ちり其の縁で玉葱が考えられるならば、これこそ副期的邦人営農の曙光でありこれこそ当州農業特有のものへのめがけであり其の奥で頼もしく大いに期待されることである。此の作物の土地上の適応範囲は比較的広く、近郊に於ても大方の本産には栽培が可能である。

そこで冬季の葉根菜類が注目の上で限定されて栽培され、而も極めて栽培しやすい論議の冬気候が今採つて其の価格は概ね高く収入の上では余り期待出来ないのが側身の傾向である。然しこの様な冬野菜の栽培目標が異なる資金の中継ぎに終るものとなる

らば、思い切つて玉葱などの販売に対しての合理的施策が求められる。こうした特産物を導入することは極めて興味ある課題となる。これはまた近郊郊人は果菜類を中心とする営農が超多肥栽培を繰り返してあり、その為には地方の奥では玉葱には不足なところであつて、最近の様に化学肥料の合理的な設計施用技術が普及して来ると其の跡地は雑草の発生頻度も他の堆肥肥などに比較すれば周廻に比しぬ位少いわけで、この様な利点を更に活用すれば経営としても素晴らしい成果が期待される。

玉葱栽培で今日迄労力の奥で或る程度制約されていたのは除草問題であつたわけであるが、これは土地の選定法により、更に前述して除草剤の併用により可成り省力栽培が可能になつて来た。従つて新しい栽培技術のみに徹底的に作付様式を集約化すれば冬季の他の作物に比して単位面積当りの生産力は決して劣るものではないのである。唯当州の玉葱は貯蔵性に於て他のどの州のものよりも遙かにすぐれている奥で自然崩壊期頃からの値上りにならえて、愈々其の面目を必揮するところに眞の意義があるわけで、此の面をより推進するために今後の課題として発芽抑制ホルモン剤(例えばマレイン酸ヒドラシド30)の研究適用は副期的特産物の地位をかためることになる。特産地経営も自然的立地條件の好適さの上にあぐらをかいてよいのではなく、栽培技術の上でも経営技術の上でも、たゆまぬ前進を続け、愈々其の強固な地盤を築くものであることを認識すべきである。

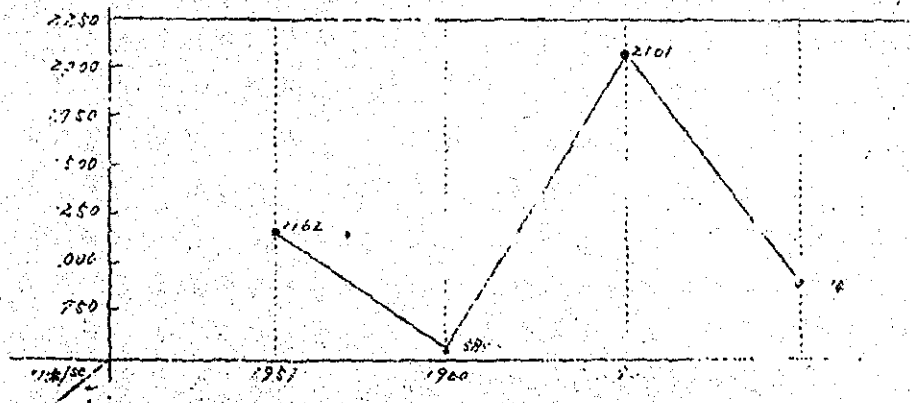
更に他の産地の動向については科学的統計資料に基づいて常に監視するべきであつて、収穫期に至る迄全国の生産状況の概略すら把握しない様では眞の特産地の安定が期せられる筈はなく、その意味でも特産物こそ再三力説して止まない協同組合意識、連帯意識をもちあげ、其の線に沿つて自主的に集結した組織活動で進まねばならない。組織のない特産物生産は反つて悪い結果をもたらす場合が多いのであつて、其の旨をいめる事と余儀なくされるのは当州のこの産地の玉葱生産にも生かされるべきである。

だが豊作飢饉で泣かされることにちなぬ様に作付前からの強固な態勢を整えておくべきである。

最近南伯中央農産組合 (Cooperativa central Agricola Sul Brasil) でまとめられた玉葱の市場実績は全国組合員に月報で次報されているが、これは今後の玉葱栽培計画を進めるに当って極めて貴重な資料となるものである。玉葱栽培が当州でも投機的作物だと云われていることな此の資料でも判然としている。表中にみる米価の高低の下の大きさは其の原因としては、前年度の植付面積の減少から来る生産量の低下をあげてよい。又此の外に案外忘れられているのではないかとと思われるものに当州を華僑にしての各産地の栽培時期の気象条件及び貯蔵期間中の降雨量(空中湿度)の問題があり、此の実は其の年の市場即ち入荷量に与成り大きく反響するに云うことである。

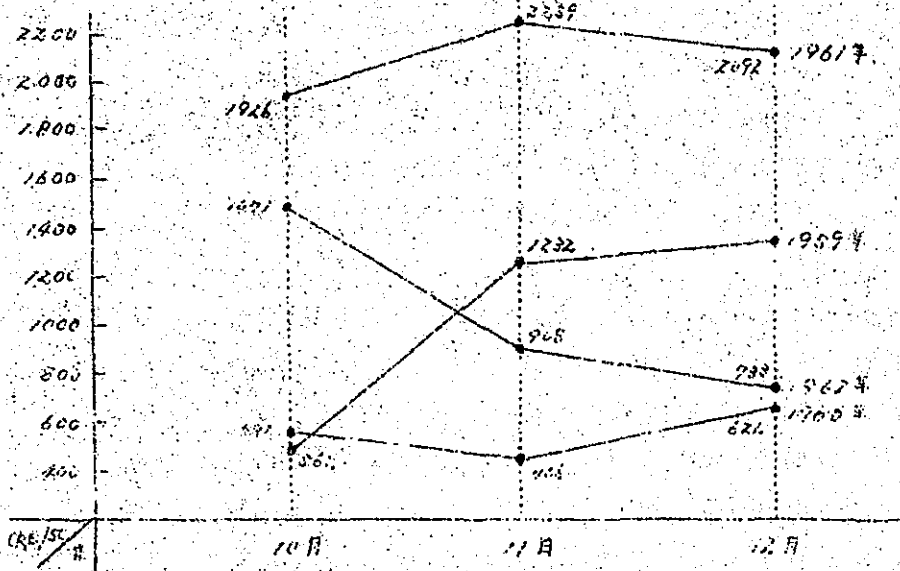
即ちこれを当州の玉葱についてみるならば、冬季比較的雨量の多い年は其の作量は極めて安定し、収穫時期による乾燥し、引き続いて夏季空中湿度が低い時は貯蔵中の萌芽及び腐敗米が少いのを割る場合に市場へ搬出されるわけで、市場でのカブとさば自然に細碎されるものである。今度などはそのよい例で貯蔵性から云えば例年になく順調であるわけで、これは貯蔵設備、技術の長否の程度によつて多少の差があらはれて来る。

サンパウロ市場に於ける年次別最盛期(10,11,12)平均相場(単位:kg/kg)





カハワ市卸市場に於ける年次別 最盛期月別価格変動図 (45kg/俵当)



オナーズ フエイション (Onions)

フエイションは伯国人の食生活にとっては肉類と共に不可欠の食品である。従って此の作物の消費市場での流通状態は、其の価格に極めて敏感に現われる。豆科作物であるので大抵の土地では栽培され得るか実際は經濟作物として栽培されるには、相当の地帯が必要である。当州内のフエイションの産地が肥沃な土壤分地帯にあり、又あちこちに散在する歐洲人系植民地部落で比較的集約的な栽培を以てしているのを見ても、これは容易に理解出来るところである。而して邦人の多くが居住している所謂ポルトアレグロ近郊地帯では且ほしい産地は見られない。これらの地帯で生計を営んでいる伯国人は雖も以前はマンジオカ、トウモロコシ等と共に有力な作物であったにも拘らず現在では、すでに殆んど自給的にしか栽培されないのは、近郊のいわゆる旧地帯の農業史をそのまゝに表現しているものと見なしてよく、すでにフエイションの生産でよい成績が得られぬ程地力が減退してしまつてゐるもので

ある。

しかも、人はこうした土質的には可成り脆弱な地帯で営農を続けている。この様な近郊蔬菜経営の最大の悩みは連作による病害又は作付継続不能に陥るために土地の問題で行き詰まりが甚しいことである。従つて誰もが特に茄科作物の跡地はできるだけ休用しようとするもので、一部甘藍や花椰菜等との輪作で合理化している者もある。しかし、また多くの果菜類の跡地がそのまま放置されているのであつて、此の土地の活用維持をはかるのにフエイジヨンを導入することは極めて意義深いことである。一般に果菜類の跡地は排水灌漑の作業が非常に大変なといふ実情を以て、しかも多量栽培をいつているので、そのから植生上理想的な土壌に作りあげられている。これを放置する時は雑草の繁茂或は病害虫の残存に極めて好都合な状態になり、近い将来再度この土地に作付する場合、整地にはかなりの労力的、経済的負担は、はかり知れないものがあり、むしろ前記の土地を耕地にする方が不つと経済的になる場合が多い。中でも果菜類は生産時期の中絶未まで用置の長い時期は、その間に比して、中絶の場数やその量は徹底的に排水灌漑を完備しなくてはならない。

最近の試みで多くの果菜類が出荷の時期で急激な価格の上昇が認められ、洗いぬきありぬき種にまつても、其の跡地の活用は、その間に比して、中絶の場数やその量は徹底的に排水灌漑を完備しなくてはならない。最近の試みで多くの果菜類が出荷の時期で急激な価格の上昇が認められ、洗いぬきありぬき種にまつても、其の跡地の活用は、その間に比して、中絶の場数やその量は徹底的に排水灌漑を完備しなくてはならない。

フエイジヨン栽培の普及に伴つて、果菜類の生産力も更に増進する。

て、日本人の労働力として或は南米人の雇用労働力として、これを活用すれば、彼等の労働の生産性は亦高し、期せずして、Fajardoの牧場自体も決して悪くはないから、全く一筆消償のある果菜類の産地栽培の跡をば、尤も当りふの依拠は無理の言ひ難量であると思われる。フエイションは平常期には相当の生産量を挙げなければならないが、林育望は乾燥に対しては極めて強健で、内産期に適期があれば結実率が高い。この意味で、果菜類早熟栽培跡の11月初旬以降、フエイションは大いに期待が持たれるまでに一筆消償した近郊農家は出て来ており、其の成果は大いに注目され、期待されるものである。経営改善策としてのフエイションを早直り水さ時である。

#### 第四章 邦人近郊農業の当面の問題点と其の対策について

##### 第一節 経営技術上の問題点と其の対策について

他国に於ける農業について云える事は、農業者が農業を一つの企業企業として、これにのぞむ態度に於て他の商工業に於ける様には、はつきりしていなかった事である。この点は農業がいつまでと原料産業の域から脱し切れず、近代化には程遠い現状に足らざるを感ずる主要の一つである。大規模に於ての大規模な農業のみとして企業化されている今日、ひとり小規模な農業生産に於て新血にかけているのは一体どうした事であろうか。

それについては、農業規模が狭小であるために金融機関等とのつながりに於て画期的な取引がなされなかつた事や、或は輸入乳を合めて大部分の近郊農業者が概大に恵まれた地理的、自然付土地条件にたよりすぎていて、かつて野国でも感嘆となつて来た「他に能がないから農業をする、或はさせる」式の農業が中心となつてきた事や、農業意識が農業者自体にも、又これをとりまく社会にも逆念となつて来た農村社会をまさ認めずにはいられぬ。再び建国後若くし国造りに躍進をなつていく創生期の後半に於ては、全く現実のものとして多くの教訓を提示して異なつていながら、これから近代農業に生きようとする邦人農業者が、これをどうの問題として静かに検討しつゝみる事は決して無意味ではないと考へられる。今ここで農村と都市との其の社会構造面から一望してみよう。誰も認めるのは能く一杯の階層の冠士を殆んど政治、経済の中心部の都市に吸収され、更に都市にもちがいない多量に農村出身の都市人の生活に感服され、猶も拘りなく都会へ、都会へと吸収される結果は農村を内容的に空虚なものにしてしまつていゝ。又かつてあとに残された農村人は前述の如く一つの社会風潮や機軸から一種の宿命やめづらぬに似た人間性、かに感ぜられ、現在の農村が極めて保身的な状態に陥つて、その結果、都市をなすに

も地主性に乏しく自信が思ひ足りないと言ふ頼りない農村を作つてしまつたと云えぬだらうか。

当州がかつて欧州系の極めて進取性にとんだ、逞ましい開拓者によつて開拓されたとはいふ、やはり其の中の知的材能人は多くは農村にふみとまはつていず、今日の疲弊した植民地の現状を招いてゐることも容易に理解出来る。この様な農村移住史の中にあつて、はるばる東洋の地から赴いた日本移住者が、前者の轍をかむことなく、移住当時の豊かな進取性と逞しい勤労意欲を決して失わない様に、そしてあくまでも農村発展の推進力となつて進むことは、日本移住者の課せられた一大使命であらう。それには、本節頭初においくの如く「生産事業としての農業」と推進することであり、積極的に生産する農業の確立に向つて邁進することである。

科学する態度の上になつて農業が進められねばならぬという事は農村に大きな非常時の不況が訪れた時、誰しもひとしく教えられるところである。どこまでも、より科学的な視野になつて農業を推進してゆく限り、そこには無算な投機的延滞も大いに反省を感ぜられるであらうし、又それこそ犠牲そのまゝの進み止と云つたものも、すべて改善を迫られるに止らない。

邦人営農者の大半を占める Porto-Alegre 近郊に於ける営農単作経営に傾きすぎている現状は農業経営の労力関係や邦人の渡働後の年数がいくばくもたっていない事などから或る程度止むを得ない面があり、その点今後急速にこれらの単作経営を 180° 転換する事や、経営安定策としての複合(季向)経営に移行することは理屈上は容易であるが実際上は極めて多くの問題を伴うものであり、即ち、雇用人材の能率的経済的導入が難しく、那うるに移住した邦人農業者の殆んどが非常に若い世代の人産であり、その家族構成員中の血家労働力に乏しい点、又雇用労働力に不足している位国の農村事情により、又出荷の場合の散発出荷で輸送費の割高など一連の悪条件が邦人の単作経営に拘束をかけたものである。

しかも、過去数年市場における各種蔬菜が価格の点でも、需給の点でも圧倒的にトマトが優位を保っていたし、この様な作物に生産を重点的に進めることによって、より能率的な農業経済を確立すべく志したのは何も一種の風評や宣伝でこれに傾いた結果だけではなく、これは一つの大きな特徴である。

この様に考えてみると特定の作物の生産が全体として一つのまとまった時期に集中されたことは営農者が個々げらげらで確の連絡もなく、一人よがりの進みかをしたためにもたらされた結果であって、其の点は取付時期のずらしや、市場開拓などの努力で或る程度の改善の余地はあるけれども、一部の近郊営農者は農業者として（円芸業者として）最大の弱点である自家労働力の貧弱さを背負っていたものであって、国内経済悪化と相俟って近郊農業事情が曲り角に来たことに遭遇した為に起った現象とは云え、こうした構成家族の現実は無情以上に深刻な問題となっている。当地海抜差では時局を重大視し其の対策に乗り出したものであるが、寧ろ営農者の自主的な解決策が未決問題であり、兩者一体となつての努力が続けられている現状である。そこで本節では以下項を辿って、経営上の問題点を更にはりさげて研究し、今後の合理的な営農計画設計の資料とすべく志したものである。

### 第一項 トマトの生産費はどうなっているか

甲類栽培に於けるトマトの生産費について算出してみると、初年度依り場合次の通りとなる。

とっそもこれは栽培者の栽培技術や経営手腕の優劣、市場への距離、資材類の供給度の異合、農業用機具類の保有程度、その他の種々の気象条件の良否などによって相当大きく左右されることは云うまでもない。特に栽培の期間中に於て病虫害や降雪、豪雨掃などによって欠換株を生じたりすると予定の生産費よりも大巾に経費は累加されるものであって、一律にとれたばかりと決める事は出来ない。どこまでもこれは〇〇のトマトは～円であり、

○第四章 伊予近郊管農め番通の問題点を其の対策の時期宛受及  
 其実績によつて大なる相違点がある。各管農をばトマトの  
 生産第1種と經營類術並問題度と並の超受極口史録とが、余り  
 にもちがひすぎて、中途でどうなるかと心配した経験が多か  
 くなかあるわけで、今後の管農がどこまでも計画生産に徹しな  
 りればならぬ様になつて来ている今日、計画と実績が出来るだけ一  
 歩する様な管農を進めるべきで、農業経済を安定させるためには  
 この試みは極めて有意義であると信ずる。

A. 1962年産早熟栽培における生産費算定

(但し、価格は1962年6月現在)

算定の都合により管農行動力による1000本(0.05ha)当り  
 を基礎にする。

- ① 育苗資材費(防害甲木桶11m X 1.2m 1.8極分) (計. 3,510.00)
  - 内訳 板(5 X 550 X 25) 7板 X 156.00 = 1,092.00
  - 糸上                  1板 X 156.00 = 156.00
  - 桧木(30 X 3 X 3) 7本 X 45.00 = 315.00
  - ビニル(0.05mm) 21m X 82.00 = 1,722.00
  - 肥料(配合肥料) 0.193kg X 28.00 = 5.50
  - 堆肥(牛糞) 0.5m<sup>3</sup> X 300.00 = 150.00
  - 釘 (13 X 15) 0.5kg X 140.00 = 70.00
- ② 定植標準備耕起整地費(TRACTOR 1.5時間 X 1,000.00) C.\$ 1,500.00
- ③ 本畑肥料 (10a当り三要素型 窒素17.75kg) C.\$ 10,340.00
  - 内訳 燐酸 118kg, 加里50kgとて計算する
  - 消石灰 250kg X 3.00 = 750.00
  - 骨粉 200kg X 18.00 = 3,600.00
  - 過磷酸石灰 100kg X 22.00 = 2,200.00
  - 尿素 38kg X 55.00 = 2,090.00
  - 塩化加里 50kg X 34.00 = 1,700.00
- ④ 育苗虫防除農薬(撒布薬液量平均: 750L) C.\$ 7,370.00
  - 内訳 Cobra-Sandoz (1,000L) 4kg X 390.00 = 1,560.00

Diathra M22 (7500) / 8kg x 100 = 750.00  
 Neantria (混用10000) / kg x 100 = 1000.00  
 尿素, Jet-Mist, 塩化/30:7A, 備取等

① 誘引用麻縄	1.8kg x 370.00 =	666.00	Cr\$ 666.00
② 支柱用竹(2.2m)	1000本 x 2.00 =	2000.00	Cr\$ 2000.00
③ 支柱用針金(78箱)	1.0kg x 1.62 =	162.00	Cr\$ 162.00
④ 出荷用箱	120箱 x 60.00 =	7200.00	Cr\$ 7200.00
⑤ 出荷用運賃	120箱 x 30.00 =	3600.00	Cr\$ 3600.00
⑥ 備取料			Cr\$ 500.00

以上、生産費合計額 Cr\$36,268.00

従って1,000本/トマテは120箱の出荷数とする場合の/箱当りの生産費は所要労力を除いてCr\$307.00となる。そこで、種々の栽培技術的或は気象条件の優劣などによって生産コストが変化するかこれを算術的に算出する必要がある。

ここでは栽培技術費を出荷箱数によって120箱、100箱、80箱の段階とする。

技術経費別	生産費合計	/箱当生産費(但し労力除く)
1,000本当 120箱	Cr\$36,268.00	Cr\$307.00
1,000本当 100箱	Cr\$35,768.00	Cr\$357.68
1,000本当 80箱	Cr\$33,268.00	Cr\$416.00

上表の/箱当りの生産費の変化は箱代と運賃が出荷数に従って減少しているもので、理論的には一箱成り式が実際には不採の生産経費率の減費や所要労力は累積的に増加するので、出荷箱数の減少による生産費の下降は余り多く見られぬのが普通である。此の点については次頁のトマト栽培収支実績について述べる。なお、もあげておいたのが容易に理解出来るよう、各資料は同一耕地面積を前提としたものを生産費用に集積したもので全く同一条件で栽培



されたに拘らず、結果は可成りの中をもつて差がついている事は注目に値する。即ち播種から肥料設計其の他の栽培管理も同一播種でなされたものであるに拘らず互いに優劣の結果が判然としている。これは等するにトマトノ箱当りの生産費だけについての一分分析にすぎないが、作柄が劣り収量の少ないとすれば、生産費が高くなるだけでなく生産物について更に粗選品の占める割合が高くなり最終的営農収支の利潤になると予想以上に大きな開きが現れれることを教えている。

### 〈資料〉 トマト栽培収支実績例

其の1 1962年春作、Porto-Alegre 近郊

#### A. 販売実績表

(金額単位 Cr\$)

期	EXT.		ESP.		1 <sup>2</sup>		2 <sup>2</sup>		D.V.		出荷口計		1箱当 平均価格
	箱	金額	箱	金額	箱	金額	箱	金額	箱	金額	箱	金額	
11. 9					1	800					1	800	800
9	6	10,000	3	3,900	2	1,900					11	15,600	1,418
12	11	17,000	3	3,600	3	2,250			1	400	18	23,250	1,292
"	10	18,000	10	15,000							20	33,000	*1,650
14	6	10,050	2	2,800	3	2,500					11	15,450	1,405
"	4	6,800	4	5,600							8	12,400	*1,550
16	11	17,050	2	8,200	4	2,000			2	600	24	27,850	1,160
19	24	22,350	16	10,100	7	2,120			3	800	50	35,150	703
"	30	37,500									20	32,500	*1,250
21	7	6,400	8	5,550	4	1,500			2	400	21	13,850	660
22	30	39,000									30	39,000	*1,300
23	9	8,900	15	9,250	13	3,900	1	150	4	400	42	22,600	538
26	35	38,500									35	38,500	*1,100
"	6	4,800	16	8,000	13	4,580	3	450	6	1,200	43	18,430	384
28	6	4,300	12	8,100	12	5,100			3	450	45	17,950	399
30	25	10,650	29	9,000	30	4,500			12	1,200	96	23,350	243
12. 3	16	17,500	12	17,100							38	34,600	*911
"	14	4,200	25	5,000	18	2,700					52	13,100	252
4	3	2,100									3	2,100	*700
"	2	700	6	1,200	16	2,740					24	4,620	192
5	1	300	6	1,200	40	4,800					47	6,300	134
7			21	6,600	13	2,600					34	9,200	270
10	3	1,000	31	6,550	26	6,200					49	13,750	281
14			11	3,300							11	3,300	300
15					22	5,500					22	5,500	250
17					5	1,000					5	1,000	200
21					8	1,500					8	1,500	188
合計	258	177,400	141	128,050	258	52,050	4	600	33	4,650	380	418,250	576
%	42.3	57.2	30.3	27.3	42.3	12.4					100	100	

(註) \*印は Porto-Alegre 市以外への転送分

(1) 栽培品種 (大型幸福トマト) 栽培本数 (8,000本)

- (2) 栽培者(単身青年2名の共同経営、分益農)  
 (3) 播種期日(6月1日) 定植日(8月5日~8月10日)  
 (4) 販売法(南伯中央農産組合Porto-Alegre出張所依託販売)

## B. 生産費支出の実績

支出項目別	金額C\$	%	備 考
肥料代	88.174	24.5	/本当りC\$11.02
農薬代	62.175	17.3	殺菌、殺虫剤
出荷箱代	56.480	15.7	トマト箱、釘
資材代	45.497	12.7	ビニール、竹、針金等
販売手数料	37.500	10.4	販売手数料 8%
農機具費	27.975	7.8	高掛噴霧機2台他
運送費	22.995	6.4	運賃
労 賃	18.200	5.2	新起反ひ人夫、畜力
支出合計	358.996	100.0	

## C. 収支対照 其の他

(単位C\$)

粗収入高	468.750	
支出高	358.996	
差引純益高	109.754	
分益取柄高	65.852	純益の60%
労働労働の生産性	4.704	2人×7ヵ月=14ヵ月
/箱当生産費	454	358.996÷790
1,000本当出荷箱数	98.6箱	8,000本につき790箱

1961年 1960年 1959年

1961年 1960年 1959年

A 販売実績表

(金額単位円)

月日	EXT	TIE	SP	別	計	額	高	平均
					箱数	販売	平均	価格
10	4				4	5,900	1,475	
11	12				12	22,850	1,904	
12	25				25	24,225	1,045	
1	30				30	22,625	860	
2	36				36	21,025	1,042	
3	44				44	25,420	981	
4	53				53	26,320	984	
5	55				55	25,220	985	
6	58				58	22,350	971	
7	57				57	24,220	850	
8	58				58	24,220	770	
9	27				27	22,350	215	
10	17				17	22,350	279	
11	19				19	22,350	234	
12	22				22	24,220	685	
1	21				21	24,220	206	
2	40				40	24,220	850	
3	22				22	24,220	284	
4	15				15	19,600	200	
5	12				12	19,600	626	
6	16				16	16,550	571	
7	16				16	14,090	414	
8	9				9	4,110	457	
9	8				8	8,600	430	
計	632	152	23	40	56	774,883	808.22	
%	16.4	15.7	2.6	4.9	5.7	14.70		

(註) (1) 供試品種(大豊赤福トマト) 植付本数(8,000本)

(2) 播種日(6月10日)

(3) 栽培者稼働力(成人男2人、主婦1人、計2.5人) 分益農

(4) 収穫始(10月9日) 収穫終(12月1日)

(5) 1,000本当り取獲箱数(約120箱)

(6) 販売法(南信中央農産組合 Porto-Alvora 出張所依託販売)

(7) 栽培経験共況(入信国第1作)

B. 生産費支出 (金額)

支出項目別	金額 (円)	%	備 考
販売手数料	61,990	23.3	売上高の3%
農具購入費	55,880	20.9	揚水機、扇風機、噴霧機等
肥料代	39,660	14.7	1 不当 (5% 相当)
農薬代	36,150	13.6	殺菌、殺虫剤
資材代	22,356	10.7	育苗機、ビニール等購入
出荷船代	23,925	9.0	
運送費	13,200	4.9	
労 賃	8,170	2.7	耕起及び人夫、畜力
合 計	266,331	100.0	

C. 収支対照 (金額)

粗 収 入 高	778,283	
支 出 高	266,331	
差引純益高	508,552	
分益取取高	305,731	純益の60%
1 労働力の生産高	77,236	2.5人 × 7時間 = 17.5人時
1 相当生産費	278,320	

(II) 1962年春作の介

A. 販売実績表

(金額単位: 円)

日付	F X T		E S P		計	計	計	計	計	計	計	
	箱	金額	箱	金額								
26.2	1	2,135	1	2,135					2	4,270	2.125	
30	1	2,033	1	2,033					2	4,100	2.050	
11.5	5	11,400	3	6,000	4	8,800			12	22,600	11.533	
7.13	23	23,300	3	6,500	3	9,800			29	39,600	19.800	
8.13	11	11,200	6	15,600	4	9,700		1	200	27	41,800	20.900
12.30	55	55,300	5	6,500	5	9,800	1	2,200	66	83,800	41.900	
12.22	21	21,000	14	21,000					26	42,000	21.000	
12.4	4	4,200	6	6,400					10	10,600	5.300	

合計

(50)

前頁より続く

期日	EXT.	ESP.	1	2	D.V.	出荷日当合計	1畝当り平均価格
11.14	61,000	5 2,000	9 10,800		3 945	54 80,145	1,484
16.36	57,900	10 11,400	7 3,600	3 1,800	2 600	57 74,700	1,311
19.7	73,650	20 17,500	15 4,500	9 1,800	4 800	123 98,250	798
..50	62,500					58 62,500	*1,750
21.32	35,600	10 2,000	13 8,750	8 2,400	2 400	38 52,150	724
23.50	65,600	15 16,500				65 71,500	*1,754
23.24	35,600	26 17,000	15 4,500	6 800	1 100	32 58,000	630
25.60	66,000					60 66,000	*1,100
26.33	25,900	29 15,050	19 4,910	8 900	15 1,500	105 48,390	460
28.04	28,400	42 14,350	24 7,200	5 750		115 50,700	432
30.26	28,500	41 10,300	23 3,250	3 300		115 32,850	286
12.2.15	21,500	4 3,600				67 25,100	*1,088
3.32	10,050	19 4,150	10 1,500			61 15,700	257
4.30	21,000					30 21,000	*700
..1	400	17 3,600				18 4,000	222
5.9	900	19 3,800	20 3,000	8 980		50 9,680	193
7.4	2,100	16 5,200	21 4,700			41 12,000	293
10.2	1,000	18 5,550	24 5,500			44 12,050	274
11.2	1,200	34 11,700	8 1,600			44 14,500	330
15.2	1,600		17 3,400			19 5,000	260
17.1	500	17 5,000	8 1,600			26 7,100	273
21.2	900	17 4,500	13 2,600			32 8,000	250
26		10 3,500	14 2,800			20 6,300	286
合計	745 795,408	149 717,300	178 97,880	60 10,330	29 5,445	1,511 1,116,363	738
%	82.3 76.2	12.1 19.4	18.4 7.8	3.3 -	1.9 -	100 100	

(註) \*印は Porto-Alegre 市以外への転送分

- (1) 栽培品種(大型赤福トマト) 栽培本数(12,000本)
- (2) 栽培農家の構成(男2人 女1人)分産農
- (3) 播種日(6月/日) 定植日(8月5日~8月10日)
- (4) 販売法(南伯中央農産組合 Porto-Alegre 出張所依託販売)

B. 生産費支出の実績

産出項目別	金額 C\$	%	備 考
肥料代	106,721	23.0	1本当りC\$8.9
出荷箱代	100,410	21.6	残存箱150
販売手数料	89,309	19.2	売上高の8%
運送費	50,404	10.8	
資材代	44,532	9.6	育苗椀板、ピニール補正分
農薬代	34,460	7.4	殺虫、殺菌剤
耕畜力費	15,000	3.2	耕耘併力燃
農機具費	3,450	0.8	ポンプ動噴の部分品
販売税	20,500	4.4	州税法による
合計	464,849	100.0	

C. 収支并照 其の他

(単位:円)

収入高	1,116,363	
支出高	464,849	
差引純益高	651,514	
分益取得高	390,908	純益の60%
円積労働の生産性	22,995	$1,116,363 \div (2.5 \times 700)$
1箱当りの生産費	307.00	$464,849 \div 1511$ 箱
100本当出荷箱数	125.9	17,000本につき1511箱

其の3 1961年 1962年各春作分

(1) 1961年春作分

A. 販売実績表

日付	葉 組 別					合計箱数	販売高	1箱当り 平均価格
	EXT.	ESP.	1=	2=	D.V.			
10. 9	1					1	1,445	1,445
13	3	1			1	10	12,145	1,215
18	7	4		1		14	14,500	1,036
20	16	10	2		2	30	25,125	838
23	20	7	1	1	1	30	30,210	1,007
25	24	8			1	33	31,215	946
27	26	11	1	1	1	40	39,180	978
30	29	13	3	1	2	48	43,520	907
11. 1	29	12	1	2	2	46	44,520	968
3	40	20	3	3	2	68	62,770	923
6	57	15	5	8	2	87	74,130	852
8	42	13	2	2	2	68	46,050	677
10	27	11	6	2	1	47	32,900	700
11	26	10	5	3	1	45	32,450	721
13	28	14	5	5	1	53	38,600	727
15	23	8	6	2	1	40	22,060	552
16	38					38	32,900	865
17	12	5	4	2	1	24	19,500	813
20	25	8	6	2	3	44	33,940	771
22	11	6	5	2	2	26	14,560	560
24	8	4	3	2	1	18	9,580	532
27	14	7	4	1	2	28	14,880	531
12. 30	10	2	12			10	4,840	484
12. 1	1	2	12			15	6,140	410
合計	524	191	79	40	29	863	690,228	800
%	60.2	22.1	9.2	4.6	3.4	100.0		

(註) (1) 播種日(6月10日) 収穫期(10月9日~12月1日)

(2) 稼働人員(2.5人) 1日1人1作日

(3) 栽培本数(8,600本) (4) 販売地(両中央産葉組合同委託販売)

B. 生産費支出の実績

支出項目別	金額(円)	%	備 考
農具購入費	72,545	26.9	1/17アザミ群農具、揚水機等
肥料代	59,641	22.1	1本当り0\$3.45
販売手数料	35,414	13.1	売上高の8%
資材代	34,164	12.7	ビニール、板金粉購入
運送費	33,977	12.6	
農薬代	28,329	10.5	殺虫、殺菌剤
労力費	5,465	2.1	耕畜器の修理費
合 計	269,535	100.0	

C. 収支対照 其の他

粗 収 入 高	690,228		
支 出 高	269,535		
差引純益高	420,693		
分益取得高	252,415	純益の60%	
1労働力の生産高	116,024	252,415 ÷ 2.1 = 17,500	
1畝当り生産費	312		
1畝当り平均価格	800		

III) 1967年春作の分

A 販売実績表

(金額単位(円))

日	EXT	ESP.	1	2	3	V	出荷日合計	1畝当り 平均価格
日	金額	金額	金額	金額	金額	金額	金額	
2/21	2,000						1	2,000
2/22	1,000						1	1,000
2/23	1,500						1	1,500
2/24	3,000						1	3,000
2/25	2,000						1	2,000
2/26	4,000						1	4,000
2/27	2,000						1	2,000
2/28	2,000						1	2,000
2/29	2,000						1	2,000
2/30	2,000						1	2,000
3/1	2,000						1	2,000
3/2	2,000						1	2,000
3/3	2,000						1	2,000
3/4	2,000						1	2,000
3/5	2,000						1	2,000
3/6	2,000						1	2,000
3/7	2,000						1	2,000
3/8	2,000						1	2,000
3/9	2,000						1	2,000
3/10	2,000						1	2,000
3/11	2,000						1	2,000
3/12	2,000						1	2,000
3/13	2,000						1	2,000
3/14	2,000						1	2,000
3/15	2,000						1	2,000
3/16	2,000						1	2,000
3/17	2,000						1	2,000
3/18	2,000						1	2,000
3/19	2,000						1	2,000
3/20	2,000						1	2,000
3/21	2,000						1	2,000
3/22	2,000						1	2,000
3/23	2,000						1	2,000
3/24	2,000						1	2,000
3/25	2,000						1	2,000
3/26	2,000						1	2,000
3/27	2,000						1	2,000
3/28	2,000						1	2,000
3/29	2,000						1	2,000
3/30	2,000						1	2,000
3/31	2,000						1	2,000
4/1	2,000						1	2,000
4/2	2,000						1	2,000
4/3	2,000						1	2,000
4/4	2,000						1	2,000
4/5	2,000						1	2,000
4/6	2,000						1	2,000
4/7	2,000						1	2,000
4/8	2,000						1	2,000
4/9	2,000						1	2,000
4/10	2,000						1	2,000
4/11	2,000						1	2,000
4/12	2,000						1	2,000
4/13	2,000						1	2,000
4/14	2,000						1	2,000
4/15	2,000						1	2,000
4/16	2,000						1	2,000
4/17	2,000						1	2,000
4/18	2,000						1	2,000
4/19	2,000						1	2,000
4/20	2,000						1	2,000
4/21	2,000						1	2,000
4/22	2,000						1	2,000
4/23	2,000						1	2,000
4/24	2,000						1	2,000
4/25	2,000						1	2,000
4/26	2,000						1	2,000
4/27	2,000						1	2,000
4/28	2,000						1	2,000
4/29	2,000						1	2,000
4/30	2,000						1	2,000
5/1	2,000						1	2,000
5/2	2,000						1	2,000
5/3	2,000						1	2,000
5/4	2,000						1	2,000
5/5	2,000						1	2,000
5/6	2,000						1	2,000
5/7	2,000						1	2,000
5/8	2,000						1	2,000
5/9	2,000						1	2,000
5/10	2,000						1	2,000
5/11	2,000						1	2,000
5/12	2,000						1	2,000
5/13	2,000						1	2,000
5/14	2,000						1	2,000
5/15	2,000						1	2,000
5/16	2,000						1	2,000
5/17	2,000						1	2,000
5/18	2,000						1	2,000
5/19	2,000						1	2,000
5/20	2,000						1	2,000
5/21	2,000						1	2,000
5/22	2,000						1	2,000
5/23	2,000						1	2,000
5/24	2,000						1	2,000
5/25	2,000						1	2,000
5/26	2,000						1	2,000
5/27	2,000						1	2,000
5/28	2,000						1	2,000
5/29	2,000						1	2,000
5/30	2,000						1	2,000
5/31	2,000						1	2,000
6/1	2,000						1	2,000
6/2	2,000						1	2,000
6/3	2,000						1	2,000
6/4	2,000						1	2,000
6/5	2,000						1	2,000
6/6	2,000						1	2,000
6/7	2,000						1	2,000
6/8	2,000						1	2,000
6/9	2,000						1	2,000
6/10	2,000						1	2,000
6/11	2,000						1	2,000
6/12	2,000						1	2,000
6/13	2,000						1	2,000
6/14	2,000						1	2,000
6/15	2,000						1	2,000
6/16	2,000						1	2,000
6/17	2,000						1	2,000
6/18	2,000						1	2,000
6/19	2,000						1	2,000
6/20	2,000						1	2,000
6/21	2,000						1	2,000
6/22	2,000						1	2,000
6/23	2,000						1	2,000
6/24	2,000						1	2,000
6/25	2,000						1	2,000
6/26	2,000						1	2,000
6/27	2,000						1	2,000
6/28	2,000						1	2,000
6/29	2,000						1	2,000
6/30	2,000						1	2,000
7/1	2,000						1	2,000
7/2	2,000						1	2,000
7/3	2,000						1	2,000
7/4	2,000						1	2,000
7/5	2,000						1	2,000
7/6	2,000						1	2,000
7/7	2,000						1	2,000
7/8	2,000						1	2,000
7/9	2,000						1	2,000
7/10	2,000						1	2,000
7/11	2,000						1	2,000
7/12	2,000						1	2,000
7/13	2,000						1	2,000
7/14	2,000						1	2,000
7/15	2,000						1	2,000
7/16	2,000						1	2,000
7/17	2,000						1	2,000
7/18	2,000						1	2,000
7/19	2,000						1	2,000
7/20	2,000						1	2,000
7/21	2,000						1	2,000
7/22	2,000						1	2,000
7/23	2,000						1	2,000
7/24	2,000						1	2,000
7/25	2,000						1	2,000

前頁より続く

期日	E. X. T.	E. S. P.	...	...	...	...	...	...	...	...		
12/19	5,200	400	9	1,350					45	10,650	210	
12/21	5,200								11	7,700	209	
12/22	700	600	7	1,190					12	2,190	208	
12/23	300	400						22	2,660	65	8,340	137
12/24	7,000	2,000	2	1,650					19	5,950	213	
12/25	500	600	11	7,900					18	4,300	200	
12/26	1,800	1,500							8	3,300	213	
12/27			12	2,660					12	2,660	200	
12/28		900	10	2,010					13	2,900	223	
12/29		600	5	1,600					2	1,600	232	
合計	50,460,983	11,137,010	130	32,740	19	21,700	31	41,220	65	537,653	227	
	29	62.9	66	26.6	175	6.4			65	100.0		

- (註) (1) 栽培本数(100本)主1病門休養の工労力として期間の半が第一工作削減
- (2) 接樹人費(2人)分益展 栽培料展(第2作展)
- (3) 播種日(6月/日)收穫期(10月/日~12月/日)
- (4) 販形法(前位中央農産組合 Ports-Alegre 派折所成託販先)

日 生産費支出の展緯

支出項目別	金額(円)	%	備 考
肥料代	60,570	26.2	1本当り0.8.65
出荷箱代	46,980	20.4	
販形手数料	46,852	20.3	売上高の8%
運送費	23,852	10.3	
農薬代	17,840	8.6	殺菌 殺虫剤
資材代	17,240	8.4	C-16 高極極根補電
労力費	13,470	5.8	期起区の人ま 等71
合計	230,827	100.0	

C. 収支対照 其の他

(単位C.5)

粗収入高	584,653	
支出高	230,827	
差引純益高	353,826	
分益取得高	212,276	純益の60%
1/病当生産費	511	
1/労働力の生産高	15,161	2.5 x 7.2ヶ月 = 16.0月
1/病当平均価格	282	



### B. 次年度(1963) 早熟栽培トマトについての生産費推定

一年毎にインフレーションの昂進と共に諸物価は上昇しつつあるが、1963年1月に於ける最低賃銀改訂を契機として、諸物価は殆んど一斉に大中の値上りをみせた。即ち最低賃銀が約60%上昇したことから、ガソリンその他の油料について政府は輸入の際の外貨為替差損を補償したため一斉に燃料は60%の上昇を来し、これに伴って運賃も殆んど同率であがり、生産地と消費地の物価差は愈々増大するわけで、工業面では聖州、其の他連邦中央と距離的に僻地にある当州では、以上の主要素の更迭はそのせ、殆んど同率で諸物価になどいてくるのは過去の例外なき実績があり、一年前の同期に対して一応平均60%の物価高騰とみなすことは極めて自然である。この様な情勢下において営農者の栽培計画について、更に綿密な計画が要求される。そして、はっきりした生産事業の思通しを樹立するために、一体次年度の早熟トマトほどの様な生産費を示すかを追求しなければならない。これは今回トマト栽培に従事して来た者が、トマトについての真の経営経済価値をあらためて認識するのに不可欠の問題であるからである。

(A)において算定した資材其の他の生産資材を基礎にして同一の方法で算出したものを表にすると次の通りとなる。

技術生産別	生産費合計 Cts.	/箱当生産費(除却)
1000本当 120箱	64,587.89	Cts. 492
- 100箱	5,610.90	561
- 80箱	53,229.00	665

### C. トマト栽培についての作柄の優劣と農家収入との関係

(A)及び(B)で算出したトマトの生産費は前にもことわった様に、これに使用する労働力を計上していないのであり、ここでは家族労働の生産性を其の生計費などと照合して、単独経営の農家のトマト作についての参考事項にしようと思う。今こゝに

あげる供試仮設農家は Porto-Alegre 近郊に於て最も平均に在する邦人農家構成にあるものである。

- ・家族構成 夫婦及び子供3人(計5人) 稼働力 1.5人
- ・経営経済的適正標準規模 6000本(3a)

第一表 1962年春作早熟トマトの結果表 (単位G\$)

1,000本当 収量 箱	6,000本当 収量 箱	実績推定 価格/箱G\$500	生計費合計	差引純益高	1稼働力/1ヶ月 当りの生産性	7ヶ月間の生活費 105,000に於ける残金
120	720	360,000	221,040	138,851	19.851	+ 33,960
100	600	300,000	210,600	89,400	12.771	- 15,600
80	480	240,000	199,680	120,320	5.760	- 64,680

註 早熟トマトの栽培期間は7ヶ月であつて、其の間の生活費は1人当月額G\$3,000である。

此の間の最低給料は月額G\$11,200である。

第一表に照られる様に1962年早熟栽培に於ては生産過剰による、トマト価格の暴落によって結果は、1000本当120箱出荷した農家の場合漸くして其の間の生計をまかなうに足らぬものであつた。一たん市場に品物が下つて暴落をみる場合でも、上作を確保しておれば、其の不況は乗り切れるという確信が出る所以である。尚当州においての大型の柿型品種で一般に Tomate Gaucho と呼ばれて居るものの作柄としては、1000本当120箱は可成り上作に位する瓜類のものであつてみれば、インフレーションによる生活費の高騰は随期的な生産過剰と相まって徹底的な打撃を全面的に与えたが、其の中ぐも作柄が悪ければ、其の差は全く因もあてられない結果となつた。前にも一部分れたが實際面では上作の平均1箱当G\$570だとすれば、上作以下の作柄の平均価格は下級品が大量に出るのでG\$500をマークすることは出来ないのであつて、其の欠損額はとつと、とつと大ぎなものになる筈である。

問題は、これ程までにみじめな結果に於つた1962年春作であつたが、多くの近郊トマト栽培者は、尚今後引続いてトマト経営を継続しようとしているわけであつて、誰とかがこのまゝで同いけぬ

とこぼしながら、半ば機能的な態度で、これを仕立てしてしまっているのではないかと伺う事である。そこで栽培してゆかねばならぬ。昨年度(1965年)同期に於ての沖縄産経済は前年(1964年)同期のものに比較して軒倒して行かず、むしろ以前にもまして不況は悪化し、そのためにトマトの販売価格も大して大きな悪化は行われぬといふ事である。とつとも入荷量の如何によつてちかちわけであるが、当州の気象上の特徴もあり、トマト植付時期になつてそれこそ面期的対策がなされぬ限り、相場を以前の把握するのには至難のことである。こうなつて来ると栽培技術上の信をこくなく、生産者は何れも補償たりを取らなければならぬのであつて、場合によつて何れも水虫に悩まされることにもなりかねない。

参考の爲に第二表として1965年春作についての推定表をかゝつてみるが、此の表は、現実の事であり、そして大きな問題点を合せているのであつて、生産者は此の表のまづいての態度を批判し、抽出して生産方針を定めるべきである。

第二表 1965年春作トマトの経済的推定 (単位G\$)

1000本当 収 入	6000本当 収 入	仮定価格/箱当 平均G\$1,000	予想生産量	差引利益高	1箱個々の 生産性	2400箱の生産能 力275,000箱に 対する
720	720	720,000	354,240	265,760	34.83%	+170,760
600	600	600,000	336,500	263,400	25.08%	+28,400
480	480	480,000	319,200	160,800	15.31%	-14,200

上表の中で若し平均1箱当り価格がG\$200に落ちつくことになつた場合は前年度同期作の場合と同様に獲れた栽培技術でしかも特産の栽培条件下で極めて上作となしとせば、その生産量は46,740の利益を獲るのであつて、此のものでも再生産に必要の資本としかは取るに足りないとのみならず、むしろもののである。上表の様に「来れば」はよけが、現況から推して採り取りなもので、平均価格G\$1,000を全体的に望むことは極めて難かしいことである。

(资料)

消费生活指数の変遷

(Rio GRAPHIC DC Soc. 大蔵省経済研究所調査資料より)

年	項目	食料品	住宅	衣服	医薬品	娯楽	交通	教育	其他	合計指数
1943		100	100	100	100	100	100	100	100	100
1944		102	132	114	107	154	100	100	100	110
1945		102	151	116	115	177	105	108	104	118
1946		113	143	151	113	200	136	119	117	129
1947		123	162	153	121	206	102	122	117	144
1948		142	174	175	119	212	117	122	125	152
1949		170	181	202	122	225	121	122	123	184
1950		261	266	271	223	211	128	122	217	270
1951		383	370	374	222	222	223	125	253	358
1952		320	377	365	292	268	272	142	322	372
1953		421	522	443	463	363	335	153	434	433
1954		523	522	441	501	572	402	143	511	523
1955		260	520	221	232	621	322	165	655	699
1956	1	277	611	250	212	622	419	163	722	799
	2	275	614	251	210	620	417	162	720	804
	3	290	625	250	216	627	412	162	722	812
	4	1019	337	329	252	715	230	168	927	838
	5	1017	345	322	252	712	227	168	927	837
	6	1010	341	324	262	723	232	170	1025	842
	7	1157	345	322	265	734	227	170	1127	846
	8	1151	341	321	262	727	223	170	1127	845
	9	1117	347	325	263	727	223	170	1121	845
	10	1142	347	324	264	726	222	170	1125	849
	11	1132	347	321	262	727	222	170	1125	847
	12	1121	347	321	262	727	222	170	1125	847
1981 平均		1100	342	327	264	726	222	167	1113	847
1957	1	1144	391	326	259	1064	605	173	1460	1108
	2	1120	394	325	260	1055	601	173	1487	1102
	3	1122	417	324	262	1091	675	173	1551	1193
	4	1243	330	320	263	1124	680	173	1551	1202
	5	1488	325	322	264	1115	678	173	1557	1213
	6	1523	365	340	267	1350	710	173	1523	1253
	7	1603	381	351	276	1157	726	170	1577	1312
	8	1721	406	359	283	1208	739	170	1721	1404
	9	1818	423	366	285	1305	794	171	1811	1428
	10	1830	430	365	287	1315	804	170	1830	1437
	11	1840	447	370	282	1378	817	170	1845	1443
	12	1833	430	365	283	1401	825	170	1833	1437
1963	1	2251	438	372	285	1431	864	175	2223	1704
	2	2222	450	381	286	1324	863	170	2222	1702
	3	2164	438	372	285	1393	852	175	2164	1707

食料品消費状況 (Parbo-Alagre市氏)

(食料費の物価指数算定の規準として用いられているもの)

(RIO GRANDE DO SUL大学経済科学研究資料より)

単位%

分類	食品名	家族構成数				全家庭平均
		3人	4人	5人	6人以上	
動物性食品	牛肉(合豚羊肉)	20.56	21.11	20.73	20.29	20.69
	片焼肉	8.56	0.63	0.59	0.40	2.92
	牛乳	9.75	10.87	10.78	9.81	10.27
	ソーゼン	2.41	2.49	2.26	2.44	2.41
	ソーゼン	1.15	1.18	0.83	0.66	0.97
	ソーゼン	0.62	0.77	0.70	1.04	0.78
	ソーゼン	3.62	4.21	3.86	3.13	3.72
	ソーゼン	1.20	1.09	0.90	0.80	1.02
	ソーゼン	4.23	4.46	4.45	4.79	4.42
	ソーゼン	2.28	2.38	1.94	1.60	2.10
穀類	米	5.77	6.31	6.87	7.57	6.55
	小麦(豆)	1.46	1.83	1.86	2.45	1.87
	トウモロコシ(粉)	1.35	1.60	1.75	1.44	1.57
	小麦	1.77	2.27	2.22	2.48	2.13
	小麦	2.22	2.44	2.41	2.75	2.45
	小麦	9.22	10.60	12.81	13.90	11.36
野菜果物類	バナナ	1.86	2.34	2.52	2.09	2.17
	バナナ	1.95	2.01	1.75	1.67	1.81
	バナナ	1.41	1.29	1.35	0.98	1.27
	バナナ	1.30	1.19	1.27	1.03	1.20
	バナナ	1.04	1.22	0.96	0.91	1.04
	バナナ	0.73	0.93	0.84	0.74	0.81
	バナナ	1.02	1.24	1.17	1.14	1.14
	バナナ	3.04	3.56	3.28	3.45	3.33
	バナナ	0.86	0.92	0.93	0.96	0.91
	バナナ	1.03	1.15	1.22	1.64	1.10
その他諸品類	油	1.17	0.99	0.90	0.70	0.96
	油	2.46	2.42	2.50	1.96	2.34
	油	0.32	0.38	0.33	0.34	0.34
	油	0.39	0.38	0.27	0.40	0.36
	油	4.33	4.75	5.06	6.10	5.00
	油	0.25	0.37	0.32	0.29	0.30
	油	0.37	0.33	0.36	0.35	0.35
計		100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

(註) 消費金額について%で表したものである

## 肥料価格の推移

(RIO GRANDE DO SUL 州米穀院調査資料より)

(1トン当価格 単位 Cr\$)

年 月	肥料	塩化加里	硫 安	トリ磷石	重 過 石	過 石	1- $\alpha$ N T <sub>1</sub> X <sub>1</sub> T <sub>1</sub> T <sub>1</sub>	骨 粉	石 灰
1952		2,200	-	-	-	-	1,450	-	-
1953		2,350	2,650	-	-	-	1,450	-	-
1954		3,300	3,550	3,200	3,800	-	1,990	-	-
1955		4,290	4,615	4,087	5,187	-	2,537	3,000	500
1956		4,450	4,750	4,850	4,950	-	2,350	-	-
1957		4,980	5,080	5,000	5,680	-	3,320	-	-
1958		6,550	6,850	7,600	8,980	4,963	4,430	-	-
1959		7,855	8,310	10,313	11,151	7,135	5,610	4,000	600
1960		8,395	8,557	11,053	12,105	6,215	5,665	6,000	1,600
1961		12,200	15,100	14,835	16,730	7,713	8,865	15,000	3,000
1961.12		23,000	22,000	29,850	26,000	15,200	12,000	-	-
1962.1		29,000	27,000	35,000	35,000	16,000	13,500	25,000	11,000
2		29,000	27,000	35,000	38,000	16,000	13,500	-	-
3		29,000	27,000	35,000	38,000	16,000	13,500	-	-
4		29,000	27,000	35,000	38,000	17,000	14,000	-	-
5		32,300	28,850	35,000	41,500	18,000	14,500	-	-
6		32,300	28,850	35,000	41,500	18,000	14,500	-	-
7		32,300	28,850	35,000	41,500	18,000	15,500	-	-
8		33,000	31,200	35,000	45,000	18,000	15,500	-	-
9		34,500	31,600	35,000	45,000	18,000	16,500	-	-
10		37,500	33,000	40,000	45,000	18,000	16,500	-	-
11		37,500	34,000	40,000	46,500	19,000	16,800	-	-
12		38,000	34,000	42,000	46,500	21,500	22,750	30,000	6,000
1963.1		41,250	36,800	42,000	46,500	21,500	22,750	30,000	6,000
2		41,250	37,500	42,000	46,500	21,500	22,750	30,000	6,000

## 燃料油価格の推移

(RIO GRANDE DO SUL 州米穀院調査資料より)

(1リットル当価格 単位 Cr\$)

年 月	種 類	ガソリン	石 油	ディーゼル油	モーター油
1958		6,19	4,98	3,24	-
1959		9,08	8,47	6,35	48,78
1960		9,38	8,77	6,58	49,33
1961		18,14	12,84	13,39	78,19
1961.12		21,70	13,41	16,50	90,00
1962.2		22,20	17,33	17,20	90,00
1963.1		37,70	36,90	29,10	159,50

農薬類の価格の推移

(Doino Agricre 市内商社調べ)

(単位:円)

薬品名	年	1951年	1962年	1963年	1963年の 1951年 に対する倍率
サイゼン	578	450	980	1,290	2.9倍
サイゼン	M22	650	1,150	1,730	2.7
硫酸 銅		120	200	230	1.9
ホアノナナ (水銀剤)		500	700	1,350	2.7
タマロザン (銅製剤)		220	390	830	3.8
ロントックス5% (有機磷剤)		200	370	625	3.1
ジアルサドース (亜酸化銅剤)		185	900	1,000	5.4
アルドリシ 5%		80	110	700	2.5

主要食料品小売価格の変遷

(単位:円)

食料品名	単位	1956.12.	1957.12.	1958.12.	1959.12.	1960.12.	1961.12.	1962.12.	1963.12.
米(短粒)	kg	144,00	182,00	160,00	185,00	255,00	370,00	485,00	600,00
小麦粉	kg	14,00	14,00	19,00	24,00	31,00	56,00	65,00	98,00
塩	kg	7,00	7,00	10,00	14,00	16,00	22,00	37,00	50,00
砂糖	kg	14,00	15,00	14,00	22,00	25,00	34,00	51,00	65,00
パン	kg	15,00	16,00	19,00	22,00	26,00	57,00	60,00	110,00
豚肉	kg	42,00	45,00	54,00	85,00	140,00	135,00	145,00	260,00
食用大豆油	ℓ	55,00	65,00	57,00	87,00	95,00	115,00	165,00	210,00
うどん	kg	30,00	30,00	36,00	47,00	72,00	80,00	90,00	180,00
牛乳	ℓ	6,00	8,00	15,00	20,00	22,00	26,00	26,00	40,00
食用酢	1本	7,00	8,00	8,00	9,00	11,00	15,00	25,00	33,00
牛肉	kg	40,00	42,00	48,00	80,00	150,00	160,00	240,00	325,00

(註) 価格は地産によって大きな差があるが、本表は  
ウイテム地方の標準平均値とした。

## 第二項 トマト栽培について考えなければならぬこと

これまでに見てきた種々の分析から今後のトマト栽培について一応結論的に本邦の幸を争おうと次の通りであらう。全生産者にとっては大きな警告となるもの。

1) 栽培技術は市場でのトマト価格の暴落に対する最大の防衛武器であって、優良品種に有利に販路されているものである。

従って少くとも1000本当120箱以上の出荷を以て生産者となれば、経営収入の最大の確保作物としてトマトを取り廻すことは極めて危険である。これは早熟栽培に於て極度の危険である。

2) 凶悪的栽培条件の内特に乾燥、降雹等の不慮なる事態に陥る恐れが多いことは、今と云わねば他論の必要が無くとも思い切った経営は危険である。

3) 当州特有の随期的な早夏の急変にそなへた必要に遠逝する早熟栽培は生育初期の多雨量で根群の発育不全、落花、落果、腐爛等の危険にさらされ、収量の安定を期することからすれば、大またき逆の結果を招くものであって、努力、生産費の蒙却をせぬが私ない。従って早熟の怖れはどこにあるかを十分反省して徹底的に早期収量確保に全力を傾けるべきである。

4) 晩熟トマトは適期適地栽培が特に基本となる。従って冬季温暖な凶悪条件に晒される場所は常に優位にたつものであって、其の点近郊ではフミー、アレシ、ノーボがらイダフアン方面及びウイワモン等の比較的高い温暖な地帯はこれに属している。又若干距離的には問題があるがトマト単作で経営を安んずることを思慮にするのならば、海岸沿いのオマリホからトーレス方面にかけて更るべき地帯がある。共同出荷対策が尤解決すれば牧家家族単位で適地に赴くことは極めて危険であって、これは断期的にはむしろ近郊の適地といわれる地帯をしのぐであろうと考えられる。



(42)

5) 低湿地帯や強風地帯が高冷地帯では早熟栽培をねらうべきではない。特に受播業に自然条件が好適な地方では、最近の操にはげしい市場性に対して其の経営を有利に轉くことは出来ない。特に最近の様に栽培者の分布が広範囲に普及すると第二次時にこれに併行して厄介な病害發生の頻度が高くなり、そのための欠損株などで予想通りの収量が大きく外れて経営としては採算のとれぬ結果を招きやすい。自然的条件に対して栽培技術はこれを克服する力の決手にはなり得ないものであるから、こうした地帯では思い切って普通型から晩化型のトマト栽培をねらうのが得策である。São Leopoldo 線の低地帯 Guaiiba の強風雨地帯及び Gravataí 地方の低地帯など一般に低地帯全般に於てである。

6) Porto Alegre 近郊に於てのみでなく当州全域に // 月中旬頃は例年急激な乾燥期にはいり、そのため前期に発育した根群は余り地下深層部迄は伸び切っておらず、気温・土壌湿度の急変にたぶらぬ。樹は急に劣るとのである。そして熟の成熟は急速に進むので市場では此の時期に大量のトマトがきとまってくるものである。例えば後述資料でも理解出来るのであるが、収穫開始日から数えて10日間に採数は急に増加し、其の採量も間並いで大方のものが市場に運ば返されるわけで、これはその年の気象で若干の違いはあるが、此の州特有の平均した気象例として出荷期が一層にきとまるのは或る程度やむを得ない。従って樹付面積を日別に十分把握し、更に其の後の発育状況を密観的に統計を続け事前に十分の販路対策を講じておかねばならない。

7) どの時期であつても生産費がトマトの単価価格に迫りかけて来る程、価格は伸びぬ運送も鑑み生産安定を期して商売本位で取り組むべきで、これを更に確実にするための灌漑用水源の確保と運送設備は計画する場合の基本と考へなければならぬ。

- 8) 家族構成上労働力の脱却な農家でも経営の支柱を担っている  
 家長格のものが、市場で販売している場合が多々あるが、これは  
 労力的な面で経営全体からすれば大きなマイナスで、折角あ  
 とどう一息というところで、其の後の肥培管理が徹底せず貴重  
 な純益を免れぬことが多い。できるだけ積極的に生産者のため  
 の生産者の自主的な組合の強化に協力して、一日でも早く生産  
 一点ばりに精魂を傾けられる態勢を整えるべきである。
- 9) 優品の率が収入上大きな力を担っていることは前にも述べた  
 のであるが、前述資料の栽培実績表にも免られる様に、1級品  
 (EXT)、2級品(ESP)の割合にしめる率が60~70%であると其の売上  
 高にしめる割合は85~90%となり、3級品(1<sup>o</sup>.Z. DV)等は全体の売  
 上高からすれば極めて僅かである。量的には2割以上もあり、  
 しかも全体の生産者の出荷総数は其の生産者の栽培技術の優劣  
 によってマチマチで、現在のPorto Alegre市場ではこの種の粗悪品  
 の占める割合は上記のものを遙かに上廻っている。而して若し  
 一箱の入荷量が3000箱を記録された時は優品は大体2000箱程度  
 で、実は粗悪品が市況を繁茶苦茶にしていることは十分指摘し  
 得るところである。今後価格の暴落を促進するこのような因子は  
 徹底的に排除してゆく努力が必需である。それには優品生産技  
 術の向上は申すまでもないが、一方この粗悪品の処分を徹底的  
 の方法で推進すべきで、養液飼料に廻したり或いは更に積極的  
 なMassa de tomate工業の誘致を推進しなければならぬ。一人  
 一人の生産者にとってみれば販売態勢さえ強化されておれば、  
 これらも尻棄処分しても、他の優品価格の上昇により十分これ  
 は償われるし、又値下りを最少限度に食い止めることで極めて  
 有利である。Porto Alegre市場は一度下落させたらなかなか癒上げ  
 を円滑に推進出来ぬ程市場機構は完備されていないので、この  
 位の思い切った処置が肝要である。足元の小銭に気をとられず  
 ぐで大きなものを決めることにならぬ様大きな決断が大切である。  
 São Paulo市卸市場はRio de Janeiro市場と共に何国ではこれらの要因に

わけて十分の対策が講じられており世のためには無茶な暴落が防がれているのであって、それらはまた、付随的な大の介個人荷量を探ることによって、極めてスムーズに調整されているからである。

(資料)

SÃO PAULO市場に於ける当州産トウモロコシの販売実績表 1962年12月20日～12月30日  
(南信中央農産組合製)

販売日	等級	Porto Alegre産	São Paulo産
12月20日	EXT	1,200	1,500 ~ 1,800
	ESP	-	1,200 ~ 1,500
	1等	-	900 ~ 1,200
12月21日	EXT	1,000	1,200 ~ 1,500
	ESP	800	700 ~ 1,200
	1等	-	600 ~ 700
12月22日	EXT	500	1,000 ~ 1,300
	ESP	-	800 ~ 1,000
	1等	-	600 ~ 800
12月23日	EXT	1,200	1,700 ~ 2,000
	ESP	800	1,400 ~ 1,700
	1等	-	900 ~ 1,300
12月24日	EXT	1,350	2,500 ~ 2,800
	ESP	1,650	2,100 ~ 2,500
	1等	1,400	1,500 ~ 2,100
12月25日	EXT	1,200 ~ 1,800	2,500 ~ 2,800
	ESP	1,000 ~ 1,400	2,100 ~ 2,500
	1等	600 ~ 1,300	1,500 ~ 2,100
12月26日	EXT	1,600 ~ 1,850	2,000 ~ 2,300
	ESP	850 ~ 1,100	1,500 ~ 2,000
	1等	700 ~ 1,200	1,100 ~ 1,600
12月27日	EXT	850 ~ 1,100	1,600 ~ 2,000
	1等	900	1,200 ~ 1,600
	1等	650 ~ 700	700 ~ 1,200

(註) 1. 此の期間中のPorto Alegre市場はEXT. Cr\$ 300 ~ Cr\$ 600前後である。  
 2. 熟達されたものはSanta Cruz種である。  
 3. Porto Alegre産の等級は上段に示されるようにSão Paulo市場では通用しない。  
 4. 南信中央農産組合製で熟達されたものは約4,000箱である。

### 第三項 複合(多角)経営の問題点とその対策

1957年春作のトマト。その他多くの果菜類が時期的に市場にだぶつて悲惨な結果を終った中で、トマトは全くその極に達したことは再三のべたところである。しかし此の時期に於て他の作物を栽培した農家でも単作経営の場合は殆んど最盛期に於てはみじめな価格となったもので、これは一応果菜類共通のものであった。其の理由は消費者の購買力の減退もさることながら、殆んど全部の果菜類で生産が需要を上廻ったことである。尤も単一種類の作物は販路で頭打ちされたので、複合された経営で此の不況を最少限度に食い止めようとする事はなかなか勇明であった。然し此の場合も同時期の生産過剰と事前に予期してたくられた複合経営がなされたものは至って少いのであつて、寧ろ結果から本論をひき出すという行き方になつてしまつた様子がわけである。本項末宮農事種資料にもかゝつておいたが1957年春作として平熟トマトと栽培を奨送り、ピーマン、胡瓜、イタリア南瓜、茄の四種組合せの経営を実施したものについて、其の経営経済的な面での問題となつた点を拾ひあげ検討しながら、今後の合理的な方法を究明しようと思ふ。

先ず各作物について労力関係について、その分配の割合が記録的に明らかになされていないのは何んとも惜しい事であるが、当年度の反省点として労力上の噴出としては全栽培期間を通じて最も多忙を極めたのは収穫、選別、荷造作業であつた。次いで定植時の労力であつたが、それぞれに作物について施肥に対する適量濃度が異なるために、この場合は先ずイタリア南瓜、胡瓜、ピーマンの順の順序となっている。其の中で胡瓜は即成種日性種で今従来栽培様式をとつた場合にビニールで保護した木柵床内に定植してあるので、既成成産苗の成長により人為的な分配割合とられたものがある。又、其の他の除草、土着、薬剤散布、給水等の諸管理作業は各作物平均して総計の労力はみられぬ。然し肥料の消費量も

番茄の誘引は婦人労力に一任したものである。そして最大の労力上の山となった出荷時は最盛期に規定の箱詰が出来ず大箱に粗推に振り込んだ事が多く、そのために平均単価が下落して大きな損失が思われた。尚、ここで特に指摘しておかなければならない事は専ら販売をひきうけている農産組合の販売機構が十分な能力を発揮出来ず、短期的に主取扱品であったトマトの処理に追いつくられて十分の力が発揮されないう面があったことである。この点は其の責任を一方向的に片づけるべきではないので、今後組合と組合員の積極的な進歩を期しての話し合いが必需である。これに於ても組合の販売機構強化が先決問題として浮きあがってきている。今後の営業安定のための共同出荷販売に大きな期待がかけられる時だけに、単にトマト生産者に於てのみならず、他の作物の面でも大きな影響がある。ここで最も処理に困ったのは言うまでもなく中級品以下の粗悪品であって其の結果は争積が争積だけによく理解出来る。このうちビーマンは異例の晩産のため栽培面積が実質的に大きく縮小され入荷量は極めて少なかったのであるが、これとても販売実績はビーマンの一般出荷相場からすれば決して満足する様な結果は出ていない。これも上記の様に処理能力を逸かに上廻ったトマトの入荷量が邪魔したものと考えてよい。初て前に引例した複合経営の販売実績は次表の通りである。其の内容の詳細は本項末の資料を参照されたい。

〈複合経営の生産実績の一例 (1962年)〉

作物名	栽培本数	収穫販売数量	販売金額(円)	平均単価(円)
ビーマン	18,000 <sup>本</sup>	117,344 <sup>箱</sup>	600,947	5.13
甜瓜	2,800	21,672	151,570	6.99
イタリア南瓜	3,500	8,341	92,452	11.00
茄	2,000	収穫なし	0	0
合計	-	-	844,969	

(註) 従業労力 家族労力(2人) 雇用労力(3人)

茄は品種不熟により商品価値なさをため途中で栽培打切る

全経営に要した生産費支出合計額は別紙資料の通り55万、18/クベロスとなっているが、このうち最大の支出は労力人件費14万、500<sup>000</sup>となっており、これは全体の約26%を占め、次いで肥料費が130,400<sup>000</sup>を約24%となっているが、その他については作付面積や経営上の複雑さからすれば他の蔬菜に比べて決して多いものではなく、特にトマトに比べれば非常に軽微であることがわかる。而して上述の表中にも見られるように、爾初の営農計画のうちで茄子についての収入が全然見られなかった事は、この経営が最も優れた結果に終わらない致命的な原因となっているものである。即ち、茄子の栽培費では種子代その他一切の経費を含めて少くとも30,000<sup>000</sup>が最低となっており、しかも適正規模の確保という点を強く保持してやって来ただけに、この間に使役は労力を計算に入れば、経営全体としては少くとも100,000<sup>000</sup>の粗収入のくわいが出たに拘らず、それには無関係に約60万円の無駄な支出を承ていた結果となっているのである。これは茄子種子が不良系統であったために相違品で市場での商品価値が全然認められぬものであることが栽培の途中で判明し、そのために、管理を放棄したものである。このように経営の中で一つでも思わぬものが出て来ると、他の一つの利益をほろぼしてしまうのであって、品種の厳選や諸管理については単作経営なみの周到な心掛けがのめられるべきである。特に経営にくみ入れられた、それぞれの分野が100%生き残る場合にのみ、真の複合経営の強みを発揮することを肝に銘じておかなければならない。いかに減収の方では場合によっては二息を迫って一息も得ずの誘通り、結果的には単作経営にその利を譲らねばならぬ破目に陥るものであって、最近の近郊郊人の営農に於て、このような例は案外に多いことを指摘しておきたい。要は徹底して真の複合経営の意義を認識することが先決である。以下これから漸次とりいられる複合多角経営に於て、その営農計画を組む時に是非参考としなければならぬ点を要約して列挙すれば概ね次の通りである。

#### (1) 適人適作を敬守すること。

経営が単作に比べると、その組み合わせの数が多くなる程複雑になるので、営農者他々の特技をその基礎にして当該地方で自然的諸条件を十分に検討した上で誰が見ても決して無理のない組み合わせ体形を決定すること、特に市場の状況や、他の営農者の極く表面的なめられなごに眩惑されたり、失望せられたりし、やごすれば主体性を見失いがちであるので、特に注意しなければならない。

#### (2) 家族の労力力構成を基準にした営農形態を原則とすること。

脆弱な域力力しか持ち合わせない営農者の場合、この種の経営を行うには、半ば前提条件として雇用労力の導入の問題がある。従つて当該地方でその労力が確保出来るかどうかについて前もって調査しておくべきはならないのはいうまでもないことであつて、これが一定満足されたり愈々実効されるわけであるが、この経営が良い結果を生み出すか否かは、勿論市場性などとも関係があるが、何と云つても経営責任者の指導性、企画性、判断力、実行力、実力等、より優れた経営手腕にかかっていることと過言ではない。しかも若し適格の雇用労力の確保について困難がある場合は、折角の経営者の実力が発揮出来ないであつて経営が向上するために人を得ることに重きを置かれる所以である。ここでは有能な専門技術を或る程度身につけている雇用労力力でない限り、単なる労力不足の補助として導



(5) 自力と集約を全管内で調和をはかること。

農場経営についての考え方、自給と現金について、はっきり区別し、切りわけなければならないことは言うまでもないが、現今のように殆どすべてのものが現金用とされて後、他への用途への利潤が廻されている場合、この考え方はとんと異なる場合がある。然しなかりわ国日本に於ける農業者の行き方又、伯国に於ける中産農業者の経営状態について今一度振り返って見る必要がある。これからの管理には少くとも中心となるものが、はつきりしている筈である。即ち、日本では地帯別農業立地条件にマッチした稲作、麦作或は雑作などによって農業収入上一応中心となるものがあり、当伯国でも少くとも専業農家である限り経営の支柱ははつきりしているもので、多くの場合は雑作がその基礎となっているものである。そしてその基本線も固定した上で多少新しい分野の一角が付随的に取り組まれているわけであって、そこに於て始めて多期性をもって集約化された農業がより大きな効力を発揮するのである。

尤も、最近の日本のように農業立地から工業立地へ、或は親米立地へへと転換しつつある國境を隔たつた都市にまじり、とまきられる形で肉畜生産物の消費量は急激に膨張するので、愈々この農業構造近代化の波に乗って、徹底的に農業の企業化、農業の合理化の問題を軸として改善されるものであるが、伯国の政治、経済情勢がその農業生産の改革をいかに推進するかにより大きな力を注いでいる懸念がある限り、やはり伯国の国情を無視しなかつた、余りにも飛躍しすぎたりするのには極めて慎重を要するものである。

現下の派采市場の混乱は、莫大に斯うした伯国経済、或は客觀情勢の充分な把握を以て、無条件に資本主義農業経営のおもむきままに生産に生産を重ねるための必然的な結果であつて、農業生産の主体性の脆弱さを表現するに充分であつたと云ふよう。結局は現在の農業のものが近代化には間に合っていないものであるが、少くとも年間の生産をみだすに必要にして充分な安定した作物を導入して、それを一応の基礎として、その上にて集約的なトマナリ朝瓜なり何々の農業者の特技を充分に生かす作物を栽培せしめ、これを栽培したような不採り最少限度にとどめられよう。その意味で糧食経営の強みは、はつきりしているのである。

(6) 協同組織又は共同管理体形への考察を試み、思ひ切つて実行すること。

生産物の販賣価格に対して生産コストが切迫して来ているために予期に反してその利益が少く、農民の利益に大きな犠牲を与えているのであるが、今日の農業者の経営方針や内容について、一つの曲角を狂ひ切れていることは当然のことである。そのため一体とのようして対処して行くべきが、これこそ現在の個人経営等の最大課題であつて、ここに伯国経済の要綱に於いて単独でのとむか、それとも共同でかつ集約的に進むべきかを真剣に考へてみる必要がある。それについて結論を出すために一応、順を追つて是々の問題を考へてみたいと思ふ。

(1) 機械的単作経営は、都市近郊農業のあり方としては極めて原則を破つてしまつてしまつたのであるが、今市場的に絶對的に品不足が明らかになつて居る特定の時期を以てして種付けは飼育以前にその生産物が果して果り位の価格に落ちつくかを予想することは容易な事ではない。これこそ現下の農業事情の最大クナズミになつて居るので、最終生産物についての生産費が、本筋として算定して置、経営の不安は受れない。特に市場中心の仕商取引活動に於て米、オリーブの市場に於ける今日の近郊農業に於ける各農業者の市場上のわかりと去つたものが實は極めてとりよりの方針として推進されて居るのである。この果や瓜類の動向がどうなつて居るのかについての客觀情勢の判断を大きく誤ることは争ひのない。1962年11月からの所謂当地方の果菜類の早熟栽培の結果は典型的なものである。この季は他の州内中東部の前年より一層進み、更に生産者の数が増加することと生産者の経営(特に作物)規模が急激に拡大されてゆく当然の結果として、川最大の市場を米の自給として生産内容が変わつたこと、この問題に急を感ずりかけたので考へられる。生産者の環境が飛躍的に拡大されたのは前にも述べた通り、過去に於いて全般的に伯国の近郊農業の発展が、そうせんとする向しあるが、一面将来より深刻な伯国経済に於ける基礎確立のためのおせりも迫つて居るは、おそれない。一方生産者の数の増加は最近一々顕著な傾向に於いて居るのである。所謂近郊居住の機械化農家の伯国人の多くが一時的現金収入の道として農業経営を専らに導入して居る定めて居る。この事は道路の整備、農村の発展の向はみられる貨幣経済の意味が、経済生活や文化、娯樂の増大などから増大の力に於いて、



れたもので、極めて望ましいことなのである、こうして小規模の自給自足の非專業蔬菜農家が市場へ生産物を送り込み、しかも充分の利益を入手するためには協同による運搬車の確保を實施して小規模なるが故に果せなかつた、よ前道(た)營業形態への夢を實現したものである、然しひから彼等と彼等なりに最も高値の予想される端境期をマークしてそれと生産を集中せしめようとする傾向は一途、その基礎になつては種作自給自足の第一として伸ばす策でもあり、あくまで自給自足態勢を崩すことなく、省力経営を進んでいるわけ、生来の國民性の一つである厚根性(かき好む)そのまゝに人と人と生産するのであるから、その市場への影響は重要な結果をもたらす一助としてなつては、大にトト作については栽培技術上の困難性があるため、一部のドイツ系を中心とする北歐系伯國人をのぞいては、大に目立った現象は見られない、然し他の果菜類(特に西瓜、胡瓜、南瓜、メロン等)に於いては、これらの生産の極めて大きな力として市場をゆさぶっている、ここに於て、従来は当州の端境期として高値をマークされていた時期が結果的に、極く早朝をのぞいては、すでに其の勢力を奏せられかゝるようになって来て、端境期の投機性は安定しているように見えて、実は大きな危険を伴つてゐるという相反する二つの要素を共存せしめてゐることを充分に銘記してはかゝるべきでない、農業技術の進歩は端境期への生産の安定を可能ならしめ、又その増産はその生産を大きく拡大せしめて従来は端境期を縮小させしめたわけである、近代農業の当然の決着点はそのことにあり、周年供給の確立の意義としてここにありわけである、当州は植生上極めて好都合の立地条件下におかれてゐるのである、中でも氣候溫和な当州は冬から一足とびに夏に移りゆく亜熱帯性を加味されて、この種の端境期は永久に安泰であるとするのは、この時よくわの態度に幸いものと云ふべき。

(四) 再三ふれるように、これまでの邦人農業者の近郊農業は家族労働力を中心としてなされて来たものであるが、これは近郊農業の原則からすれば、全く正しい進み方である、それが一つの特徴だと云へる、大い豊かな経営を推進してゆくためには、家族労働力の豊富に大きな問題点があるわけであつて、大きな労働力をもつたものは、この原則通り着実に安定した経営をすすめているものであるが、本来の豊富な家族労働力を充分に駆使して多角多毛作により豊饒な立地条件を充分活かしてゆく近郊農業の意義をみる時、現在の日系農家は実は根本的にどうにもならぬ一つの弱さをもつてゐることは否定出来ないものである、従つて、このような脆弱な労働力による経営が当然落ちつく単作経営と全く其の意義が認められぬわけではないのを理解しなければならぬ、そして中には、こうした弱さをカバーするために雇用労働力を豊富に導入しようとしてゐるものもあるが雇用技術の方面で或は科学性に立脚しない農業経営の面を、それといった機械的なものが見出されないのは、やはり原則から離れた農家の位置と、インフレーション下の農用土の現状がこれを充分規制していると思われるので、土壌、氣候等の自然的立地条件を觀察者個々の労働の生産性と科学的栽培技術、経営技術によつて、どのように生かすこそ、真剣に考えられねばならぬことであり、場合によっては新しい分野(方面)にぶみ出さねばならぬ経営家が出て来る筈である。

(五) それではこうした労働的に脆弱な農家の綿密な現状分析を行つて、次のような到期的な共同(協同)経営をすすむとすれば、農業経営上の種々の問題は解決に向つたものである、或はすでにこうした強かな營業形態を長期に考究しているものもあるので、其の際の参考となると思われるものを拾ひあげてみようと思ふ、この場合あくまで人間関係に於て、かたじけなく結ばれてゐることか、最大の鍵であるが経営そのものの性格も企業体としての合算のためは、個々の力では経営の突がわからぬのを充分知りつゝの共同経営であるから、案外うまく行くのではないかと云われる、よく云われる言葉は人なりの金言のように、人こそその企業を左右するものである。

※ 共同経営の主旨と目的

労働的に極めて脆弱な経営者、単作経営となりざるを得ない、しかし生産物が激変するたゞ、市場への輸送費の他に多くの無駄が生じ、計画生産の突がわからぬ、従つて経営を多角化し生産販路の安定を期する、共に都市近郊同業農形態から脱皮して中圃地帯的な綜合経営による経済の安定を図る、更に更下の経済情勢は愈々そのいよせを農産物面に及ぼして、経営収入を蒙計をまかない、更に農業経営近代化への新道具、運搬車その他一切の設備をみだりにゆくり大きな困難を伴いつつある、ここに於てより、能率的に合理的に農家建設を推進するには、共同による共同の力で進むのがよいと思ふわけである。

※ 共同経営参加者の問題

- ◇ 共同で進むとする家族構成は出来るだけ同一基準にあてはまること。
- ◇ 技術的熟練度が出るだけ異方面になるよう構成すること。
- ◇ 少くとも5-6ヶ年計画以上の協同意識に生きるものであること。
- ◇ 機械操作に熟達したものが含まれていること。
- ◇ 適正規模としてスムーズ家族単位が無理かひくてもよいこと
- ◇ 特に主婦の共同経営への意見を十分に尊重すること。

※ 労力関係予定数

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{自家労力} 1.5人 \times 3 = 4.5人 \\ \text{常時雇用労力} \end{array} \right\} \text{毎1.5人} \text{家族別の場合}$$

※ 消費全済の運用法

- ◇ 各家庭生活には出来るだけ自主性をとるために比率にして必要な費用を協議して、毎月月給制として主婦に支給し、消費生活の計画性を強化する。
- ◇ 其の他の臨時私用支出は相互の合議によって貸出しの形とする。

※ 出資資本の問題

- ◇ 共同経営にはいる前に、各人同額だけ手持資金を持ちよること。
- ◇ 共同の責任に於て金融機関よりの融資をつける。
- ◇ 共同の責任に於て商社の資材据置制を活用する。
- ◇ 共同経営者の中でトラック、トラクタの保有があれば申し分ない。
- ◇ その他一切の農具は経営に提供するが、原価消却費は提供者に支払うか、又は合意の上で、これを見ずに貸付けるようにする。

※ 営農にあてる土地関係

- ◇ 借地面積 40ha 独立した土地であること。灌漑水源に不足ないこと。
- ◇ 住居がついている事、又は各人の建設によること。

※ 初年度 生産計画例

マンジネカ (旧国人分産)	20ha	200トン × 10CR#	= 2,000,000 CR#
甘 藷	2ha	1000箇 × 400	= 400,000 CR#
アイジョン (林作) トオ路車	2ha	60箇 × 5,000	= 300,000
ニンニク	0.1ha	1,000kg × 200	= 200,000
玉ネギ (早熟トオ路)	1ha	25,000kg × 20	= 500,000
ト	オ1期作	20,000本	2,000箱 × 800 = 1,600,000
	オ2期作	10,000本	1,000箱 × 800 = 800,000
	オ3期作	20,000本	2,000箱 × 800 = 1,600,000
ヒ	オ1期作	20,000本	150,000箇 × 4 = 600,000
	オ2期作	春作更替の地	100,000箇 × 4 = 400,000
春作 (節取種)	5,000本	40,000箇 × 6 = 240,000	
秋作 (地遠種)	5,000本	50,000箇 × 6 = 300,000	
チンヤ	50,000本	50,000箇 × 6 = 300,000	
イタリア南瓜	5,000本	20,000本 × 8 = 160,000	





もまじならぬことになっている。更に具体的に叙述すれば大抵農業は自然の土地と対象としての生産事業であり、それだけに自然的諸条件の影響により豊凶の差がはげしく、初め工業の如く低下資本に対する予期した利潤(確實に手に入る)は容易なことではないのである。特に上記のように経営規模が大きくなればなる程、どうしても自然的条件の影響をうけやすいことは免れないので、ひとり邦人のトマト作のみならず、当州農業の本命の一つである稲作に於てすら、この種の苦しい例が多いのである。更にこれに生産物価格の暴落などの要素が加われれば当然その間は資本の回収ギリギリの結果ヤコクツをというのつひをならぬ破目に陥り、その後の苦境をなまじく予想以上に考慮するわけである。資本のなくなった苦境をかちあがるための苦難を考えてみればよい。今後の苦境はなまじくも自己資金の活用オーが安全であるがどうしても他からの融通資本を導入することによりより前進した経営を考へる場合は苦境の途中に於て、すでに9分通りの時期的収入の見通しがつかれた時を基準として導入すべきであろう。即ち例えばトマト作の場合であれば収穫前1ヶ月位に出荷予定数を見込んで空拍り用意をするために銀行からの融資を考へればよいし、或は高かき噴ム機から動か噴ム機に移行するための借入れを生育や期延自垂して、その頃になって実行することなどは極めて得策となる場合が多い。金融機関は金を貸すことによって事業をしているので、信頼度の高いものには貸さぬとは云わぬし、むしろ借ることを歓迎することを知らねばならない。融資の期限を厳守することはなまじくしないこと。借入れは借る程信用がつくと云うのであるから全くの体ない話である。又これに関連して是非今日からでも実行に移すべきは預金口座の利用である。たとひ一日の預金であっても最寄りの銀行でよから利用することである。これは紛失や盗難防止のために必要であるが、大きく発展的な資本に生れ代りせるためには前もって基礎作りをしておくのである。中には銀行に預けても利息が少いので、また便利がよいというので、タンス預金を平気でやっている人が多いが、これは近代人のすることではない。即ち農業上の現金収入の扱さは預金通帳にそのまありわされるようにしてあげれば、その事業進行の実績は語りずとも銀行当局には、わかるとらえるので信用度の昂場に非常な級並つて、不時の出費の必要が生じた場合は、そのとらになって気軽に相談に乗ってもらえるのである。ここでは不時出費に対して保険的(融通がきく意味で)役割を果すので、営業に可成りの精神的安定感を得られるであろう。しかしながら、繰り返すように不安定の生産物価格に終り勝ちな昨今の蔬菜市場下では無茶は慎むべきであつて、たとひは全資本を借入れてまかなうなど云うような非常論的なことは絶対に許されぬ事である。融通資本はそれをうける農業の主体性に基づいて運用しなやまらなければ、経営発展のために大きな力になることを疑わぬのである。企業化推進にとって当然伴う問題であるからである。

(9) 営業のための土地選定上の問題点、特に分益形態から借地農へ移行する場合に陥り勝ちな点の一つとしてこの問題で矢張り例は枚挙に遑かないのである。これまで営業利潤が少くは、かなりの額を借入資本や土地、家屋等について償として利息を支払つて来ているので、借地農にはいづ自己資金で運出利の全額を自分のものに還つて来ることに對し、出来るだけ支出を抑えるよう努むるのは自然である。この場合多くの農業者が充分には豊かでない資本で新たに借地農経営に移行するのであるから先ずオーに問題になるのは営業の基礎になる土地の問題である。而して、それまでの分益形態についての不利な点のみが頭に残つて出来るだけ安い土地を求めようとするのは人間の宿命でもあるようである。こんな時、借地料が支出としては極めて惜しい費用となり自作地をもつて営業している者の優位性などに感服されて、このような傾向に陥つた例は案外多いのである。云々までもなく、種々の営業に必要な諸立地条件を充分にみだして尚、その借地料が(或は地代)が安いのはよいが、そのようになり出しものが何処にでもあるような伯國は、すでに昔の時代へ去つてあり、現状では一つの要素に申し分なければ一方の要素に大きな欠点があつたしてなかなか恰好の土地に恵まれないのが実情であらう。特にすでに開拓を終了し、しかも相当に利用(搾取)されていた土地の安い類市近郊に於ては尚更のことである。そこで農業経営のための土地を求め場合少くとも営業計画の成果について、決して安物買いの銭失いにならぬ様に土地の生産力や一畝に選定をすすめなければならぬ。特に南大沼川では冬季は雨期で夏季の高温乾燥は想像以上にきびしく、時によつて生産皆無になる場合も思われるのであつて、灌漑水源の問題は決して軽率に処理してはならない。尚ホ!トアレ!し市蔬菜市場は夏の高温期は市況はなお、活発な需要が認められているのであつて、少くとも水不足などで、此の時期の生産を抑制されるようなことでは営業の意義は認められないので、営業決定即水と云つても過言ではない当州である。更に現状のように消費生活費の暴騰による生活難を想う時、僅か1年へ2年

で得なければならぬことでは、たゞ其の同業者がうまくいつてと実に大きな無駄を教てなければならず、長期の安定は期すべくなく、少くとも3-5年は続けられる様に吟味して借地料は土地の利用度、生産力、水源揃つておれば、或る程度の高額はやむを得ない。又今後土地購入も漸次進捗すると思われるが、これは借地以上の入念さがあることは云うまでもない。日本から土地購入資金を携行するものは、やはり自分の判断を中心に購入すべきで、従つて少くとも3-5年はそのための研修をすべきであるとする。一代の不作にならぬように徹底的に調査しなければならぬからである。

資料 4 作物複合経営の一例 (1962年春作)

A. 販売実績表 (金額はCR#)

作 月 日	ヒ ー マ ン			胡 瓜			17リブ 南 瓜			合 計 金 額
	出荷数	金 額	平均	出荷数	金 額	単価	出荷数	金 額	単価	
9.28				86	14.30	16.6	61	980	16.0	2,410
10.8	592	1,816	3.0	593	12,440	20.9	1335	20,105	15.0	34,361
10.12	355	1,450	4.1	770	11,660	15.2	1044	17,705	17.0	30,815
10.17	441	1,810	4.1	715	9,960	13.9	977	14,450	14.8	26,220
10.19				780	10,325	13.2	526	7,500	14.2	17,825
10.22				743	9,140	12.3	460	7,360	16.0	16,500
10.24	1001	4,935	4.9	1192	15,220	12.7	772	8,745	11.3	28,700
10.26				978	9,275	9.5	518	4,280	8.3	13,555
10.29	840	4,300	6.7	1437	10,910	7.1	421	3,387	8.0	18,597
10.31	630	2,980	4.7	1540	12,290	7.9	372	1,695	4.5	16,965
11.5	950	5,550	5.8	1980	13,260	6.7	342	1,510	4.4	20,320
11.7	710	4,500	6.3	2000	11,660	5.8	408	1,535	3.8	17,695
11.9	1080	6,990	6.5	1630	8,150	5.0	315	1,020	3.2	16,160
11.12	5900	21,555	5.6	1460	3,270	2.2	330	920	2.8	25,745
11.14	1760	15,480	8.8	1340	2,565	2.0	250	880	3.5	18,925
11.16	6570	34,665	5.2	1738	4,590	2.7				39,255
11.19	5724	46,850	8.2	2690	5,425	2.0	210	380	1.8	52,655
11.21	5740	44,300	7.7							44,300
11.23	14270	76,670	5.3							76,670
11.26	8025	56,036	7.0							56,036
11.28	1450	11,510	7.2							11,510
11.30	8610	61,730	7.2							61,730
12.3	4550	17,700	3.9							17,700
12.4	5015	24,000	4.8							24,000
12.7	8000	36,500	4.6							36,500
12.14	5685	21,720	3.8							21,720
12.18	5500	21,500	3.9							21,500
12.17	8476	30,100	3.5							30,100
12.21	7685	22,500	2.9							22,500
12.26	6690	18,000	2.7							18,000
1.2	3345	6,000	1.8							6,000
合計	117344	600,947	5.12	21872	151,570	6.99	8341	92,452	11.00	844,969
%		71.1			17.9			11.0		100

品種(ヒマン・カリフォルニア・ワシントン 胡瓜、日向二号、高瓜、羊白)  
 注) 連日作物と木数 ヒマン(1800本) 胡瓜(2800本) イカリ胡瓜(3500本) 茄子(2000本)  
 生育期(8月5日~9月20日) 稼働力(2.0人) 借地と営  
 営子は品種不同につき販売に当たり途中で栽培管理を打切る

ト 生産費支出実績表

品名	数量	単価	合計	%	備考
人件費	143	500	71,500	25.9	養用人の給出
肥料費	130	400	52,000	22.6	
資材費	117	384	44,928	20.1	育苗資材その他
販売手数料	47	597	28,071	12.2	組合販売手数料 0%
肥料費	20	200	4,000	1.8	ガソリン 油 噴
運送費	20	100	2,000	0.9	葉面清拭等に用
農具費	17	500	8,500	3.2	
水電料	6	800	4,800	2.3	
雑費	1	100	100	0.0	組合販売税
合計			283,600	100	

(註) 人件費は11月1日~12月31日 全額1000 10月1日~10月31日 1000 10月1日~10月31日 1000 10月1日~10月31日 1000  
 2. 借地料は10月1日~12月31日 1000 10月1日~10月31日 1000 10月1日~10月31日 1000 10月1日~10月31日 1000

C 収支対照結果表

売上高	944,927	
生産費支出高	532,681	
売上高	291,285	
稼働力(10月)生産性	20,206	2627.8 = 11.1%

★ 別項 稼働形態の得失について

片側の移住用所によって当面大河州への直接移住はその門戸が開かれたわけであるが、それによって移住の  
 意のある移住者の形となり、相手が分給契約を結ぶことになった。これは移住者にとりては移住行政上 到  
 達したもので移住史上特筆するべきことであらう。特に既述の通り、当時の移住者の多くが期間の長短はともかくとして  
 この形式的形質を軽んじて、建屋におもむく農家がこの形質で移住を遂行しているわけである。そこで別項の形質  
 の得失を再検討しようと思われる。これは最も重要な問題である。移住者による移住の形質は、移住者の  
 意のある移住者の位置を適確に把握する一助となるものである。移住者の意のある移住者の位置を適確に把握する一助となるものである。移住者の意のある移住者の位置を適確に把握する一助となるものである。

(A) 分給契約の意義とその得失について  
 分給契約の意義として二つのことがあげられる。即ち第一は無資本の者がその労力と技術を没失し特定の資本家の分給資本と地を活動して共同事業を行い、それによって得られる利益を一方は提供した労力と技術の代償として一方は資本と地の代償として労力の定められた分率によって分給を得ることであるから無資本の移住者にとりてみれば、これは極めて合理的で、自身の利益が最も高くなるのである。第二は特に当該地方の農業事情や土地事情に於いて移住してない場合、移住の困難、移住の目的として移住を目的としている場合があり、移住と経済的利得を同時に得られるというものである。従って移住形態は資本のあるものといくのを両方ともその目的によれば、この方と移住するべきである。この方と移住するべきである。この方と移住するべきである。

これは、すなわちその目的の達成のためであつて、当然以上の設備の備へや自働機へ移行してゆくものである。又その場合は十分に準備、技術については研鑽の果もあつて、自力でやつてゆける自信があつた時には、その目的の大部分は達成したのであるから、これと前者同様の方向を辿ることになるのである。戦前近年の農業は他の備作や大正作の他設備に大からな資本の力がかかるもの比べれば、比較にむづかしい程のものであつたため、邦人移民者で、この種の農業形態をいふまでも続けるものは少く、一つの過渡として、その意義は認められて、こののが実情である。このように農業者の資力如何によつて十分に備へた準備を具備している状況形態である。特に現下の農業経営が資本先行の傾向を辿り、より大きな資本がそのをさう時世であつてみれば、この中で極めて大きな業績をあげ得る者も少くないのであつて、これがその動向として生かされるかどうかは実にかつて共同経営者双方の人の如何によるのである。

第一章に於て述べた通り、折簡、近年農家の全盛時代にあつては、大抵に不足し、野菜市場の要求も満たさなかつたため、その生産は若干の精技が必要となり、邦人の数的増加はかなりのスピードで進んだ。それによつて予想以上に利益の取得も高量であつたわけであつて、その実態が更に転主をかこむ、自願資本家の分益農家導入款を求めたし、一方、邦人移民者との競争に勝つて、これと入植したものである。このうち特に注目しなければならぬことは、現在の当州邦人の甲に、他の諸州から移住して来たものか、かなりの数を占めてゐる。それだけに、当州の分益農家を営む邦人移民者について、その実態に懸念があるものであつたことは、如実に物語る。即ち、この2年8月現在の当州邦人農業経営は、5%の業績であるが、他州からの移住者は約100家族を全体の約20%を占めてゐるのである。ところが、1926年度の物価高騰による生産費の上昇及び既述の通りの蔬菜市場不況による生産物の価格の減少、又は暴落に起因しての利益の減少は、この分益農家形態でもかなり打撃を蒙つた。これは新開地からすれば、感々増大する生産資本に対する回収率の低下が自立して来た場合によつて、その回収にさえ不安を感ずるような苦境に達したものである。一方、分益農家側からすれば、甚大なる資本と技術に対する代償が一家の生計を支えるにも事欠くという結果が生じたために、これ迄の利益を死した分益農家形態が双方の不利益に自然に解消しようとする荒筋にあり、僅か数年足らずで野干の時世は来るのかと今更のよに認識を新たたせざるを得ない。実際に於て、邦人の多くが分益農家を退却してゐるが、今や大部分のものがその意義をよく理解してゐない。これはたゞして、時代のもたらした不運といふその意義については、今は今でも語られていない。こゝで認めなければならぬ。

それは契約自体の全般的な利点としてほゞもう取りおけるべきではなく、現在に於ても十分な利益をあげてゐる分益者も数多いのである。これまでの及者としてあつたこと、最大収益は前に述べたように、やはり、邦人の資力が、農業経営の特殊性についての理解、及びその者々の意欲は、勤勉、勤め、誠意、人脈、結成のよき経営への合理性などの要素によつて、その結果は左右されたのである。一般経済が低迷し、平く金融、分益農家契約の度々をたすマツを最も程度にいくとめるために、分益者と移民者双方は、何れもともに分益農家形態への移行を全時的援助で、同様に推進する方針を打ち出し、1926年度に於て大抵の農業経営を調整を実施し、その範囲は55家族、約200,000,000円に達してあげたのである。

(2) 借地経営の意義、其の得失について

概ね前項の過程を全く自主的に移行した借地経営に於いては、経営者の自立心こそが、すなわち、同業経営の推進の力となるのである。その活動は精神的な解放により、極めて探々と進められてゆくとである。この実は自作農か最終段階では、借地農も、独立自営といつて、一ツの誇りにたつ。それだけに、別の面では、決して「さあ、これからは本當の實力が試されるころ」として、経営のルールを叩きつけて、当然承認される連年の基礎件と、斗いながら自力開拓の意気は極めて健闘と共に、頼もしい邦人移民者の意と云へよう。経済活動ということになると、精神一倒たつて、早くて解決に求め、場合が多少あり、うまくゆかない、例として、少くはないのは、やゝもすれば、余りにも懸うけをきたり、よくばり過ぎるゆゑ、逆に規律や技術的能力以上のものを教へないで、けうとするからであること、否定は出来ないであらう。

功もあせり、余り経営が飛躍してきて、その自費を達成出来ぬ例は、かなり多く見られるものであつて、現状としては、借地農は分益農を経る過程に於いては、その農業生産収入は、必ずしも分益農より上位を確保しているとは限らないのである。これは市場混乱などの時期的不運にかこわれ、それとあるにはあつたが、借地農への移行前の分益農の時、たゞ、利益を懸うけようとするのではなく、資金面、操作上の苦勞、或は出前



時の種々の苦労又、一般社会生活上の煩雑などが一度にふよみかぶさって来るので、そのために予期以上の  
 気苦労が多く、学業及び技術上の諸問題が既定の計画案に従って円滑に進行している時は別に問題は何か  
 最近のように全済交際の急ピッチや不慮の事態(病氣その他)が俄かに発生した時など、この時に始めて其の感  
 味の移住者としての苦労をなみなければならないのである。発展のための過程としてである。

しかしながら新しい移住者が自立する場合に必要なのは土地であるけれども、それにもまして必要なのは農業を  
 積極的に近代化して行き常に日進月歩の農業技術を充分に消化してゆくだけの力を涵養してゆくことであることを  
 強調したいのである。

### (c) 雇用就労契約の意義とその得失について

農村に於ける最低賃銀法は、すでに施行の段階にまで進められている現状の農村に於て労働を現金化する  
 ことによって生計を営もうとする所謂給料制の雇用契約は双方にとって種々の問題をなげかけている。而して  
 現在では最低賃銀法を適用した農業労働契約は一部の特殊な場合を除いては見られていないか。その最大  
 の原因は何と云っても最終生産物の割取、価格不決定にあり、雇用労力の生産性が経済的に把握出来ぬま  
 にあることは疑う余地がない。この様な具合であるから現政府が強かに推進しようとする農村の最低賃  
 銀法の施行は、側面的に農産物価格安定のための強かな施策を打ち出さないと、農業企業化に対して大き  
 な障碍となり、企業生産の低下は免れぬことは明瞭である。それはとゞ肩として、多くの場合、近郊農  
 家が雇われ者や日本から移住者を雇用の形で導入する時は、その労力の生産性について多岐多岐の  
 如何によつて契約するものが現状であるが、これは労力の売買が基本である限り、これは現状としては止ま  
 らない。しかし、雇用農業就労を暫定的な進み方として認める場合は、賃銀を得ることと同様に、他の要  
 素に於て農業技術や知識を習得することの面に多大の収穫があれば、それは発展的段階として極めて有意義  
 なものとなり得るのである。現在の最低賃銀に甘んずるには、他面にこれを償う様なものが得られれば決して下  
 積みになっているだけでは無いことを理解しなければならぬ。これを得られぬものは、その意義はとゞにも  
 発見し得ないであろう。ここで特に問題になるのは邦人との雇用契約であるが、雇用しようとするものは決  
 して採取する様な結果にならぬ様最大限の優遇をすべきは言うまでもないが、特に将来の発展自立のため  
 の経済的又、技術的な修練については、親身になってこれを援助指導してやらなければならぬ。最近の様に  
 未熟な学業知識や技術では到底雇農が成り立ちようがない近郊農業事情を考へる時、入伯早々の移住者は  
 特にこの型の就労法がよい場合がしばしば見られるようになってきている。それはとゞとなふと、数年前に比較的  
 学業のやりやすかつた時代に於ては、仕對に対する熱心さと耕主に対する紳士的態度がある限り、双方に  
 紛争を惹起する様なことは極めて少なかかつた農形態も、利益が生れればとゞから頼り込んで通し  
 てその努力は経済的不満を感ぜられなくなりぬれば経済は発達してはるのである。その様な状況の中、  
 不安定さには比べればなほ、さうである。そこで日本からの新移住者がこれまてのようにならぬ様形に  
 現下の事情では契約する耕主と殆んど妥協を消しつつあるか又は、其の内容が邦人にとつて今更にならぬ  
 (経済収支の上で) 当分の賃入を中止することとしたわけである。しかし他国の農業事情や立地条件、  
 風俗習慣の特殊性を充分消化する迄にはかなりの期間が必要であり、その間に充分の実力を涵養するに経済性  
 が伴わないとするならば折角の分益という表面的には有利の先入感も其の意味をなさず、その結果は情いを  
 後世に残すという皮肉なものになってしまう例が非常に多いことを指摘しなければならぬ。要するに  
 かつていい時代は過ぎて、若く早々の台所に直結する経済争が始められねばならなくなつて来ているわけ  
 である。この意味で邦人の新しい移住者の一つの行き方として、一年位は雇用でじっくり研修することは、  
 その費用の如何によっては大きく飛躍するための有意義な時期かよくれるであろう。

又、耕主が雇われ者を導入する場合は、一般の商工業の雇用者の賃銀に比べればたいがひ低い現状の待遇  
 を商工業などに引きあはせようとする努力は今後の農業近代化の機に於て企業としての農業を消確のた  
 めに必要なことであつて、そのためには国家の農村政策に強力且つ到期的な力が打たれりとは、極めて大きな  
 困難と伴ふことは明白なことであるが、要はより高い賃銀を支払つてしなつたような農業企業を其別に考へ、  
 それに向つて努力することか何より大切な事であろう。国家の近代化は必然的に農村の労働者を減少せしめる  
 ののであり、それに対処するためには、やはり雇用労働賃銀をこれ並りおに出し給ふのでは、いつまで企業  
 化は推進され得ないと思ふなければならぬ。低所得農業から高所得農業へとその改革は農村の体質

についてのそまれているわけであろう。

(D) 自作農経営の意義とそれへの努力矣。

こん日ほど 官農の長期計画の確立が望まれる時はないことは、誰もが自分の土地を持ちたがっているのでよく理解出来る。そして現在の邦人移住者は幸いにして 海伯時の半ば過ぎのような法外な理想を遂うことをやめ、相応のガツリした経済的基礎を一日も早く築くべく日夜努力しつつあることは、極めてよろこばしい所である。この事は夢をくじかれた形であつて、一見極めて悲壮にうけとれぬこともないが、昔の(日本移民史争かぶり頃)の伯國ならいさ知らず、南米を誇る当国にそんなに濡れ手に粟のところがあつた筈はないのであつて、時代に即した移住者本来の使命に帰着することは決して後進ではない。現在の移住者に課せられた農業経営を通しての使命は、これ迄の不安定な農業経営、栽培技術等の改善推進を通して各移住者の生活の安定をはかると共に受入國(伯國)の農業開発に資するにあることを思う時、これは当然の移住者の姿なのである。

伯國の農村事情はすでに従来の採奪的農法を許さぬ程になつておろ、このことは近郊に於てよし、むしろ主要作物生産地帯に於て特に大きな問題をひきかしているのであつて、移住者が 過去数年迄在日中に信じていた豊沃な伯國の農土という観念は今や根柢から是正されなければならぬ状態になつてゐるのである。

何はともあれ伯國農業事情は生産的に経営経済的に現状で維持するのに大きな困難を余儀なくされてゐることは事実であつて、邦人の農業経営の今後の方針として安定経営の確立をモットーにする以上、地力の維持増進は極めて重要なことは当然であらう。そのためには、どうして自己資産としての兼地を入手することが先決問題であらう。特に近郊農業はその生産性の向上が科学性にたつた農業技術と改良による土地の生産力の増進によつて愈々集約化される時代が来つたのであるであつて一農家当りの必要耕地を入手することは、そんなに遠い夢みだ事ではないし、このことを常に念頭に置いて農業を進めてゆきたいのである。

伯國農業の中で近郊に於て土地、すなはち耕耘機の三者はその基本にたるものであるが、最も生産的なものから重層的に投資すべきであつて多くの場合(イ)土地、(ロ)トラクター、(ハ)トラックの順が妥当であらう。

資料 形態別邦人農家数 (1962年12月海防建設部調査)

種別	自営	借地	分益	雇傭	農業以外	計
家族	新移住 11	121	215	0	83	450
	旧移住 16					
単身	1	24	55	86	64	230
計	28	145	270	86	147	680

第五項 協同組織の推進とその問題点について

経済社会の近代化は政治経済中心としての都市を林立させることは論をまたないが、その故に愈々農業が増加する消費人口の急増を招きかねない。そして消費地と生産地は流通機構によつて結ばれているのであるが、その主要な症候をなすのは仲買業者とその仲買機構(網)である。需要量から言えば「小池から小川となり、大川に流れ、遂には大海に注がれる依り小都市から中都市へそして大都市へ」の間にオス、オメの仲買業者を林立させるのである。而して生産者の手放す仲買価格は場合によつては比へるに及ばぬ位、数倍にもなつて最終的には取引をされるの次第である。更に生産者が比較的豊洲に行われ、消費量を上回る程に達する所になると農産物の進行とは逆に最終的取引価格が勝手に決められ、それから中都市へ、そして生産地へと進行して来ることは農産物価格の特殊な点である。即ち、その生産費などというものは全く問題にされない事があり需給バランスの冷感とそれのまゝに生産者を泣かせるのである。今年度のトウモロコシ、大豆のやうな例であり、1962年夏のトマト相場と其の典型的な例であつた。この例になれば所謂生産者からのクダを買つて過去の経済社会機構(今日ではなお生きてゐる)の下で農村人のひたひた苦汁をなめたところである。又、別方面では或る特定の生産地から農産物のダブツキが出来たとすれば全部魁に傾ぬかすために、その輸送販売等の仲介をして呉れる業者を自ら求めることと種々の生産者の立場、或は性格からしても一止むを得ないことが多いがこれに対して、そのうきめを最少限度にこらへる方策が今





















な場所は、肥料の効果があらわなうたいで、固執を多くする前に、苗の硬化を極力防止しなければならぬ。

この意味からすれば、穂々の銅剤のうち特に石灰を含むものは、液肥で全体を覆って硬化せしめる事があるので、ジネリ、マネウ剤が幼苗期には好適である。或る程度生育が進んだら銅剤で進み、愈々天王山という時には他の直接殺菌剤（水銀剤等）と共に駆除を併せるとだけの余裕をもって進まなければいけない。

病害菌、害虫共に薬剤に対する抵抗力を培養しつめることを考えておきたいものである。尚作物の硬化を防ぐために三季赤含有葉面散布剤（92料）（商標名「ムネーグランド」）や尿酸系薬剤に施用することは極めて有効な措置である。

尚、当園の様に病虫害発生感減用がないところでは、生産者自身がこれを兼習しなければならぬので、場合によって手ぶくれがあたしうるので、地産による協同予備機構は考えられなければならない。而て、当園協運支部でこの採苗面の研究をすぐ官営者に連絡する機を造りたい考えである。しかしそれ以外の生産者でも、草害を避けておれば、時期のなうり変りや諸気象条件の変化、肥料の性質、害虫の発生順序、過程などから見て、よその予察は出来るものである。これに従って、予防対策を講ずる様に心がけてゆきたいのである。

才造は、日進月歩の新技術をも消化することである。最近、新しい農具技術が次から次へと紹介されているが、これらの新技術はすべて段階をへて使みあげになるものであるから、決して無理しすぎたものに取替われない。注意しなければならぬ。要はこれらを次から次へと身入れるための経済的、技術的態勢の整備こそ、これからの日進月歩の新技術導入に於て必要な事であろう。

今後、国内蔬菜市場の競争は愈々激化することが予想されるのである。せまくは、各生産者間でも、いわゆる諸原期をわらって、しりぞけずる採苗状況がすでに始まっているとき、競争が激しいだけに判識しにくいので、技術的な前進は期せられるであろう。然しながら、余程の覚悟と自主性を持ち続けて、ベースを維持してゆかないと、あとで後悔することかよこり勝ちである。例えは、不時栽培型の生産などは、生産技術について、それだけ、しっかりしたものを確立していないと、ただ市場の急変などにまよわされて、一人一人がもっている実力以上の負担となり、落伍してしまう例が多いのである。今後は隣りの人が、6/1日に種子を下すから、自分もそれに機械的に合わせるというのでなしに、自己の欠点、優長をしっかりと把握して、最大限に自己の技術を生かす態度でのみみたいのである。

この事は、生産者の主体性をしっかりと保持する農業経営者の習慣と夫に非常に大切なことである。

## 第五章 南大河州農業の将来性についての考察

### 第一項 禾穀製作農業の再検討とその問題点について

南大河州農業は広大な土地を保有する伯國の農業を代表するものの一つであつて、禾穀製作はその本命と云つても過言ではない。この事はサンパウロ州、パラナ州等に於けるコーヒー(Café)糖(Algodão)、バナナ(Banana)等の國際的にも名をなす産物に對して当州では牧畜經營から牛羊と云う大きな特産物をもつてゐるが、これらに對するに伯國がこれまで農業立國として迄の思ひ出た肥沃な土地條件と氣候と共に仰びて来たことは疑う餘地のないところである。而して當國の人的構成が各國民族の混血市場の如き感をいだかせるのも、かつて必思の先進各國が之を墾拓の未開地を有する移住者受入國として、ひとと人農業開拓移住者を送りこんだため、その將來性について有望視したからに非ざらぬであらう。こうした線に入つた開拓者の多くは伯國の広大な原始林を相手にしてとび込み、これを農業化する形式をとつたものである。

当南大河州に於てはドイツ、ポーランド、ロシア、イタリアを中心にして入植してゐるが、この場合はやはり集團的移住政策がとられ今日のポイロ系、イタリア人系、ポーランド人系等と概ね區別がつけられる。然し德民地の前身となつたもので、この内ドイツ人移住の歴史は1824年であつてすでに74の年に及んでゐる。これ等の移住者の植民地帯の農業は主としてトウモロコシ、マンジヨカ、フエイジヨン等の極めて平凡な作物體で進められたものであるが、海運事情の近代化と共に米作、油糧作物、小麦作などが導入され、最も單調なトウモロコシ、マンジヨカ等の經濟価値を高めることによる収入の安定策として麥、豆、豌豆、高粱等も導入附加されて、専ら經營農から綜合農業へと經濟化がとり入れられて今日に至つてゐる。これ以前に大型の植民地

レイ便役を中心として農場は整備され、養畜等が盛に行われる様になっている。

当州に於て奥地とよばれる未蒞穀作地帯の文化的開拓産が他の諸州では到底みられない先進度を示しているのは、何れ云つても最も合理主義を追求する独逸人系移住者のイニシアチブによることは、容易に理解出来るところであり、各種産物に於て当州有数の生産量をマークしているわけである。これらの既成の植民地として発展して来た所謂純農村に於て現在特に問題になつてゐる諸点を考察してみることは、邦人の発展舞台が限られた都市近郊に傾きすぎたためにも現状打開策を見出す場合極めて意義深いことであると思ふ。

当州に於て名実共に日本民族の眞価が認められるには、近郊農業の発展もさることながら、やはり本命と云われる未蒞穀作農業にも発展しなければならぬ事は明白である、これが目標が達成された暁にこそ邦人も社会的にも経済的にも優秀な移住者としての使命を究う出来るものと思ふ。今後伯國の農村事情に理解を深めるにつれ、この様な形態の管農に進む邦人がふえて来ると思われるので、更に要約して検討してみよう。

① 前にも一部ふれた様に当州の未蒞穀作地帯の農業形態は従来<sup>の</sup>自給農業から大きく脱却して油脂作物、小麦作、養畜等の導入によつて企業化されつゝあり、その農業構造も漸次近代化に伴つて改善されつゝあるが、従来<sup>の</sup>無施肥栽培による掠奪農業から、今だ大部分は脱皮しておらず、一部の大耕主に於て若干の施肥栽培が行われている程度である。従つてもとホト豊饒を誇つた土地も連続の掠奪農法によつてその生産力は可成り減退して来ている。統計資料にあつて来ている1948~1950の年頃の生産量が案外多いのに、その後大して生産量が伸びていないのは、商工業発達に伴う農村人口の漸減もその要因であろうが、土地そのものの生産力の減退に起因する伸びなやみは、指摘出来るところである。として今後ともこうした掠奪式農業が続けられようとし

ている事や、肥料科学にめぐる者では、将来の管農についての目標や自信がもたれず農業を放棄して他に転居する者や新しい森林地帯や牧地（パラナ、サンタカタリーナ、マツタクロツソ等の諸州に散在する）を求めて移動するのが最近目立つて来ている。このうち植民地の発展に伴つて農産物の集散地に新興都市が發達するので國歌道代仏の波にのつて（商工業拡充など）その方面への事業主として或は労働者として進出又は吸収される分については時代即応もあり納得出来るが、既存の土地家屋を処分して、かつての父祖の時代に経た新移住者としての再出発をする凡漸は、邦人には全く理解に苦しむ事の様に思われる。

これは彼等のこれまでの管農が作り出す農業でなく、生れ出るのを待つ消極的始農法に如何に依存して来たかを如実に物語っているのである。若し彼等が入植した当時にあつた農業科学の水準の比較的高かつた邦人がその中におつて小規模ながら地主としての農業を営んでいたとしたら、現在のこうした農業事情は可成り違つたものになつていたにちがいないと思われ、日本人移住更初期に於ける移住政策に極めて遺憾なものも禁じ得ないところである。要はこうした地帯に指導者がたりなかつた事や国策としての農業用途や技術振興について、指導機関の策が伴わなかつたための結果である事は否定し得ない。

② 経済事情に於て激烈な悪性インフレーションの昇進による、都市と農村の單位労働生産性の格差は愈々その度をひろげ、農村人の都会へのあふがれのもれになつており、又知識水準でより上位にたち、より進歩的な農法を導入して今日迄農業者の中堅をなして来たものは、それだけに経済的にも優位になり、この様な進歩的人材が農産物の集散業、加工業或は補修業その他農村商工業者として方向を転換したために現実の農村では科学性のある人材については概して骨ぬきの形になつてゐることは否めない。

州内各地に散在する農村都市の商工業者の多くは、所属植民地々帯に広大な耕地を保有しているが、彼等は其の土地から出て

たものであつて、多くのこうした知識人が農業を放棄した形であつて、伯國の中小農業が伸びてゆかない最大の原因をなしていると思われる。この事は万国共通する問題であるが、國策によつてある程度この様な風潮や趨勢をカバーとなければ農業土國の國際的發展は期し得られないのであつて農業の本質についての再検討が必要である。

③ 土地の生産力の減退は慣行農法の必然的結果であつて、これは広大な伯國の森林原野の肥沃條件が恵まれてはいても百年かの後には、その衰弱は当然である。これ迄記述して来た種々の恵まれた要素が更には將來に大きな禍根を残す結果になつてゐる事を慮り、時入植した移住者は地方の維持増進を真摯に考へてゆかなければならぬし、自家百年の經濟大計を押し進めることに積極的指導協力の柱にあたる当海協運としては、特にその面の指導を強めしつゆく方針である。

④ 多くの植民地はこの当時の織物力などによつて25%程度のロツテ(コロニヤ)を基礎にして7~8コロニヤ単位の所有地で構成されている様であるが、前にも再三のべる様に現實の土地生産力は決して満足すべきところには止つていない。又農業技術の停滞は労働の生産性をも併は鈍づけにした様恰好である。それが農業を放棄したり、更に深い森林地帯の開拓者としての再出發に多くのものを送りやつてゐる。この事はよく考へてみると50年或は100年かゝつて大森林を農耕地化し漸くにして20%程度で環境風土牧畜的の農林生活を築きあげた擧句の果ては、これを1500コントス~2000コントス程度で処分してしまうのに早急である。其の神聖の因太さは邦人には一寸納得出来ないのである。これまでに費された彼族の血と汗の結晶としての農地放棄に比つては發展的分命と云ふのかも知れないが、これは余にも悲壯な事案に云えないだらうか。彼等にとつてみれば、たゞ生産について、その技術的な限界がすでに今日に訪れてゐるのであつてみれば無理もないことではある。然しながら土地の

産力の維持増進策、そしてその労働生産性を高めるための種々の農業技術を受け入れるためには、余りにもその知識水準が低すぎることを認めなければいけません。

そこで邦人がこれらの土地に押しよせようとする場合、天性的に日本民族の地への改移民に比べて到底大力打ち出さない開拓のための肉体的労働を、より合法合理化するものとして、これらの地方程恵まれた天地はないと云う結論に達するものである。即ち彼民族の力で数十年か、つて農耕地化したものに、これから先端科学技術を身に付けた邦人が、このあらしうがつかぬ事になれば、これこそ素晴らしい前途を約束し得るものなのである。何故ならば、やはり農業のための農業をやらず、いや撤去式で、経済的にはもうじいん底に陥つていくとは見えな、認められた後継した農村生活を維持している現実を知っているからである。

最近の都市近郊に於ける農業中心の邦人営農種がその経済的増進の余儀なくされている時、この事を静かに反省しそして新たな邦人の方向の一本として、その意義を見出さざるを得ないものがある。未だ發祥農業が、その森林開拓に於けるものでなく、科学性に立脚した農業技術と共に進展する時代が来ているからである。邦人の活躍がその意欲で大いに期待されるに信ずるからである。

③ 現状でも多くの農地はいまだ無施肥栽培で一家の生計を営む程度の農業収入を得ている。これほどの慣行農法によつて損耗した土壌中の有機物の補給は該地の栽培で容易に回復はしめ得るものである。しかも此の回復をねらふマニョ栽培しようとするルー・(Manoço)、カウレー (Cajão Mirado) 等は可米も養料作物であつて、その分の土地で無施肥で充分生育するものである。その果はまた潜在地方はとう表えていない証據である。又土壌浸蝕も可成りひどく地方減退の原因の一つになつていっているのである。この点には等高線耕作式や簡単な砂防堤の設置で防止出来



るし、深耕の工夫をすれば猶ほ地力が豊富であるから、その改良  
あげは困難ではない。

当該地帯で最も不足している養分は何と云つても有機態燐酸で  
あつて、過燐酸石灰の肥効が作物に非常に大きくあらわれている  
のでもよくわかる。次で石灰の効用も比較的敏感にあらわれるが  
此のためには用で土壌中の有機質の分解を促進して、地力減退を  
助けた例は多く見られる。緑肥等の肥有機物を併用を怠っては  
ならない。往時肥沃な森林伐後によつて農耕地化されている地方  
に生育している庭園樹木、果樹類の伸長速度を観察すれば猶ほ地  
力はいまもなお豊富である事は何よりも強みである。

⑤ 日本人の食生活が米食を中心として味噌、醤油による野菜料  
理になれており、一部鶏肉、豚肉等で豊かな食生活を期待し得る。  
これの大部分は米穀穀作経営中に期せずして得られるもので、農  
家の経済生活上極めて有利である。この事は当分続くであろうと  
ころのインフレーションによる家計費高騰に対抗する策として農  
家経済維持に必須の要素でもある。現在すでに当該地方で営農し  
ている邦人の生活費現金支出は近郊邦人に比べて30~40%の方  
少いことも大いに参考となる点である。今後米作を一部導入して  
ゆけば、更に経済安定向上に強みを加えることになると思われ  
る。

⑥ 柏国の主要食料生産は上述の悪条件から乘観許されぬ程度  
までに追い込まれているのであつて、端的に云つて米の流通関係は  
うまく行つていない。更には外国からの輸入しなければならぬ  
ことをしばしばあるもので、今後国家経済の建て直しには主要食  
糧として米穀穀作振興には、我々の努力が図策として拂われ  
るものと思ふべき。其味でも国家経済政策の要求にもあつ  
た進み方でもあつて刻期的な進出をするのに絶好の時期が到来し  
ていることを指摘しておきたい。

⑦ これらの米穀穀作地帯では最近農村工業が急激に発達しつ  
てあり、中でも植物性油精加工業の振興によつて、当該地帯の大産

豆麻、落花生などの生産は極めて安定しつゝあり、これらが換金作物として栽培も極めて容易であることは経済的に大きな変貌を加えつゝある。又ソバなどの様に直接輸出と運つた経済作物も多いため、海協運で積極的推進をして来た卅西北部は名実共に邦人港展の恰好の地方となることが期待されるのである。

資料 南大河州小麦生産状況(伯國統計局調べより)

	耕作面積 (ha)			生産量 (Ton)			生産額 (1000 円)		
	1958	1959	1960	1958	1959	1960	1958	1959	1960
ブラジル国	1446,334	1188,661	1161,015	558,990	610,584	717,124	4991,732	7449,548	11,721,146
南大河州	1228,783	978,091	941,109	407,308	479,626	532,336	3499,770	5440,023	5826,474

## 第二項 玉葱ニング類の生産への考察

南大河川の沿岸地帯の一つとして特産野菜作物である玉葱がある。これは主として大西洋沿岸沿いの砂質壤土地帯で栽培されているもので生産地としては大西洋岸に半島をなしている部分に依拠するサン・ジョゼ・ド・ボルテ (*São José do Norte*) からモスターダ (*Mostarda*) 一帯で、特に前者の *São José do Norte* 郡の玉葱生産者数は500の家族を数えるといわれる。この外にペロウラス (*Pelotas*) 一帯からジャガロン (*Jaguarão*) 方面及び州内各小中都市近辺に一部栽培されているが、未だ大した生産を行っていない。

これらの経営は各生産者別にみるとその規模では殆んどが *Via* 以下であつて、以下であつて余り大きくはないが、遠僻地であることと気候条件と土地条件が至適に適していることから当該地方の有利な換金経済作物として導入されているものである。而して生産のための諸条件としては極めて恵まれており、当国随一の生産地帯の地位を築いたのであるが、その経済的安定性は、これとは反対に極めて安定であることは第三章に於いてのべたところである。

即ち時期的には或は年によつては生産過剰が明らかであつて、更に冬季気象條件の如何などにより収量及びその価格共に伏して安定していない。だからと云つて折角の特産物を然るにしてしまふのは甚だ愚策であり何とかより安定した方向に導く様な施策がのぞまれるのは又の如き特性をもつてゐるからである。即ち伯国における玉葱の消費量は馬鈴薯と共に大きなもので年向を通じて平均してゐるものでこの二つは蔬菜としての取扱ひから外されて取扱われる位である。此の年向平均してゐる大消費量に対して中部を始めとして当州以外の殆んどは諸州産のものは收購品、優品を多量に生産してはいるが徳々の気象條件で長期の貯蔵力あり、特に最大消費部中のサンパウロ、リオ・デ・ジャネイロの市場では、概ね5月以降は極度の品不足におちいるものである。

従つてこれまでも5月以降次期の産期までの需要は殆んど当州産のものでもまかなわれていると見えていわけ、それだけに特産物としての強みも充分あるわけである。ところがそれだけに作物自体の投機性が加わつて、生産地である当州内においてすう年によつては無様なほどの生産過剰の現象があるのである。この裏が玉ねぎ作りは、ククであるといわれる所以で大当りする例も数多く表われたりするわけである。

この様な作物については生産についての指導機関や生産者自体の組織の強化が何よりも肝要な事であつて、出来るだけ科学的資料に基いての計画生産をやらなければ毎年浮沈みを繰り返してゆかねばならぬものである。而して当州有数の移出農産物でありその経済性が州にとつて充分認められている限り、やはりコーヒー、糖、馬鈴薯などについて聖州、パラナなどで旅行されて、最低価格保証をすべきであり、水稲、小麦、大豆などと共に当州でも積極的な農業振興策として善処しなければならない時期が来ているものと云つてよい。生産者と仲買業者の關係は尖に目をあつすべきものがあり、これらもやはり生産者自身の組織の育成強化によつて、もつと特産物としての強みをもたせ得るのではないかと考えられる。

その他玉葱についての特性などすでに検討した(第三章)のでこゝでは省略する。次のニンニク栽培であるが、この作物は通地にも多く生産されているものであつて、その生産には当州は好適地をもつて、いることは間違いない。今年(1962年～1963年)も中央部大消費市場では、メキシコ、スペイン、アルゼンチン産のニンニク(Alho)が大量に輸入されているものであつて、これは品質的に勿論伯国内在種より遙かにすぐれている。

幾つ伯国産の在来種が品質不良であるからといつて、一氣に外国から輸入しなければならぬ理由は何もないのであつて、伯国経済安定に一助をもたらすものとしても、この様な無駄な外貨を流出せしむべきではない。大体伯国でもニンニクの栽培は極

め、容易に栽培出来るものであつて、問題は、生産が組織的に行われなければならない事と在来種にいつまでも頼っているために、外国品の御寇結、ならなければならない事である。やうしてみると当州では玉葱の貯蔵販売で伯国内随一の優位性をもっているのであるからニンニクの栽培も面白いのではないかと云う考えが浮んでくるものである。

特に当州はアルゼンチン国とは隣接しているのであつて、一応アルゼンチン国系の品種の導入によつて、これを組織的に栽培して、まづ初め大消費都市に市場を開拓すれば、或は玉葱ほどまでにはゆかなくとも有剣な特産物としての地位を築けると思われその生産を期待するものである。ニンニクの栽培では種球代が非常に高、つくし、特に種球用ニンニクは極めて高価なものであるから当海協連支部としては特定の邦人営農者にその試作かたがた試売を委託してあり、その結果によつては、邦人の組織的な生産体制確立まで、いかゞ意向で、そのなりゆきを期待しているわけである。

### 第三頁 邦人稲作経営の経済的意義について

当州は水田が稲作では伯国随一の生産州であつて、特に稲作には縁の深い邦人も今後この方面にも発展してゆくことが予想されるが、その意義について次の二点から考察してみようと思う。

① 主要経済作物としての当州の稲作

② 邦人農家経営の一角としての稲作

① 当州が水稲作の特産州として最近の米価安定で急激に活氣よんでいる事は申すまでもない。最近では聖州その他特に邦人移住者の集つているところでは、協同組合購買会で水田米の確保につく活氣に動いているもので、当市に出張所を開設した南伯中央農産組合などの当州組合員の稲作に対する期待は大きい。これは邦人を大量にかゝえ込んでいる日系産組組合員の消費量だけでも莫大なものであり、これを組合員から供給をうけて組合員に配給

する態勢を整えようとしているものである。当州等部に隣接するた南伯産組出張所は直接的目的の一つは、この当州産の水稲米対策でもあったわけである。従つて当州産の水稲米は、これら中央産組の動きも活用して水稲栽培に従事すれば、それぞれ10%の増収が出てくることは明らかでない。

この様な国策や大規模な産組織構築等について、管農も認めるところは、それだけに経済的な保証が半ばなされていると見てよい。その当州稲作の重要性も実はこゝに存在するわけである。現在の水稲は何れ云つても主穀作の一つでもあり、稲作の融資7割突進から見て最も収益が安定したものであるとみてよいものである。今後近郊農業から転向する邦人が多量現われることが期待される。ちなみに当州水稲作の耕作面積は年度別にみると次表の通りである。(開大当州農経院調査資料1962年版による)

項目	1952~1958	1958~1959	1959~1960	1960~1961
栽培面積(ha)	286,434	312,234	337,059	359,150
生産量(t)	85,877	75,402	87,915	92,212
ha当平均収量(kg)	2,811	2,415	2,594	2,575

上表でも前准案出米量が単位面積あたりの収量は概して増加していることが見てよい。そして当州の水稲作は夏季乾燥期であるところから、その年の気象条件によつて大きく左右されており、中でも空地時期である冬期、初春の降雨量はトラクター等の耕鋤作業進捗を左右して、作付面積の増減は云うまでもなく収量にも変動を興えているものである。それだけに当州では稲作に対する経済的保証度が地価又は借地料に大きく作用している。当州の地価が平均して高い要因の一つでもあろう。

② 邦人農家の消費支出のうち米代は可成り大きな位置を占めている。即ち一農家で若し年毎75俵の米を消費している場合の現金支出は現在の米価で90~100コトスである。従つて米は飼料である味噌、醤油の首給態勢を整えることは今日の如き諸農家経済からして極めて重要である。この意味で水稲作の

立地條件に恵まれている農家では、一部自給自足でまゝに消費の一環にヒラ入れることは考えるべきである。又最近、都市人が耕地を転じつゝあるが、若手都市から遠距離になつて、耕作と組み合わせた蔬菜園地は、現下の都市農業事情、一般経済状態からみて、極めて有望な施設と見らる。

#### 第四度 当州果樹園芸の現状と其の問題点

当州の果樹丹芸は自然の立地條件と恵まれておりながら、一部アドウ、柑橘、桃を以て主要生産地帯があるが、それとてして極めて古い産地であるので、他国各地に勃興しつつある園芸の特産に対して今後どの様子を採らねばならないか多くの問題点を残していると見える。従つて本項では今後の果樹園芸振興上是非検討しなればならぬと思つて、筆柄を練りあげて説明を試みたくみたい。

① 当州は他国最南端に位置しているので他国内では最も好適な気候をもつてゐるが、果樹栽培では自然の立地條件に恵まれ、年々豊富な果物が生産されている事は前記の通りである。州内各所に散在する中小都市でもリンゴを除いて殆んどすべての果物が周辺の農村から供給を求ておる。郊外住宅地内でも殆んど各家庭で数本の果樹が庭園樹となつて植はられており、しかもそれら殆んど放任とされているにも拘らず枝もたわみに突つてゐる情景は、当州ならでは味えないものである。この事は特に同出身の邦人にとっては一種の驚きとして印象づけられよう。

一般に云つても州では柑橘類が筆頭でアドウ、桃、梨が絶ており、目ぼしい産地としては近郊果樹園芸地帯としては *Vila Nova*, *Belém Velho*, *Belém Novo*、一帯に落葉果樹中心に、又中間地帯として *Monte Negro Jaguaré* の柑橘類、柿があり更に高砂地帯独自の立地條件を活かした *Caxias de Sul* のアドウ等は古くから知られてゐる産地である。州内 *Caxias de Sul* のアドウは、余國敏に採られたもので、かつてはイタリア人植民地として







態度では、優生生産とはなり得ない。これは近年迄の優秀な結  
果枝や花蕾の形成に必要な養分がこの時期に於て充分蓄積されな  
ければ毎年連続して豊産を期待することは無理なことであつて、  
いわば御札と名づけられるものであるが、果樹の花蕾伸長期  
にも豊富な水分が特に要求されるのが常態であるが此の奥は当州  
の冬期が雨期であつて、その時期は雨期後期に入るのので大した問  
題はみられぬものと考えよう。この外中科、欖草、緑肥、刈草、  
盛枝など、結果量制限、葉割撤去などの栽培技術に対しても果樹植  
生を充分認識して、見事な果物も中法の上の上に受置出来る様  
、適作り、樹作りには特に考慮をばらさなければならない。

③ 集団栽培になると聖洲方面への出荷も考えなければならな  
きは先にも述べたが当州は気候的な不利があつて熟期は遅うして  
もかくなる。従つて品種の組み合わせも合理的に研究して、聖  
洲方面の同一品種と産量では合わない機選派しなればならな  
い。これは市場で鮮度、荷いたみなで若干の差が問題に  
なることをさけるためである。

④ 伯原に於ける果樹を考ふる場合、誰もが考ふるのはリンゴであ  
らう。現在では生果用として優れたリンゴ栽培地帯はない。し  
かも当州のリンゴの需要はおびたしいもので、一応如何なる小  
農村都市も雖もバナナとリンゴは殆んど年々消費される様にな  
つてゐる。従つて隣接国アルゼンチンから、これらの年間の需要を  
供給されている輸入リンゴの量は極めておびたしいものとなつ  
てゐる。おそらく当国のバナナの見送り品として輸入されている  
ものであつたが、それにしては驚異的過ぎる。

（ 兎も当州内でも特に博多地区一帯（イシゴ）を以て100KM以内  
）では不況が経済的に生果として充分に利用できる様にしてい  
ないが、一応栽培され、現在では夏果として扱つてゐることは、  
極めて興味を引く問題である。恐らく是も赤肉の品種で、かつ  
が有利であつたが先製からさつたものは、周知がしなからぬ  
該地方で栽培されている品種名は原品とすれば詳かでないが勿論

カリフォルニア州のサン・ジョアキン郡（San Joaquin）では、年一回リンゴ祭りを開催する程まで来った栽培があることである。当該地方では年々の盛衰が甚だしいが、アレン（Allen）とオネクロ州（Onegro）とを比べると大差があるところがあり、計画的に産業として栽培されるべきと認められる。品種としてもサン・ジョアキン郡がとりいれているものもそのおもしろい見所である。いまだ生産用として扱われていないリンゴの栽培までには至っていないが、今後この様な適立地条件を生かした特産農業の推進は伯國農業に一大副産物を生かすものであつて、農業の近代化の方向の一つとしても真剣に考えられねばならぬ。時代が来ている。当海協賛支那が現在推進しているサン・ジョアキン郡クリフバーノス郡ラーモス村住地が現地の州政府との協約によつて認められていることはその意味でも大きな意義があるわけである。今後のリンゴ栽培は、すでに形だけでもすでに導入されているケースがあるのでその問題も充分検討し、結果、やり繰りによつては、これは仲むすぶ信頼のもとに推してゆきたいと信じている。以下これらの問題を含めて広く当普及がサン・ジョアキン郡の寒冷地に於けるリンゴ栽培計画について、問題点となるものを拾ひあげてみよう。

先ず第一は品種の問題であるが、加工材料用として採別に問題はないが、もし生産用を目的とする場合は、現在市場性の認められているアルゼンチン産アリスマス（Delicatus）を念頭に置くべきである。これは伯國の消費者の嗜好が主によつて長年おなじみであるもので、伯國人は特に形質の整つたものに対して、それを見たためそらしとする習慣が一般にないからである。

第二は現在生産されているカリフォルニア系リンゴでも商品としては極めて粗末なものである。輸入では市場に河抗してゆく準備出来ていない。この原因の大部分は栽培技術の劣悪によるもの

であるので、何よりも技術振興は基礎となる問題である。

オーストラリアは、今後伯国生産のリンゴが市場に大々的に出廻つても伯国東部の貿易事情に新たな見込物資が出現しない限り、これを駆逐することは出来ないもので、その裏面にリンゴとレタス等の品物についてだけの手押し切つてゆこうとするのは大いにつまじまなければならぬ。恐らく当州やサンタカタリーナ州の有力な産物に発展すると考ふるが、それだけに自重して計画のハネアガりのない様慎重に進まなければならぬ。

④ 南大河州の冬期の気節風はしばしば20〜30km/hの突風を伴ふことがあるので特に落葉果樹については其の被害を少しも軽視しない。樹足の老朽、損傷は見逃せず、しかも樹枝の整備上風を避ける側は如何しても必死が抑制され、多かれ少かれ孕勢の悪い樹形になりやすい。更に春の萌芽がとこなれれがちで、これが結実率にも大々く影響するものであるから、防風垣の設置は是非共考えねばならない問題であらう。幸い当該方では比較的必死の強いユーカリ、アカシヤ等好適な樹種が豊富に入付出来るから、これを利用するによい。

⑤ 果樹園芸の專業は分力分配性がうみても、大市場の安定性がうみても多くの場合に得策とは云えない。特に限られた一二の果樹では尚更である。多くの種類を組み合わせた果樹経営は経営理論からすれば申し分ないが、立地的にみて、これがうまくできるところは少いものである。聖州の新興果樹園芸は委細養豚等の中小有畜経営と組み合わせられていると大いに参考とすべきである。日本でも徳州のリンゴ栽培が酪農と組み合わせられているのと同じで、当州では豚羊養鶏が原価の不安定に施設費償却の難から多少の困難に今では伸びているが、こうした型の経営の成功は果樹園の管理を幾分減らす重要な要素をもつていられる。よきと云ふならば、やはり有畜果樹園芸は将来の有望な農業形態の一つとして考ふるべきである。尚農産加工業の振興は今後の果樹園芸の発展に大いに寄与するものであるから、同時に検討してゆ

かなければならない。

② 近郊で果樹経営を進めることは、今後も可成り盛になると考えられるが、果樹経営を独立して考えるのでなしに、地理的自立地条件を十分に生かして総合形態にもつてゆく研究は面白いのではなからうか。例えば飼料作物(牧草、マンジオカ、サツマイモ、トウモロコシ類) → 酪農 → 果樹園有機質肥料の組み合わせで直接の収入面を牛乳と果樹により確保する形があろう。その際経営者の趣味や資力、地域によつて、それぞれ特長のある経営が出来るものと考えられる。

### 第五項 酪農経営の意義とその導入について

当州は伯国では最も主要な畜産州として知られていることは、余りにも有名である。これは当州の自然的な地条件が養畜に好適しているからである。気候は温帯内陸性で地形が一般的中高程度の高草原で構成されておられ、大地主は殆んど例外なく放牧の畜産を営んでいるわけである。これらの家畜のうち乳牛は比較的、環境の自然的諸要素に敏感なもので、他の家畜より飼いが難しいのが一般に指摘されているものであるが、この点でも当州は問題になる点はない程めづまれているものである。

最近年州内各都市の人口は商工業の発達と共に大きく伸びつゝあるもので、都市の牛乳消費量もこれに従つて大きく伸びつゝある。周知の様に牛乳なしではすまぬ伯国の食習慣を考えると、不足ぎみの牛乳生産は極めて有利な管農となることは間違いない。

今日の酪農業は牛乳の集荷網の強化に従つて、可成り遠隔地に迄伸びているが、近郊地帯でも *Passo do Feijó* 地帯、*Granatá*、*Atapuã*、*Viamão*、方面に見るべきものが多いが、その技術水準はおくられていて、数でこなす様式のものが多い。これは減乳能力が極めて多く、しかも飼育法が他の役肉用飼育法から余り脱離して、くいつゝ、経営そのものについて粗放的でよかつた時代の状態

をいまだ続けていゝるもので、今後の移入は短期的なものとなる  
 るかと考へる。以下邦人の酪農について考へてみることにす  
 る。

① 当州は酪農が非常に盛況に上つて、酪農の生産を維持  
 して行くことは幾ら容易でない、それ程自然の土地條件に恵まれ  
 ており、特産物としての強みを發揮するでせう。現在の当州邦  
 人の経済的、営業上の頭づらは当州独特の酪業移住に取つ組んで  
 いる者が少いことが最大の原因でもある。従つて幾らかの長は  
 畜産にとび込む必要がある。

② 当州の畜産は巾広いものであつて、この内大型牧場式経営は  
 現実の肉産として、邦人の進出を促さぬ程スケールが違ひすぎ  
 ないから日本人の畜産についても備置設備は比較的容易に築け  
 る優秀性を有しているもので、聖州に於ける邦人の養鶏はそのよ  
 い例である。こゝで問題になるのは日本人の優秀な技能が充分  
 に發揮出来ぬ養牛、養豚のあたりは日本人に適する規模の畜産業を  
 営むことに思ひ出すが如い事である。養鶏、養豚、養牛、養羊  
 など進出する部門は多いが、現状の邦人は経済的に段階的にす  
 ぐらとび込むものもある。酪農は遠郊邦人の移住で最も導入し  
 やすい畜産の一つである。

③ 農場の土地條件の如何によつては経営としての酪農業は近郊  
 農業の構造改善策として、短期的なものとしてとりうる。即ち酪  
 農をやばとする農業構造は乳価は経営政策的に④値が定めらるべ  
 きより、一応養菜等に見られる様な生産価値現狀などはありえな  
 い。更にこの酪業の副産物としての肉質質は都市近郊の酪農に  
 は切りはなされぬものである。斯うして集約化して土地の生産力を  
 高めて、部分的に維持増進してゆく場合は酪肥料中心の近郊蔬菜経営に  
 せよ、これを中期的にも大きな前途を有すると思ふ。

④ 労力的に制約される面があるが畜産の管理については、日本人  
 の天性から技能と導入すれば大して困難は辨われないと思ふから

⑤ 乳牛飼育に必要の飼料はそのうち飼料の半数を期すべし。その意味でマンツオカ、サツマシヤ、又冬齋の緑飼をかねた甘藷乳ヤサイ等は飼料作として、又その中の優品類を飼料として、粗めを交えたものとなることが確実である。近郊農業協会の組合が濃飼と求めているが、雑物の複合とすべし。この導入を考えることは面白い。

⑥ 乳牛が濃飼飼育の悪いものであつたり、乳交組つ々なめの場合がある。その人の今後の進歩は高純度牛を繁殖した酪農を目標とすべきである。この交配する法と牛の権限は共同組合によつて進められ、或は関係機関の援助を得るべきである。雑交は是非さけるべきである。

⑦ 酪農と雑草の導入のために資本がかかるのは悪い。特に優良牛はそれだけに高価であるので、共同組合で有利な入手法を考へすべきである。

(1) 一般的に云つて当州の酪農も生産資材高騰でやりくりしてゐるが、これは料産性にかけた経営技術の欠陥でその最大の中のはよい牛を持つていない事である。能力の悪い数多くの乳牛を飼育するに必要な経費が多くなるためである。酪農の富強関係が不安定になつてゐる現状で進歩的な経営者がこの面を突破するには、今日は純好のチャンスである。出来上つたものが無い事は、考えよきではそれこそ邦人の強みである。

⑧ 当州の酪農家は酪農家の福利増進を目標に協同組合が地元に動いており、前述の通りホルトアレケレ市を中心にして主要幹線道路は組合の手配がなされてゐるし、濃厚飼料は必要に即座して送られる事に話されてゐるものであつて、この組織機構にすぐれた経営者を持つて飛び込んでゆけばよい。

⑨ 昔那ホルトアレケレ市から50km~70kmはよれると好適な場所があるところが多い。そして池田市に般的な酪農の中心地がある。酪農の中心地は昔、今、あつたのである。そこで水産、酪農、

蔬菜の組み合わせと価格は今後の種人選抜栽培より最も重要な経営形態となるラコビが期待されるので、この種に有關する調査も当海協連では強化しようである。

## 第六項 ホルトアレグの市場とトマトの需給について

近郊農家にとってトマトの価格がどう動くかと言ふことは種人がこれに極めて大きな期待をにかけている以上常時最大の関心事であることは去らざるを得ない。しかも *Porto Alegre* 市場管では、トマトとナスの価格の動きは相互の多くの種類の蔬菜にも波及するこれが多いのであるから尚更である。一昨当州のトマト生産について、その需勝能力とどの位あるのかを推測してみなければならぬのであるが、これが統計的になかなかつかめない。に大きな困難があるものである。その原因は察せらるるが何と云つても生産地域が狭くて広い事、市場の販路機關が個人売し仕切である事、地州への輸送流通網が発達して、輸入と並ぶものが多い事などである。これに加えて陽明畑と露の市場調査団体や機關がその能力を充分に發揮せず、年別、月別週別、日別に入荷量、販売取引量及び安値市場の記録がとられておらず、経済性を論ずるにたつ統計資料も殆んど皆無に等しいことである。1956~7年頃の干熱生産時期では7KG 知棟で30~35CRBで出巻して最盛期の12月中旬、その頃は最盛期は12月20~25日(のクリスマス前後であった)には、やはり70~80CRBを降下してあり、当時の一般経済の割合安定した時代でも、入荷量と需要量のアンバランスが崩れた時はその値下りは甚だしく、1959年には箱50~30CRBの値段がマースされたこともある。これは聖州、パラーナ州、サンタカタリーナ諸州のトマト栽培も周年生産の域には達してあらず、従つて当州への移出量も量的には大して大きいものではなかった。概して当州のトマトが時期的に7、8月か9、10月にかけて出つくし、その他の月は殆んど品物がなかつた時代であるから、その間の補充まわつた状態である。これは既述の



ポルトアレガ、市場運送の便が、この時期は既解しやうい、  
 その後、その市場の時期の価格が極めて高値であり、そ  
 のために前年よりもおびやかすのよし、価格調整局（COP  
 P）により価格制限をうける様なことになつたものである。  
 しながら当地方のトマト消費量は異常なまでに伸び続け、その因  
 完成された国道の舗装道路の完成、そして他州の生産増強等  
 毎年のトマト需要の大半を他州からの移入品でにまされる結果  
 となつたわけである。

前述の通り、トマトの生産過剰が云々論議される様になつたのは  
 この二、三年の間であるが、これは端境期の雨が極めてせば  
 められる程に特定の時期をぬらう生産がふえた、ためであり、一  
 般に指摘される様になつた。単作経営の結果、のみならず、考  
 えてみれば当州産のトマトは、他州産を際いほどの時期にも出  
 きたる様な状況の上で他州からの補給があるの、のみならず、高  
 であるが、これまでの当州産の経済は、そうはなつてしま  
 う現状では他州からの入荷量で随分苦境におりいつている真かき  
 いものである。そして現在でもおき市場への輸送は電話、電報  
 などの急報機関で極めて敏速に行われる態勢が出来ているし、当  
 地方の品物の量は云うまでもなくその品質が悪かつたりすこと  
 がさす、とつておしよせると云う様敏さである。特に早熟期には  
 当州産は品質的にも量的にも或るレベルに達しているので他州か  
 らも警戒してその大量には移入されないが、その他の時期では、  
 質量共に当州産のものは押され続け、来たに云えると思う。こ  
 う云う移入トマトの動きに呼応して地理的に何れにしても優位に立つ  
 当州のトマト作が、この状態を原状す事は出来ず、それ迄自給的  
 地産生産出来ぬと思ひ込まれ、いた同年の生産が、生産者の努  
 力によつて可能になつたのである。この英7〜8年前のポルトア  
 レガレ近郊のトマト栽培を、こゝ迄伸ばして来た邦人の突力は高  
 評価されるもので、特に伯国人の邦人に対する認識を高めさせる  
 のに、極めて大きな功績となつた。

そして九州からは当組の利益資本の抽出した商業経済でソロバ  
 ノが黒になれば通慮なく持ち込ませぬことは通慮も愛りはない。  
 これに対して当組の生産者も肥前がらぬと断言を條件、片拵して、  
 技術的練磨を伴いながら徹底的に生産することを目指さる様  
 なり現状では少くともトマトについて九州内産のものに肥前産の  
 ものとが、はげしい市場防衛戦を展開してゐるに於つてよく、今  
 後もますますこの戦いは火熾く燃らすことにならう。

当組邦人の専任、ア党からして多量に輸入する、ア党の輸入は如  
 年獲の収穫を目的として過去において設備投資を行なつた、ア  
 党はとりまなおさず、こうした事情に於ける必然的の進み方であ  
 つたと思ふ。これは最近の日本経済の苦境に於ける、ア党の  
 輸入、所得増進計画推進のため（基礎）の設備投資を中心とする  
 増資が輸送に於つた生産の節果は、輸出売りさばきのための市場開  
 拓が最大の課題となる。この様にして、実際は需要量と供給量  
 の値の入荷量が必要なのか、或は生産者の目標価格に於いて、必  
 ずの程度の入荷量でその目標価格を出せるのか、これを決定する  
 ことは、極めて難かしくなつて来ている。従つて現状では市場  
 を一巡りして、今日の實際価格を参考にして値段がつけられてい  
 るもので、場合によつてはびくびくとする精神的圧力を他から（主として  
 買手側の）うけて突進試みをおく際も受けかねない。否  
 売らされてゐると思つてよい。

更に生産者自身が価格の協定をするに於て、販路価格の採り  
 合ひをする。これもしばしば思われ、時には自分のトマトを買わせ  
 る為に正値と偽元と高値を欺え、他人が高値を云つてゐる間に  
 ア党をすり抜けてしまふ様な卑怯な手法が当然とされて  
 いる。これも一種の弊害であるので一概には云ふことが出来な  
 い。しかしこの事が全体のトマト価格協定を或は価格維持を行  
 うとせず採ることになれば、その採る前法と共すかたは  
 はゆかまい、水城市場入荷量の推定に用いられてゐる、ア党の  
 輸入量は、これは大してあてに成らぬ、ア党の輸入は、進

定する人の立場や精神状態、健康状態などでも、そのつける印象と云つたものはまちまちであつて、特に小規模で生産している者が各大河川の橋渡し人々の輸送設備で運ぶ正荷があまり荷重が重く多い時は、全体の入荷量を適格に把握する場合大きな誤差を生ぜしめるものである。少くとも統計など云うものは正確であつて始めて復土つもので、不正確な統計は去らぬ方がよい。例えば今夜の出荷者数はおよそ50人で1人平均50箱くらいだから合計2,500箱とみなす、上記の様な生産者の態度からすれば余り正確な箱数は云いたがらない。これらの事が市場の入荷量や当日時刻の実績価格を正確にキヤツクできない最大の要因の一つになつていゝと云ふよう。

従つて値段の下げ合いをしたとか誰が値段を崩したとか云つた様な見解しれ風景もかもし出す事であつて、場合によつては前に食つたミツベ返しの討を打つ様なことを平気で繰り返している現状を大いに反省しなければならぬ。値段の協定をすむことは極めて美しい言葉であつて、これが出た時代は正しく過ぎてしまつたもので特定の時期の様にはるかに需要を上廻る様になるになると、当然販売している人数もふえるし、品質の規格もまちまちで値段の協定もできぬので誰が下げた能ひ弱したとかミツベを向腹にする方がおかしいと云えるのである。單争と対決しなればならない生産者が、生産者とも対決しなればならない必然的結果である。

物で7月7日頃の値付推定本数は郊人のみで約700万本とふられたが、これは都露や地区会などが割合に釣く様になつてからの集計であつたので、実績としてもほゞこれに近かつた筈である。そしてこれらの値付されたトマトが収穫期には実際には理論上の出荷量より遙かに少くなつたために一応その年としては生産者にとつて不足のない販売商実績で終つてゐる、勿論前述の様に予想出荷数だけのものが市場に現われなかつたのであるから、利益の無かつたり欠損になつたとする者も当然現われるわけである。

が、先ず中作位を保ち続けたものは可成りの利益を得ており、上作であつたものは大いに儲けたというわけである。そして次年産はその儲けたものに対するおこがれのためインフレーションによる生産コストが倍増しているにも拘わらず一心に生産拡充を試みたに云うわけである。遂に推定180万本と云われる無量のことを1962年春は敢てしてしまつたものである。大体に於て種々の実例から云つて天候などが順調で特別な欠実さえなければ大型トマトの場合、一畝土作として10,000本当最盛期日100~120箱が成熟するものであつて、一畝最盛期と目される日に出荷された箱数の約10倍は全体の収量の最値とふめるものである。(これによつて空箱の数をControlする) こうなると若し、平均に中作位の出来のトマト作が得られたとすれば180万本では最盛日18,000箱熟して出荷に供されることになる。これが病虫害などで間引きされるのをどの位にみたに云うのであろうか。全く冷やものであろうか。こゝではトマト作の経営上の諸問題等はすでに詳細検討済みであるので、この位にしてポルトアレグレ市場関係で次の様な計算を試みることは極めて参考になるのではないかと思ふ。現然としては此處を得ない方法で、今後更に需要と供給の所詮市場性については、もつと科学的実績資料についてみてゆかなければならないものでその奥市場での日別入荷実績、販売実績、及び価格実績を記録してゆかなければならない。

先ずポルトアレグレ市を中心とする近郊衛星都市の消費人口を100万人とする。

早熟栽培型のトマト出荷最盛期は17月であるが収穫開始から収穫終り迄のいわゆる採收期間は大型トマトでは大体50日であるが、この時期に100万本の植付数があつて、一畝トマト作として経営上よりたつと考える程の作況であつた時の生産箱数を算術的に計算すると次の式の様になる。

$$100万本 \times 2kg \div 25kg = 80,000箱$$

これが7週間(50日間)に平均して出荷されるとすれば

$$80,000 \text{ 箱} \div 7 \text{ 週間} = 11,430 \text{ 箱}$$

$$1 \text{ 日平均箱} \quad 11,430 \div 6 \text{ 日} = 1,905 \text{ 箱}$$

この1日当入荷数(成熟出荷数)はトマトの採收期間50日に毎日平均に同量が收穫されるのでないから、種々の実績資料から次の通りになることを念頭におかなければならない。

即ち50日の内中20日間(3週間)でおよそ60%以上が收穫されることによる。従つて最盛期1日当りでは概略ではあるが

$$80,000 \text{ 箱} \times \frac{60}{100} = 48,000 \text{ 箱} \quad (3 \text{ 週間分})$$

$$48,000 \text{ 箱} \div 3 = 16,000 \text{ 箱} \quad (1 \text{ 週間分})$$

$$16,000 \text{ 箱} \div 6 \text{ 日} = 2,670 \text{ 箱} \quad (1 \text{ 日分})$$

次に、100万本 $\times$ 2Kg $=$ 2000000Kgのトマトを50日間に700万人の人口が消費すると(同率に)1人当り2Kg $\div$ 50日 $=$ 40g/日に入れられる。7家族5人平均の家庭では40g $\times$ 5 $=$ 200g毎日食べる筈になる。この様に算術式をならべてみると、100万本の同一時期植付をするときは、

- ① 若し天候條件に恵まれ、栽培技術の進歩がこれに伴つて伸びてゆけば、市場への出荷量は、それだけ確實になつて値段は保証の限りではないこと。
- ② 誰かの間引かれて結局は出荷に至る迄に抑えられるので、たゞい100万本植つても殆どから生産過剰と決めることはいけないと考へた時代はもうすぎている。何故なれば生産費が1箱当り500CR $\div$ 600CR $\div$ と追つて来ているにも抑えられず、トマト作を続けようとするのであるから、それだけ命がけで対策しつゝあり、植えられた以上それ相当の箱数が出ると思つておかなければならないこと。
- ③ 誰かごやられると云ふ事を自分にもおぼてはめなければならぬ事。

(10)

等の諸事項はトマト栽培と共に切りはなす事は出来ないが、  
としてこれまで算定した結果は、その生産量は需要に足るかに  
廻る由りであつて、自給として現在生産者が減つてゐる「縮小」  
の恐れは、かたえられようもない。

トシが当州内の初給が平均7,000位でおさまつてゐる限り、  
年によつては異なるが、この高値を静観してゐる事が出来ぬ程と  
州外の生産も同様に動いてゐる等を忘れてはならない。その意味  
でも邦人生産者の作は統計業務への協力は絶対に必要となり、  
これによつて各営農者の営農の指針を思出す様にならねばなら  
ないと思ふ。

